

特218

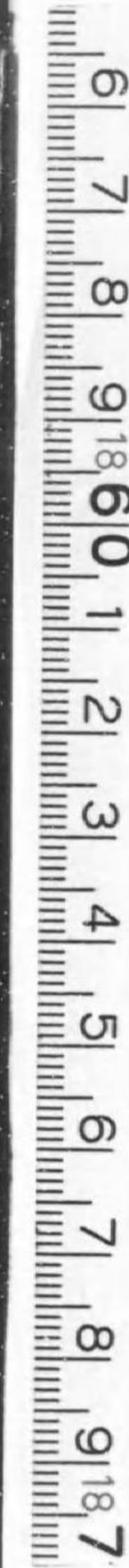
391

校學小等高常尋田寺郡世久府都京

號四第育教田寺

るけ基に理原作勞人全ニ土郷

味吟再の容内育教科合綜設特



始



特218  
391



京都府久世郡寺田尋常高等小學校著

郷土と全人勞作  
原理に基ける

特設綜合科教育内容の再吟味



## 序

従来の教育が餘りに知識の注入と同時に抽象的、概念的、劃一教育に陥つて實際生活から遠ざかり、徒らに象牙の塔に閉ぢこもつて汗なき人間の養成に終つて居た様に感ずるのはたゞに私獨りの感じではあるまい。甚だしきに至つては都市も農村も同様な教育計畫のもとに同様な教育實踐が行はれて居たかの様に思ふ。これは私の極端な偏見かも知れない。然し私の教育に實地運動にはさうしても社會の現實、社會の動きから切り離れて考へることは出来な  
い、と同時によく子供を凝視して子供の内在性たる自發的勞作活動を顧みないわけには行かない。郷土の綠野に生命の曙光を浴びて始めて發芽し成長する子供の精神的財産も亦勞作によつて發展せしめらるゝものではなからうか。

従つて我が郷土寺田村の教育にはこうした考へを根幹として生々發展を期しつゝあるのである。昨年の春、橋本訓導を主査として「郷土に全人勞作原理に基ける綜合科教育の實際」なる眞剣な歩みの跡を纏めて諸賢の御指導を仰いだわけであるが、本年度に於ては更に第二次的展開を期すべく引續き橋本訓導を主査として同人各々個性に應じて研究の部署を定め、回を重ねるこゝ幾十回、再検討、再吟味をして一層深み深みへこゝ進進を續けて來たのであるが未だ寔に貧弱な歩み、勇を鼓して茲に「郷土に全人勞作原理に基ける特設綜合科教育内容の再吟味」を題して公開の運びに至つたのである。

今日新興日本教育が純正なる姿態を以て開展せんとする時私共同人は私共の歩みに更に力強さを感じつゝ更に更に崇高なる聖戰に感謝の微笑を漂へつゝ奮闘を續けてゐるのである。

同人各位が血に染み汗にまみれ、涙に咽びつゝ日夜懸命の努力を捧げてくれることを思ふ時、感慨無量たゞゞ感激の外はない。

最後に本編はかうした同人の個人的努力の結晶であるが、その誕生に於てその生長に於て、前京大總長小西重直博士を初め、静岡縣師範學校鱒坂二夫先生、玉川學園の谷口武先生、京都第二中學校川端常五郎先生、前任校長たりし京都府視學水山光高先生の御盡力に御指導によつて完成し得たのである。茲に特に銘記して感謝の赤誠を捧ぐ。

昭和十年三月二日

郷土と全人勞作 原理に基ける 特設綜合科教育内容の再吟味(目次)

一、特設綜合科教育の原理とその實踐機構

第一章 綜合科教育の原理	一
第一節 目的の原理	一
1、勞作教育と綜合科教育	一
2、郷土教育と綜合科教育	二
3、日本精神と綜合科教育	三
4、結語—具體的日本教育道	五
第二節 方法の原理	六
1、勞作の原理	六
2、郷土の原理	六
3、社會の原理	七
第二章 綜合科教育の實踐機構	七
第一節 綜合科教育の目的	七
第二節 綜合科教育内容とその指導精神	七
1、綜合科の教育内容	七
2、教育内容の指導精神	八
(1)美的勞作としての兒童劇の指導精神	八
(2)認識的勞作としての郷土文化社會の指導精神	九
①郷土自然科の指導精神	九
②郷土文化科の指導精神	九
③郷土公民科の指導精神	九
④筋肉勞作の指導精神	一〇
⑤園藝の指導精神	一一
⑥農村工藝・農産加工の指導精神	一一

第三章 改訂せられたる綜合科教育の材料

1、教材系統改訂の精神とその展開	一
①改訂せられたる教材選擇・排列の學年別比率	一
②改訂の骨子	二
(2)改訂教材系統生みの悩み	二
(3)改訂精神の展開	三
2、改訂綜合科題目系統一覽表	三
3、教授細目の修正と綜合科掛圖の編輯	三
(1)教授細目の修正	三
(2)綜合科掛圖の編輯	三
第四節 綜合科學習指導法	三
1、綜合科學習の時間	三
2、綜合科學習の場所	四
3、綜合科學習の指導法	四
(1)學習の一般的指導法	四
(2)各學年の指導着眼點	四
(3)學習指導上の一・二の問題	四
第五節 綜合科學習の具體的發展	四
附録 重なる参考書目	五

二、特設綜合科に於ける兒童劇指導の實際

第一章 兒童劇指導の目標	一七
第二章 兒童劇指導の材料	一七

第一節 題目選擇・排列の標準	一七
第二節 改訂されたる各學年兒童劇の系統	一九
第三章 兒童劇指導の方法	一九
第一節 脚本製作の方針	一九
第二節 劇化の指導法と其の要件	一九
第三節 道具製作の方針	一九
第四節 綜合藝術への裏書	一九
第四章 兒童劇指導の實際	二四
第一節 改訂系統の劇指導要目	二四
1、尋一劇指導要目	二四
2、尋二劇指導要目	二四
3、尋三劇指導要目	二五
4、尋四劇指導要目	二五
5、尋五劇指導要目	二六
6、尋六劇指導要目	二六
7、高一劇指導要目	二七
8、高二劇指導要目	二七
第二節 體 驗 記 録	二七
1、劇 郷土美談安田小三郎氏の出征	二七
2、劇 モモタラウ	二七
附録 重なる参考書目	三二
特設綜合科に於ける	三四

三、低學年の自然科・郷土地理・國史教育の實際

第一章 自然科・郷土地理・國史教育特設の基礎	三五
第一節 兒童教育の本義	三五
第二節 郷土に於ける兒童生活の諷觀	三五
1、郷土に於ける兒童生活	三五
1、郷土地理の新系統	四六
2、教材の選擇・排列の標準	四七
第三節 低學年國史教育の新系統とその選擇・排列の標準	四七
1、尋四までの國史教育の新系統	四七
2、教材の選擇・排列の標準	四八
第四章 自然科・郷土地理・國史學習指導の實際	四八
第一節 指 導 要 目	四八
1、自然科指導要目	四八
(1)尋一自然科指導要目	四八
(2)尋二自然科指導要目	四九
(3)尋三自然科指導要目	四九
2、郷土地理指導要目	五〇
(1)尋一郷土地理指導要目	五〇
(2)尋二郷土地理指導要目	五〇
(3)尋三郷土地理指導要目	五〇
(4)尋四郷土地理指導要目	五〇
3、低學年國史指導要目	五一
(1)尋一國史指導要目	五一
(2)尋二國史指導要目	五一
(3)尋三國史指導要目	五一
(4)尋四國史指導要目	五一
第二節 體 驗 記 録	五二
1、自然科の體験記録	五二
△尋一 ある春の日の校外學習	五二
2、郷土地理の體験記録	五三
(1)尋三 寺 田 村	五三
(2)尋四 交通しらべ	五四

(1)兒童の郷土生活の發展相	三五
(2)兒童の郷土生活内容	三六
2、兒童の理科的・地理的・歴史的・生活的具體相	三六
第三節 低學年の諸教科に現れたる理科・地理・國史内容	三六
1、諸教科に現れたる理科内容	三六
(1)小學國語讀本・尋常小學國語	三六
讀本に現れたる理科内容	三七
(2)新訂尋常小學唱歌(文部省)に現れたる理科内容	三九
2、諸教科に現れたる地理内容	三九
(1)小學國語讀本・尋常小學國語	三九
讀本に現れたる地理内容	三九
(2)新訂尋常小學唱歌(文部省)に現れたる地理内容	四一
3、諸教科に現れたる國史内容	四一
(1)尋常小學修身書に現れたる國史内容	四一
(2)小學國語讀本・尋常小學國語	四一
讀本に現れたる國史内容	四三
(3)新訂尋常小學唱歌(文部省)に現れたる國史内容	四四
4、文部省の意圖	四四
第二章 自然科・郷土地理・國史教育の目標	四五
第一節 自然科教育の目標	四五
第二節 郷土地理教育の目標	四五
第三節 低學年國史教育の目標	四五
第三章 自然科・郷土地理・國史教育の材料	四六
第一節 自然科の新系統とその選擇・排列の標準	四六
1、自然科の新系統	四六
2、教材の選擇・排列の標準	四六
第二節 郷土地理の新系統とその選擇・排列の標準	四六

四、特設綜合科に於ける日本公民教育の實際

3、低學年國史の體験記録	五八
△尋二 白 兎	五八
第三節 學習指導案 落葉	五九
△尋一自然科指導案 落葉	五九
附録	六〇
一、郷土博物館の經營とその標本目錄	六〇
二、郷土史一覽表	七一
三、郷土年中行事一覽表	七二
四、重なる参考書目	七四
第一章 小學校教育と公民教育	七五
第一節 日本公民教育概論	七五
1、公民の意義	七五
2、日本公民教育の意義	七六
第二節 小學校教育と公民教育	七六
1、公民教育の可能性	七六
2、小學校教育と公民教育	七七
第二章 綜合科に於ける公民教育	七七
第一節 兒童の公民生活	七七
第二節 綜合科に於ける郷土公民科	七八
1、郷土公民科特設の必要性	七八
2、道德意義の發達より觀て	七九
3、公民科特設論	七九
4、郷土公民の長所短所	八〇
5、結 語	八一

第三章 郷土公民科教育の材料	八二	第一節 土による人間教育	一〇七
第一節 題目決定の態度	八二	第二節 勞作による人間教育	一〇七
1、児童生活の立場から	八二	第二章 園藝・飼育教育の目的	一〇八
2、勞作の立場から	八二	第一節 園藝教育の目的	一〇八
第二節 改訂せられたる郷土公民科の新系統	八三	第二節 飼育教育の目的	一〇八
第四章 郷土公民科指導の實際	八三	第三章 園藝・飼育教育の材料	一〇九
第一節 郷土公民科の指導過程	八四	第一節 改訂せられたる園藝教育の新系統	一〇九
第二節 指導要目	八四	1、生産園藝系統	一〇九
1、尋五郷土公民科指導要目	八四	2、裝飾園藝系統	一〇九
2、尋六郷土公民科指導要目	八四	第二節 新設せられたる飼育系統	一一〇
3、高一郷土公民科指導要目	八五	第三節 教材選擇・排列の標準	一一〇
4、高二郷土公民科指導要目	八六	1、教材選擇の標準	一一〇
第三節 體験記錄	八七	2、教材排列の標準	一一〇
1、尋五村の害虫	八八	第四章 園藝・飼育教育の方法	一一〇
2、尋六奥山植林地	八八	第一節 園藝園の經營	一一〇
3、高一産業組合	八九	1、園藝園の經營	一一〇
第四節 學習指導案	九一	2、園藝園の配置圖	一一〇
1、尋六日光寫眞の製作	九二	第二節 藥草園の經營	一一一
2、高二久世郡の神社祭典	九二	第三節 動物飼育の經營	一一一
附録	九五	第四節 園藝・飼育教育指導の具體的體系	一一一
1、國定教科書に現れたる公民教材一覽表	一〇〇	第五章 園藝・飼育教育指導の實際	一一一
2、児童の生活環境に訓練方針	一〇〇	第一節 園藝教育指導要目	一一一
3、重なる参考書目	一〇五	1、生産園藝指導要目	一一一
		(1)尋一生産園藝指導要目	一一一
		(2)尋二生産園藝指導要目	一一一
		(3)尋三生産園藝指導要目	一一一

五、特設綜合科に於ける園藝・飼育・工作教育の實際

第一章 園藝・飼育教育の基礎 一〇七

(4)尋四生産園藝指導要目	一一三
(5)尋五生産園藝指導要目	一一四
(6)尋六生産園藝指導要目	一一四
(7)高一女生産園藝指導要目	一一四
(8)高二女生産園藝指導要目	一一五
2、裝飾園藝指導要目	一一五
(1)尋一裝飾園藝指導要目	一一五
(2)尋二裝飾園藝指導要目	一一五
(3)尋三裝飾園藝指導要目	一一五
(4)尋四裝飾園藝指導要目	一一六
(5)尋五裝飾園藝指導要目	一一六
(6)尋六裝飾園藝指導要目	一一六
(7)高一女裝飾園藝指導要目	一一六
(8)高二女裝飾園藝指導要目	一一七
第二節 體験記錄	一一七
1、園藝指導の體験記錄	一一七
(1)尋一の園藝	一一七
(2)尋二の園藝	一一七
(3)尋三の園藝	一一七
(4)尋四の園藝	一一七
(5)尋五の園藝	一一七
(6)尋六の園藝	一一七
2、飼育の體験記錄	一一七
(1)尋三鳩の日記	一一七
(2)尋四雞の日記	一一七
(3)尋五男兎の日記	一一七
(4)尋五女兎の日記	一一七
(5)尋六男兎の日記	一一七

(6)尋六女兎の日記	一一七	第一節 園藝・飼育教育指導の實際	一一一
第三節 學習指導案	一一八	1、生産園藝教材・勞作指導系統一覽表	一一一
△尋三なんば・コスモスの植込	一一八	2、裝飾園藝教材・勞作指導系統一覽表	一一一
附録	一一八	(二)工作教育の實際	一一一
1、生産園藝教材・勞作指導系統一覽表	一一一	第一章 工作教育の理想	一一九
2、裝飾園藝教材・勞作指導系統一覽表	一一一	第一節 郷土に立脚せる工作教育	一一九
		第二節 經濟に興味に立脚せる工作教育	一二九
		第二章 農産加工・農村工藝の必要性	一三〇
		第一節 農村の自給自足	一三〇
		第二節 餘剩勞力の活用	一三〇
		第三節 本質的教育價值	一三〇
		第三章 工作教育の材料	一三一
		第一節 工作教育に於ける男女の特異性	一三一
		第二節 農村工藝の新系統	一三一
		1、新系統一覽表	一三一
		2、教材選擇・排列の標準	一三一
		(1)選擇の標準	一三一
		(2)排列の標準	一三一
		第三節 農産加工の新系統	一三一
		1、新系統一覽表	一三一
		2、教材選擇・排列の標準	一三一
		(1)選擇の標準	一三一
		(2)排列の標準	一三一
		第四章 工作教育指導の實際	一三一

第一節 工作教育指導要目……………三三

1、農産加工指導要目……………三三

(1) 尋五農産加工指導要目……………三三

(2) 尋六女農産加工指導要目……………三三

(3) 高一男女農産加工指導要目……………三三

(4) 高二男女農産加工指導要目……………三三

2、農村工藝指導要目……………三三

(1) 尋一農村工藝指導要目……………三四

(2) 尋二農村工藝指導要目……………三四

(3) 尋三農村工藝指導要目……………三四

(4) 尋四農村工藝指導要目……………三四

(5) 尋五男女農村工藝指導要目……………三五

(6) 尋六男女農村工藝指導要目……………三五

(7) 高一男女農村工藝指導要目……………三六

(8) 高二男女農村工藝指導要目……………三六

第二節 體験記録……………三七

1、尋二 かるたづくり……………三七

2、高女 芋 羊 羹……………三八

附録……………三八

△重なる参考書目……………三八

—(目次終)—

執筆 者

- 一、特設綜合科教育の原理とその實踐機構……………橋本秀一
- 二、兒童劇指導の實際……………樺 覺 雄
- 三、低學年の自然科・郷土地理・國史教育の實際……………橋本 秀 一
- 四、日本公民教育の實際……………種 村 喜 雄
- 五、園藝・飼育・工作教育の實際……………今 西 誠 一

特設綜合科教育の原理とその實踐機構

## 第一章 綜合科教育の原理

### 第一節 目的の原理

#### 1. 勞作教育と綜合科教育

現實の世界は物と物とが相働く世界である。その現實の世界に於て人間は行爲をもち、物一般は物の働きを有して居り、しかも前者は時間的に後者は空間的に相働いて辨證法的合一の世界を構成してゐるのである。故に「我々の行動は、それが主觀が客觀を主觀化するといふ意味に於て、無限に直線的であり、客觀が主觀を客觀化するといふ意味に於て、圓環的であると共にそれが主客合一として、そこに現在が現在自身を限定するといふ意味をもたなければならぬ。我々は行動によつてイデヤ的なるものを見るを考へる所以である。人間が文化をもつ所以である。我々が社會的、歴史的であるを考へられるものによるのである。」(一)人のみが行爲を有し、人のみが文化を創造し、イデヤを見ることが出来るのである。されば、行爲、働き、勞作は人間の本質である。人間の本質なるが故にこゝに教育の本質を求め、過程を求め、究極を求めに聊かの不安も感じないのである。實に勞作こそは教育の第一義的な言葉でなければならぬ。

抑も勞作とは「肉體の純化である。」(二)精神が肉體を純化し、肉體が精神に活素を興へることである。しかも精神と肉體とが共和して沒我的活動に入る時、その最も崇高至大なる姿を見ることが出来る。「絶對の魂が勞作の中に吹き込まれたならば、實に勞作の大成である。」(三)獨逸今日の復興は實にフイヒテの勞作を主體とする愛國心の教育の賜であるではないか。かく考へられる勞作には常に二つの對立を考へることが出来る。即ち勞作する主體と、勞作が加へられる客體とである。人間的には精神と肉體、一般的には主觀と客觀とであり、個物と一般とである。この二つの對立が相働く時現實の世界が構成せらる

るのである。一は主觀が客觀を限定する作用、即ち主觀の客觀化と、他は客觀が主觀を限定する作用、即ち客觀の主觀化が行はれるのである。今私が、小西博士の勞作教育の思想を思索してゐる時、小西先生と私の間には思想的な距離があるけれども、これに熱中してゐる間に私の勞作教育我觀は、或程度まで客觀化され、又逆に小西先生の思想は私の體験を透して主觀化されて理解されるものである。このへだちりをへだちりとして、之に近づかんことを人間の行爲であり、人の人たる所以である。かくして永遠の今なる自己建設をなすものである。前述のへだちりをへだちりとする所に、敬の態度があり、之に近づき一致せんことを愛の態度がある。この敬・愛が、人間の具體的表現であり、勞作の發展相であり、文化の構成される根源的な姿である。この敬・愛の精神は單に人間行爲の具體的な姿のみならず、日本人にはこれを親心、子心として有つてゐるのである。この意味に於て、日本人こそ眞實なる行爲をなし、眞の文化を建設し得る言ひ得るのである。小西博士は「敬・愛・信の精神な家族的生活に於て最も自然に、且つ純眞に發達するものである。この意味に於て日本は世界に於て、一切文化の母たるべき敬・愛・信の精神を最も純眞に自然に、發達させ得る國柄であり、日本に於てこそ、眞實の文化が發展し得べき可能性が見出だされると言つてもよいのである。」(二)云つてゐられる。

この敬・愛の精神、親心、子心を中心生命とする日本人の養成こそ勞作教育の目的でなければならぬ。勞作を通じて文化が構成せられその文化の上にイデヤの世界を見ることが出来るのである。働くことが見ることである。「我々がイデヤを見ることは、それによつて靜觀の世界に入るのではなくして、眞の行動の世界に入ることでなければならぬ。新なる行動がそこから生れる世界に入ることでなければならぬ。」(一)實に勞作は日本人の特質であり、しかも地上に永遠の世界を



招來させる唯一の道である。

勞作教育を單なる勞働教育に見あやまつてはならない。單なる板鉛り誤つてはならない。實に勞作教育こそよき日本人の教育道であり永遠なる文化を地上に實現させる唯一の具體的教育道である。

本校に於ては、この勞作教育を教育精神とし特に特設綜合科に於ては、こゝに教育原理を見出し、過程を見出し、究極を見出してゐるの事を確認し、第二に教育方法に主觀の客觀化として内面化を考へ、客觀の主觀化を表現化として採り入れてゐる理であり、第三に教科課程として、先づ綜合的勞作として兒童劇の系統を考へ、可動的なる公民教育に於ても、勞作的體驗を重んじ、肉體の純化としての工作、園藝を課し之を重視してゐるのである。

### 2、郷土教育と綜合科教育

我々が生れ、我々が働き、我々が死にゆく、即ち我々の行動の場所は何なるものであらうか。我々が行爲をなす時には、對象を考へねばならない。その對象の世界は、歴史的、社會的な表現の世界であり爲が加はれば、單なる物の世界から文化の世界に移り行くものである。それ故我々の行爲の世界は、單なる客觀の世界でもなく、單なる物の世界でもない。さらば言つて、單なる主觀の世界でもなければ單なる意識の世界でもない。我々の行爲の世界は、實に了解の對象世界的である。それ故、我々の行爲の世界は、行爲的自己の如何によつて時間的に、空間的に、限定せらるゝわけである。

かくの如く我々の世界は我々の行動によつて限定せらるゝものである。我々の行爲するところ、そこには時間的なもの空間的なものの辨證法的合一の世界が構成せられてゐるのである。郷土とは其處に生れ、其處で働き、其處で死にゆく行爲の世界である。小西先生は「眞

に於ては、兒童の郷土意識の發展を左の表の如くに考へ、且つその様な郷土教育をなしてゐるのである。

無意識的無自覺的郷土時代		意識的自覺的郷土時代	
入學前の兒童	小學校の兒童	小學校の兒童	小學校の兒童
親(母)	私のうち	寺田村、寺田村(その附近)	日本(世界)
		郷土自然科、郷土文化科	日本公民教育

郷土教育は、親(母)への教育を出発點として、私のうち、寺田村、寺田村、日本國家へと展開し、それらの段階に於て、郷土の意味を了解させる教育である。それ故、郷土教育は母への追慕を出発し、よき日本人教育に参加すべきものである。

### 3、日本精神と綜合科教育

昨年度府下訓導の初等教育研究に於て、綜合科教育の實際について發表させて戴いた時、我々の綜合科は郷土と全人勞作原理に立つてゐる。こゝに申し上げたのであるが、この二原理が、現時の教育思潮の主流たる日本精神の教育に、如何なるつながりを有するかを考へて見たいと思ふ。私が常に初等教育界で不満に思ふことは、新しきを追ふ志向を有することである。新しきものは、必ず古きもの一脈の關係を有してゐなければならぬと思ふ。それ故新しきものを追ふ前に、先づ古きものとの關係を多ねばならない。この意味からも、是非三者の關係を究明したいと思ふ。

前述した如く勞作は人間の特質であつて、文化を創造することであり、文化價値を了解することであつた。しかも日本人は親・子の關係

の郷土は實に主觀と客觀との交渉の世界である。この交渉の世界の中心生命は感情による主觀と客觀の結合である。感情は實に眞の郷土の中心生命である。(三)といつてゐられる。郷土は行爲の必然の要請として實在するものである。それ故郷土教育は、勞作教育の必然の要求として課せらるゝべきものであると思ふ。勞作教育の行はれる所、同時に郷土教育が行はれてゐるべきであると思ふ。勞作教育は、教育本質の顯現としての教育道であり、永遠に發展すべき眞實を有し、郷土教育は之に隨伴して益々その圓環を廣め深めて、勞作教育の支柱となるべきである。勞作教育を中軸として、郷土教育が動き行く時、日本教育道は如實に示され、永遠に力強い足跡を祖國日本に印するのみならず、世界に開明するものであると思ふ。

郷土を其處に生れ、其處に働き、其處に死にゆく行爲の世界を考へる時、郷土教育の中心生命は行爲的自己の生命に觸れるものでなければならぬ。小西先生は「郷土科は、子供が育ちつゝある土地を郷土となし、其處に關係ある客觀的事象を教授するといふ意味のものではない。主觀と、客觀的環境との接觸交渉によつて、自然に發達せる感情を中心として成立せる、無意識的、無自覺的郷土より、更に意識的ある。(三)といつてゐられるのは、初等教育實際家の最も注意を要する一點であると思ふ。

郷土教育は、人の成長と共に發展せねばならぬ。固定せる郷土教育は、死せる教育の骸であり、生命なきものである。それ故生命ある郷土教育は、人を發展的に育むものであり、時々刻々に新しき郷土を創造せしめる教育である。

されば綜合科に於ては、郷土を發展的に指導しつゝあるのである。郷土とは單なる客觀ではなく、行爲的自己と合一された世界である。それ故、子供の生活相を凝視してその系統を考へ實踐してゐる。我

に於て最も自然に、最も崇高に子は親の爲に、親は子の爲に犠牲となつて働くといふ特質を有してゐるのである。この子は親の爲に犠牲となり、親は子を思ふといふ純情的な勞作は、日本精神の一大特質であり、中心生命である。小西博士は「我々日本の特性は、教育勸諭にお示しになつてゐる。即ち親心・子心であつて、義は君臣にして、情は父子といふやうな家族的精神が日本の特色である。(二)と述べてゐられる。西田博士の「我國の最高の道德たる忠も、純情の發する所、海行かば水づく屍、山行かば、草むす屍、大君の、邊にこそ死なぬ、頼みはせじ。といふにあつた。日本人が俠的なるものを尊び、人一人との間に距離なきを喜ぶといふのも、かゝる性情に基くものと思ふ。(一)と云はれ、知的に限定されない、空間的に固定しないで、無限に働く純情を日本の特質と考へてゐられる。

かくの如き親子の關係は、よりもなほさす君と臣との關係である。天皇の爲には我身を捨て、そこに滿腔の感激を持つのが我大和魂である。この大和魂は建國の昔より今に至るまで幾回もなくその純情を發揮して來たのである。神代に於ける天石窟の神話も、僧道鏡の悖逆に對して身を捨て、起つた和氣清麿の精神、足利氏の惡意志を挫くために努力した楠木、新田、北畠の諸氏の精神は、皆この立派な日本の特質を守らんとした現れに外ならない。又歴代の天皇は我々臣民を我子のやうに愛して下さつたのである。畏くも明治天皇の軍人に下賜せられた勅諭を奉戴しては勿體なきに頭が下がるのである。この君民一體の國體觀念こそ、日本の一大特質である。人間の特有にして、しかも日本人に特有なる勞作精神は、かくの如き君民一體の家族精神である。この家族精神は現實世界の指導原理たるばかりでなく、永遠に顯現するべき一大根源精神である。古事記に「於是天神諸の命以ちて、伊弉那岐の命、伊弉那美の命二柱の神に一是の多能幣流國を修理り固成せ」と詔らて、天沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき(四)といふのがあ

り、又後に天孫降臨の時天照大神が、神勅と共に三種の神器を授け給ふたのである。かくの如く國家統治の大權は、神授に基くものであるといふ信念が上代人には一貫してゐたのである。この神を、すめらみこを我日本民族は開闢の初めから無窮に統一すべき力の靈的源泉或は核心として絶対に歸依崇拜してきたのである。これが我々の神道であつて、これは同時に國家の永遠性を象徴するものであると思ふ。由來我國民は今に永遠を求める純情な國民であつて世界を空間的に統一しやうとする野心はないのである。この點より滿洲國に對する我國のされる態度を考へて行つた時凡てが理解せらるゝと思ふ。

かくの如く考へる時、日本人の勞作には、天皇を親もお慕ひ申し身を以て仕へ、永遠に無窮なる樂土を今の世に招來しやうとする熱情がこもつてゐると思ふことが出来る。

實に勞作教育は本質的に日本教育の本道である結論し得るのである。

前述した如く日本人の勞作は、それ自らの性質に於て日本精神を有すると同時に、一面對象の世界から空間的に限定をうけてゐるのである。我々が其處で生れ、其處で働き、其處で死にゆく行動の場所から限定をうけてゐるのである。勞作の本質はその空間、場所を外にしては實現し得ないものである。この行爲、勞作の場所は、究極的には國家である。この國家といふ空間を外にしては、日本的な純情の精神も實現し得ないのである。私がさきに「郷土教育と綜合科教育」に於て勞作教育の行はれる所、同時に郷土教育が行はなければならないしかも郷土は固定した客觀ではなく勞作の精神が高揚せらるゝと共に益々その圓環を深く深くして、生々發展する純情であり、愛であると言つたのもこの意味からである。

さきに日本精神は教育が勞作そのもの、本質に立つて行はれる時、永遠にこの現實に顯現され、働くこによつて見るこが出来るといふ

本主義的經濟機構下に於ける正しい經濟生活が考へられず、經濟困難の聲さへきいてゐるのである。社會生活に於ては未だ個人道徳が優勞であつて、社會道徳が下火である。自己を守るこいふ事はい、が、他而他人の爲に盡し、社會の爲に捧げて行くこいふ點に缺けてゐるのである。尙精神生活に於ては、我々は日本人であるこいふ自覺が足りない爲に、種々な思想問題をかもしてゐる現狀である。

我々は此處に於て普遍にして不變なる日本國民教育を、特殊にして可動的なる公民教育の合一點に立つて、我々のこるべき國家生活の態度を明らかにせねばならない。其處には止揚せられた具體的日本教育道が示されると思ふのである。

さきに日本の現狀を管見したのであるが、色々な意味に於て日本は危機に立つてゐるのである。我々が躓きたる時、全身の血管はその方向に集中され、體勢又この難を突破せんとするものである。我々はこの意味に於て建國以來我血管の中に、又歴史の上に刻まれたるたゞ一線なる國家愛の精神をもつて働き、永遠なる國家を今の世に實現させる様に努力せねばならぬと思ふ。それについて思ふこは獨逸の復興精神である。その教育力である。私は小西先生の著「教育思想の研究」の中に收められたるフイヒテの思想の中にその精神を尋ねて見たいと思ふ。獨逸の復興の根幹をなせるものは實にあの有名なフイヒテの「獨逸國民に告ぐ」の大演説の精神である。彼は獨逸の大打撃、獨逸の衰亡の原因は獨逸人自ら招きたる禍である。それ故自ら是を回復せねばならぬ。こ述べ獨逸人即ちゲルマニヤ民族の特質に及びこの特質の發揚は必ず獨逸を復興せしむるものなりと絶叫したのである。フイヒテは「國家の興隆に對して大切なものがある。即ち愛國心と言ふものである。眞實の愛國心は宗教的なものである。永遠なる世界を彼の世に求むる所の宗教ではなく、此地上に永遠の世界を求むる意味の宗教と關係があるのである。地上に於て永遠の生活を實現せんには我

つた。これは要するに、日本精神の教育は一時的の流行としての教育ではなく、永遠に朽ちる事のない部分を有してゐるこを論じたわけである。然し永遠に變りないイデオロギとして日本精神も、現在の姿に於ては満ち得ない部分をもつものである。我々の祖國日本の現狀にはみだされざる部分があるのである。この部分あればこそ我々が常に生々發展し、永遠に日本への行を続けやうとするのであるから、單なる不満ではなく、物の本質としての矛盾感なのである。この部分の教育は前者の動かざる日本國民教育に對して時代と共に動く可動的なる公民教育の部分であるといふこが出来る。前者は勞作教育の本質から、捨身以て國家につくし、永遠なる國家を熱望する國民をめざす國民教育道であり、後者は勞作教育に當然隨伴する發展する郷土教育に於ける時と場所とに應じて、動く公民教育である。

然らば動く公民教育とは如何なるものであらうか。

師範學校規程第十條公民科の規定によれば、「公民科ハ國民ノ政治生活、經濟生活、並ニ社會生活ヲ全ウスルニ足ルベキ知識ヲ涵養シ、殊ニ憲法ノ精神ト共存共榮ノ本義トヲ會得セシメ、公共ノ爲ニ奉仕シ協同シテ事ニ當ルノ氣風ヲ養ヒ、以テ善良ナル立憲自治ノ民タルノ素地ヲ育成シ且小學校ニ於ケル公民教育ノ方法ヲ會得セシムルヲ以テ要旨トス」こある。

この規定の中に見るここの出来る、國民の政治生活、經濟生活、社會生活は、國家に於て時代と共に變動する國民生活の諸相である。永遠なるイデオロギの顯現に専念する國民生活も、この政治生活・經濟生活の根幹たる君のためにつくす犧牲道によつて指導誘掖すべきである。

今國家の現狀を見る時、政治的自由人としての政治生活に於て、普通選挙は實施せられたるも、政治道徳、立憲自治國民の自覺が足りない爲に、色々な害毒を流しつゝあるのである。又經濟生活に於ては實

々々我々の國民精神の中に永遠の生活を見出さねばならぬ。而して此の目的を達せんには我々は國民精神が問題として居る所の問題の中に生活し、其存在其目的のために我々自身を犠牲にせなければならぬ。愛國心は實に財産や生活の自由なきは比較になるものではない。」(六)こ述べ、全身を犠牲にする程の愛國心の必要を高調してゐるのである。そしてその教育の方法として、先づ兒童の悟性を明瞭にせねばならぬ。その爲には實行が最も大切であるこなし、小學校に於ては學習と勞作を同時に行はしむる程勞作を強調し、手細工や園藝を重んじたのである。第二に國家生活の爲に犠牲となる所の立派な行を實行する機會を得させる必要ありと論じてゐるのである。

實に獨逸の復興はこのフイヒテの眞實から出でたる教育精神を、その精神を純粹に實行せしめたる爲政者國民、肉彈的實行に當りたる小學校教員の諸が融合統一し、國家教育、教育政治を實踐したる結果今日の隆々たる獨逸を見たのである。

かく論じ來る時、現在の日本を救ひ、永遠に育む日本教育道は已に示されてゐる。我々は綜合科そのものに偉大なる大和心への導きがあり、國家愛への教育があるこ確信するものであり、その分科に日本公民教育を課する精神は、特殊にして可動的なる政治、經濟、社會の各生活指導を考へてゐるのである。又文化は國民の共有財産なりこの考へから、村に於ける各形態及その精神を理解させる教育でもあり、尙日本校の考へてゐる全村教育精神の一顯現である。

#### 4、結語

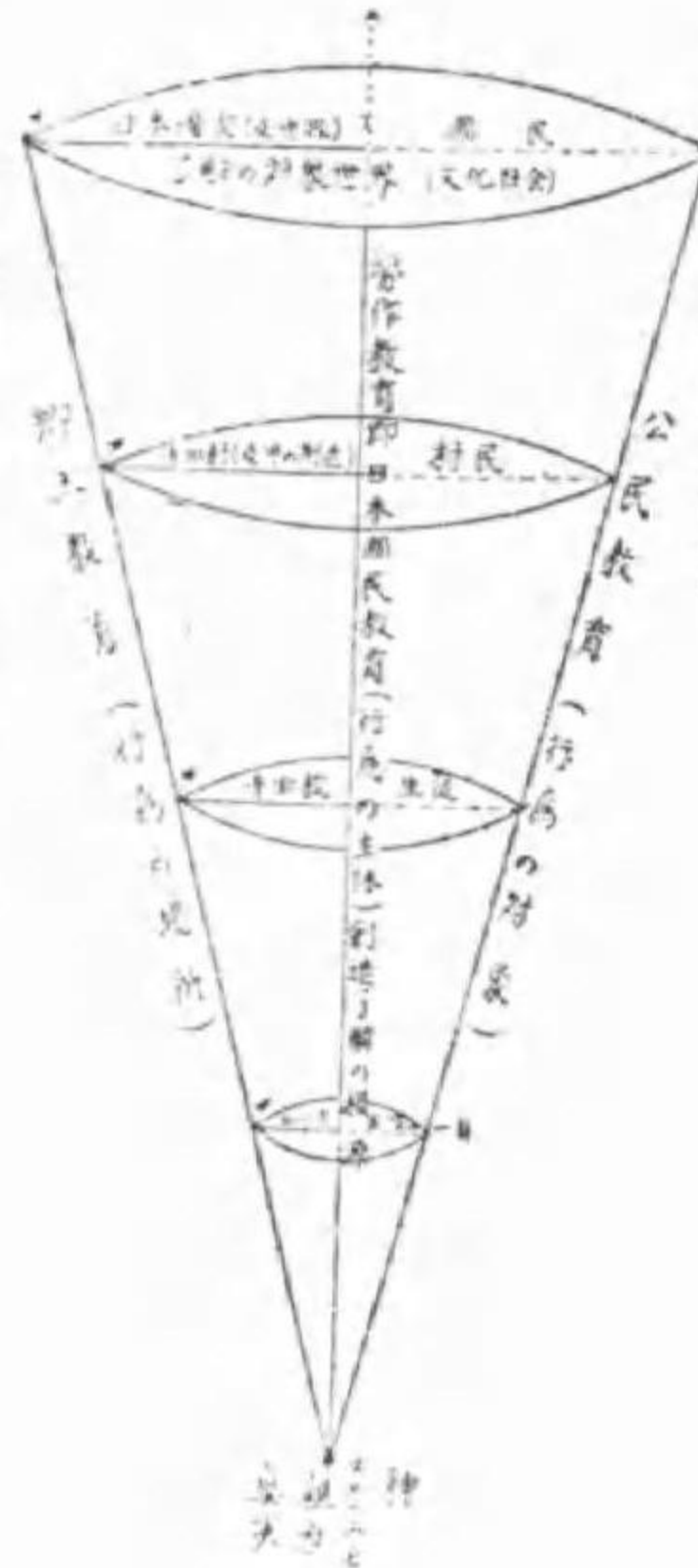
教育の本質は一般生物の生活から導くこは出来ない。又文化から導くこは一面最もであるが、教育の本質はこまでも文化を創造する人間そのものから考へねばならない。

人間のみ勞作を有し、しかも日本人は親心子心の關係に於て勞作をなすものである。臣民は天皇の爲には捨身以て之に奉じ、天皇又我々

を我が子のやうに愛して下さるのである。この神を中心とする家庭的な精神が日本人の特質である。然し日本人の労作も行為の場所として郷土、行為の対象としての文化社会を考へなければならぬ。行為の場所及対象は同一物の見方の相違であるを考へられる。我々が日本的な労作をなす時、同時に場所としての郷土、対象としての文化社会が考へられるのである。我々の労作は一面永遠に不變なるイデアから現實の世界に持ち來さうと努力すると共に、反面郷土及文化社会から限定をうけてゐるのである。かくして日々理想的な文化国家の建設が可能になるのである。

かく考へる時勞作教育は即ち日本國民教育であり、しかも之に随伴して可動的な郷土教育と公民教育が行はれるのである。こゝに於て具體的な日本教育道は、時空を超越し、しかも現實に内在する勞作教育即日本國民教育を根幹とし、可動的にして内容的なる郷土教育、公民教育を随伴させつゝ、發展、擴充する所に示されるを信するものである。

具體的日本教育道の圖



第二節 方法の原理

1、勞作の原理  
勞作は目的原理なると共に、方法の原理である。先に目的原理に於て、勞作は敬と愛との精神によつて發展し、働くことは見る事である

ある。

3、社會の原理  
我々の行為は社會に於てなされると共に、社會から限定を受けてゐるのである。勞作は郷土と社會を離れて存在し得ないのである。勞作教育の行はれる所、必ずや郷土と共に文化社会が考慮に入れられなくてはならない。この意味に於て社會は勞作教育實現の方法原理であるを考へられる。綜合科の實踐機構に、人の成長の段階に於ける各々の社會生活指導を附加してゐるのである。

我々に於ける綜合科の教育方法に於て、主流となるものは勞作の原理であり、それは主觀の客観化としての表現化、客觀の主観化としての内面化に於て、全面的に生命的に物を捉へるものと信じてゐる。然し勞作のみが人間を人間たらしむるものではなく、そこには可動的な社會と、郷土との参加がなければならぬ。その意味に於て社會的個人は、勞作・郷土・社會の方法原理によつて教育せらるゝと思ふのである。

第二章 綜合科教育の實踐機構

第一節 綜合科教育の目的

先づ目的原理から小學校教育は「日本國家の爲に献身的に働く、道徳的宗教的な社會的個人の養成を目的とせる基礎教育である。」と論定せらるゝのである。綜合科はかくの如き日本教育道に通ずる最も具體的にして健全なる基脚を有してゐるのである。

かゝる基脚を有する綜合科の目的を一言につくせば「兒童の無自覺的な郷土生活の諸相を、自覺的に爲さしむるこゝによつて、高次の郷土生活を創造せしめ、以てよき日本人たるの基礎を陶冶す。」と云ひ得る。之を簡約して説明するに、綜合科は無意識的な

と斷定して置いた。我々は文化を主観化して了解するこゝに、主觀を客観化して其處に文化を創造する二つの道行をもつて考へるこゝが出来るのである。文化の中にイデア的なものを見るこゝは、次元への創造の根源にかへるこゝであり、それは創造への出發であるを考へる事が可能である。我々は前者を綜合科教育に於ける内面化と言ひ、後者を表現化と稱してゐるのである。從來の教育法も稍々もするこゝの一方に偏しやうとする傾向をもつてゐるのである。それ故私達は、如何なる教科・教材に於ても、二つの方法によつて物そのもの、全的な了解を期待してゐるのである。

それ故この勞作の原理は、その内容として、文化の中にイデア的なものを見る意味に於て直觀の原理であり、又イデア的なものに覺醒せられ、没我的な状態になるが故に直觀の原理であり、イデア的なものを見るこゝは同時に自己自身を振ひ立て、文化創造に立せんとする熱情を起さるゝが故に、自發の原理をも内含するものである。我々はイデア的なものを見るこゝによつて、主觀を客観化し得るのである。其處には文化の創造が營爲されてゐる。この意味に於て創造の原理であり、又創造せらるゝ世界に於て、主觀が合一さるゝ意味に於て體驗の原理とも云ひ得るのである。

勞作教育を教育の本道と考へる時、勞作の原理はかくの如き直觀の原理、直觀の原理、自發の原理、創造の原理、體驗の原理等を内容とするものである。

2、郷土の原理

我々の勞作は場所なくしてはなし得られないのである。凡ゆる人間活動は、この空間なくしては何事もなし得られないのである。郷土は行為の目的たり得ないが、行為實現・目的實現には缺くべからざる要素である。かゝる意味から郷土は勞作教育の方法原理と考へらるゝのである。勞作教育は郷土を通じてのみ生々發展し、擴充せらるゝのである。

せる兒童の郷土自然生活・郷土文化生活・郷土公民生活・農業生活を自覺的な勞作によつて、より高次なるこれ等郷土生活の創造に向はしむる教育である。この勞作による郷土生活の指導は、よき日本人教育の基礎陶冶をめざして行はれてゐるのである。郷土教育は、郷土教育に止まり易いが、我々は之を發展的に考へ、日本國家教育への参加の具體道であるを信じてゐるのである。

第二節 綜合科の教育内容とその指導精神

1、綜合科の教育内容

先に示せる如く、綜合科は一言に兒童の郷土生活の指導であると言ひ得る。今その教育内容を表にあらはしてみるに左のやうになる。



兒童の郷土自然生活・郷土文化生活・郷土公民生活は認識的勞作として指導し、又反面學級自治會・學校自治會・學習發表會等の各教育施設を通じて、行的に體驗的に指導してゐるのである。この中に特に郷土の歴史から考へて價値あるものは、之を劇化して美的勞作として行的に理解させるこゝにしてゐる。今採入れてゐる郷土劇は、「安田小三郎氏の出征」のみであつて、その他は國史に於て重要なものを劇化して取扱つてゐるのである。郷土の職業生活として農業は、筋肉

的勞作として、園藝・農村工業的な仕事を指導してゐるのである。

以上の認識的勞作・美的勞作・筋肉的勞作は各分科した學科として指導するのではなく、全く郷土生活を全的に理解創造せしめる意味に役立たせるものである。三つの勞作は常に道德的に遂行され、進展せねばならぬと思ふのである。

## 2、教育内容の指導精神

### ①美的勞作としての兒童劇の指導精神

綜合科に於ける兒童劇は、美的勞作の王座を占め得るものである。信じて之を實行してゐるのである。

然らば本校は兒童劇の生命を那邊に置いてゐるのであらうか。

劇や舞踊の世界に於ては肉體的精神、現實的なものゝ超現實的なもの、それ等が自然に相抱擁して凡ゆる雜多が統一され、そこには永遠的な人間の芳香をかくこが出来ると思ふ。又劇や舞踊は、演劇者のみが美的な境地に誘ひ入れられるばかりでなく、觀衆の心をも永遠なる美の世界に誘導する。かゝる意味に於て、劇は演劇者のみの教育ではなく、一般大衆の教育であると思ふ。

殊に兒童のなす劇に於ては、その純真さに於て、その素朴さに於て所作的價值に於て一般演劇者のそれとは特別の味がなければならぬ。本校に於ける兒童劇は概ね國語讀本の劇化にして、純粹な兒童劇を課してゐるのは尋六の「青の洞門」・高二の「眼覺めたる男」である。國語讀本の劇化を考へる所以のものは、生命の國語教育は單なる知解に止まるものでなく、之を行動に表現して生命的に理解せねばならぬと思ふからである。又純粹な兒童劇を採入れる所以は劇の教育價値の偉大さを信じてゐるからである。

要するに、利害を超越した自由な境地に、兒童を教育する事は、一面兒童の生命が満足させられるのみならず、他面各方面に伸び行く尊い勞作の三味境を體驗させることであると思ふ。捨身以て國家に捧

統一された藝能があると言ひ得るのである。

かゝる藝能が歌舞二曲によつて身體的に表現せらるゝのである。そこには素朴にして單純化された日本民族精神が流れてゐるのである。

日本的な幽女性を眞實に、素朴に、簡素に表現するところに能の現代的意義があらうと思ふ。能にこそ無形の形、聲なき聲が味ははれ、永遠的な日本情緒がはぐまれてゐると思ふ。知識や技術で理解せらるゝやうなものではない。我々の胸にひし／＼と迫り来る理窟以上・知以前の劇こそ日本的なものであると信するのである。

先に一言した如く、我々に於ける兒童劇は、この單純素朴なる場所と形象を通じて、無限なる兒童性を表現させたいと思ふ。簡素なものに永遠的なものをのぞかせ、しかも一般大衆に感激させやうとするところに苦心がなければならぬ。教育道は苦行であるが、わけて兒童劇指導は苦中の苦である。要するに兒童劇は民族的な情感を培養するといふ點から指導されねばならない。

### ②認識的勞作としての郷土文化社會の指導精神

我々は日々郷土文化と共に生活してゐる。だから我々は郷土文化を主觀化して吸收すると同時に、文化を創造して郷土文化に贈與してゐるのである。實に我々は社會によつて教育され、社會を教育してゐるのである。かゝる意味に於て文化こそ共有財産であり、村自體が教育所であると言ひ得る學校のみが教育の專賣所と考へるのは偏見である。全村が學校なのである。郷土と我々は日々心を通はせてゐるのである。又通はずべきものである。

子供は郷土文化と生活を共にしてゐる。然し彼等の多くは無意識的に、無自覺的に生活してゐるであらう。この状態を我々の手によつて意識的に、自覺的にして、彼等の生活をより能動的に發動せしめ、郷土への認識は勿論、郷土への感情的な紐帶を一層強化する必要があると思はれる。農村は特に疲弊し、奮起の必要に迫られてゐる時であ

けんとする純情も、バクテリアの研究に生命をかけてなす精神も、凡てこの三味境の體驗からなされるものと思ふからである。

然し保護者に媚を賣つたり、實物的な粉飾をさせたり、教師の強制的な移入による兒童劇であつてはならない。アメリカ化した喧燥な浮いた舞踊であつてはならないと思ふ。

かゝる故に私は、日本的な兒童劇の指導を最も強調し度いのである。然らば私の日本的な兒童劇とは如何なるものであらうか。

私は能樂の精髓に兒童劇指導の歸一點を見出し度い。能樂の起原は古來神事に用ひられた猿樂である。猿樂本來の藝能は滑稽的な物真似であつた。之が咒師・風流・今様・白拍子等の、特に風流の影響をうけて、今行はるやうな、幽玄な藝能を有する能樂が成立したのである。それで能樂は、「歌舞二曲を土豪としてそれに物真似を融合させたもので、歌舞化せられた物真似劇といふことが出来る。」のである。猿樂そのものがもつてゐた滑稽な要素は、舞歌の性質に合はないからこれから獨立して狂言となつたのである。

かくの如く能樂は、鎌倉室町時代の文學が綜合統一されたものであり、此時代に愛敬せられ、しかも今日尙多くの鑑賞者を擁してゐる。いふことは、能樂の藝能が我民族の底に流れてゐる日本的な情感を満足させるからである。この藝能こそ古にして新なる、現實的にして永遠なる生命を宿してゐると思はれるのである。然らばこの藝能とは如何なるものであらうか。

一言にて幽玄なる藝能である。「今の言葉で言へば優雅典雅といふに相當しやう。上品で美しくみやびやかな事である。」(七)この典雅にして莊重なる藝術が大衆の愛敬をうけるためには、面白さがなければならぬ。然し面白さも時と處によつてそれに變化を興へる珍らしさかなければならぬと思はれる。觀阿彌・世阿彌以來この道に精進してきたのである。それ故に能樂には、幽玄を中心に面白さ珍しさが混融

る。我々が綜合科に於て、郷土自然科・郷土文化科・郷土公民科を指導する所以はかゝる意味からである。

### ①郷土自然科の指導精神

郷土文化の原本的なものが郷土の自然界であらう。兒童は童語を通じて之を生活を共にしてゐる。この兒童の生活場所であり、生活の對象であるこれ等自然との交渉を基礎にして、之を生命的に全體的に伸展させやうとするのが、郷土自然科のもつ使命である。

兒童の生命培養としての自然科は、自然物自然現象の單なる知解に止まつてはならない。兒童はもつと深く情的に結びつけられてゐるのである。我々は時々兒童が、生命本然の姿に於てこれを見てゐる事實に遭遇するのである。知的に解決すると共に、知以上の世界へも参加させるやうに指導すべきであると思ふ。

### ②郷土文化科の指導精神

我々の勞作は、歴史的な社會的な現實に於て行はれるのである。この意味で、郷土は自然であると共に、文化社會であると言ひ得る。兒童は日々この文化社會に接し、無意識的に、或は半意識的に、又意識的に之を受容し又創造してゐると思はれる。この兒童の生活内容である無自覺的な郷土文化内容を、右意識的に了解させ、彼と郷土文化を緊く紐帶を、層一層強く廣くして、郷土文化の受容と建設に努力するやうに指導すべきであると思ふ。

學校のみが教育の專賣所ではない。凡ゆる村の施設、動きが教育をするのである。かゝる意味で村自體を見直し、兒童の生活内容としての郷土文化を出発點として、より高次の文化の創造に獻身的に努力する兒童を養成することが、郷土文化科の指導精神である。

### ③郷土公民科の指導精神

兒童の生活場所である郷土が、親(母)・私のうち・寺田校・寺田村及その附近・日本及世界と展開するにつれて、兒童の社會生活もその

態度に於て伸展するものがなければならぬ。即ち出發點に於ては、親族に母に對する子として、私のうちにありては家族の一員として、學校にあつてはよき學校の児童として、村にあつてはよき村人に、國家にありてはよき日本人になるといふ風に伸びゆくものでなければならぬ。

學校に於ける郷土公民科は、児童の學校生活といふ社會生活・經濟生活・政治生活―これは児童には無意識的な生活かも知れない。これ等の生活諸相を基礎に學校の規則に従ひ、學校のために奉仕し、協同して事に當るといふ精神を養ひ、よき郷土公民たるの素地を養ふのが此科指導の精神である。

児童の生活内容である政治生活は、彼等の級長選舉に於て、學校自治會に於て、或は又學級自治會に於て充實し、經濟生活は學級に於ける學用品の消費、學級生産園藝園に於ける生産高に於て體驗され、社會生活は日々の學級生活、學校生活體驗に於て充實されてゐるのである。然し児童は、一面學校に於て、學校の一員としての生活諸相を體驗するが、又反面郷土社會に於て生活するが故に、村に於ける人々の公民生活を、無意識的に受容してゐるものである。自分の親や兄が道掃除に出てゆくことや、税金を役場に納めることや、農産物を組合に搬入すること等々見聞することであらう。

かくの如く児童が學校生活・家庭生活・社會生活をなすの間に、無意識的に無自覺的に、その内容となつてゐる政治生活・經濟生活・社會生活の凡てを、有意的に指導せんとするのが郷土公民科の使命である。

児童の公民生活を體驗的に理解させて行くため、本校に於ては作業日・奉仕日が施設せられ、學級自治會・學校自治會が設けられてゐるのである。綜合科に於ける公民科は、これ等の體驗を通じて一層深く理解せらるゝものである。

高い農村建設者としての識見と技術とを得させると共に、農を爲すことによつてのみ養はれる素朴・單純・純情なみの道徳性をも培ひたいと念じてゐるのである。

①園藝の指導精神  
人は靈と土とによつて圓滿に成長する。殊に日本人は國史と自然とを忘却してはならない。園藝教育こそ土への教育道である。本校に於ては、理科教材を主體とする生産園藝と裝飾園藝とを課してゐる。

我々の靈が疲れた時、畑に出で一本々々無言に草抜きをする時、ほんごに教はれるやうな氣がする。園藝こそ永遠なる魂を現實に顯現せしむる爲に於てはならぬものである。跳足にて土に立つ時、土は永遠なる響を我々に傳へてくれる。土の教育こそ具體的日本教育に缺けることがあつてはならない。

②農村工藝・農産加工の指導精神  
児童は動植物を愛育するのみならず、之に手を加へ之を變形して楽しむものである。きんぐりを拾つて人形を作り、獨樂を作りして遊んでゐる。落葉を拾つて模様を作り喜んでゐる。かうして工作能力・工作趣味を意識的に指導して行くのが、綜合科に於ける工作である。しかし我郷土はその材料に恵まれてゐる。我々はこの原始的な生産品に児童自らの手を加へさせ、一面氣品ある人格と他面農村更生への基礎陶治をめざしてゐるのである。これこそ農村工藝・農産加工の指導精神である。

物を粗末にしないで之に手を加へ、變形して樂しませる教育は、人の全面を中心から遺憾なく教育するものである。これは餘りに顯著な教育事實である。この工作の指導も具體的日本教育道に離れず參加させてゐる。

第三節 改訂せられたる綜合科教育の材料  
1、教材系統改訂の精神とその展開

學校社會の爲に獻身的に活動する児童は、やがて郷土寺田村の公民となる時、その精神で郷土の爲働いてくれる事を信じてやまぬものである。

3 筋肉勞作の指導精神

筋肉的勞作は精神的勞作の導きにまたなればならない。靈の導きによつて肉體が純化せらるゝ時、最も意義ある筋肉勞作が展開せらるゝのである。我々が綜合科で課する園藝・工作はこの精神の顯現に外ならない。我郷土寺田村は農をもつて立つてゐる。この村人が作りはじめてくれた農民道をこの勞作を通して體驗させ、將來農民としての基礎陶治をなすのである。

農村は爲政者に於て色々考へられてゐるが、農民自身も農村自體更生のため自奮自勵せねばならない。時代をかこつことをやめて、よき時代建設の一員になるべきであると思ふ。帝國農會の調査によれば、「米作は一反歩に二十二人あればよい。一家一町歩として二百二十、三十人位、これを一家二人半の勞働者ありと見て、百日働けば一町歩の米作が可能であり、一年に二百六十五日の餘剰時間が出るのである。」と報告してゐる。しかも今日の米作は昔と違つて餘程機械化してゐるため、それよりも短時間にて遂行せられる理である。寺田村は府下に於ける有数な多角形的農業を営んでゐるにしても、一年相當な餘剰時間があると思ふ。此處に我々は着眼し、一方園藝の教育をなすと共に、この餘剰時間の活用として農村工藝・農産加工をなす知識と技能とを與へてゐるのである。

資本主義的經濟機構に於ける農業經營は、多收穫より多收益を考へねばならない。生産額よりも賣上高を考へねばならない。其處には勿論作物を作る上に手加減はあるのであらうが、又反面原始生産に加工して、より價値あるものへの生産といふ事を考へねばなるまい。我々の筋肉的勞作の指導精神は、かゝる農村の現状にある児童をして、よ

1 教材系統改訂の精神

改訂せられたる教材選擇・排列の學年別比率  
従来の教材は、はつきりして配當比率の上に立つてゐないので、今度は配當比率を決定してから選擇し、排列したのである。左にその比率を示すことにする。

イ、學習の目的より見て

教材種類	學年					
	第一	第二	第三	第四	第五	第六
美的勞作	三〇	三〇	二〇	二〇	二〇	一〇
認識的勞作	一〇	一〇	二〇	三〇	二〇	二〇
筋肉的勞作	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
工男	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
工女	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
園藝	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇

備考 △數の單位はパーセント  
△高男には園藝なし。故に高女は高男に比し配當教材多し。

イ、學年學習の目的より見て  
第一・二：郷土自然科：色彩を約六〇%  
第三・四：郷土文化科：色彩を約六〇%  
第五・六：郷土公民科：色彩を約六〇%  
かゝる基礎に立つて選擇排列せられたる教材は「一面には子供の家庭生活にも關係し、他面には郷土的個性に生きながら廣い文化生活の縮圖であり、また文化生活へ延び行く生動的尖端であり、而も勞作的體驗の諸相が構成される基本的地盤である。」(三)と言ひ得るので



改訂 綜合科題目系統一覽表 (昭和九年十一月改正)

Table with columns for subjects (郷土自然科, 文藝科, 公民科) and months (April to March). It lists various topics and activities for each subject and month.

備考 1. 尋常科... 2. 工作系統... 3. 圖藝系統... 4. 公民科... 5. 文藝科... 6. 郷土自然科...

活を指導しやうとしたのである。

(3) 改訂精神の展開

① 純劇を児童劇系統に採擇した。

② 認識的勞作に於ては

イ、尋四までの郷土地理學習の新系統が生れ、  
ロ、尋四までの國史學習が劇系統と關係づけられて新生したのである  
ハ、郷土自然科教材が縮少した。それ故單的にして發展的なる教材が  
選擇せられた。

ニ、公民教育が新しい眼で見られ、充實せられた。

③ 筋肉勞作は一大躍進をなし、内容・精神共に高揚せられた。

イ、尋五以上の女子には新しく工作系統が出来、郷土料理・農村手藝  
品を創作する機會が與へられた。

ロ、全工作系統が農村工藝・農産加工の立場に於て一貫統一された。

ハ、高女生に園藝系統が新設され、農村女子としての独自の體験が、  
系統的に修練せられることになった。

ニ、筋肉勞作施設の躍進

去る十二月、運動場西南に約三畝(約三アール)の生産園藝園が設  
けられ、狹隘を感じてゐた勞作園が倍加せられた。尙農業勞作指導と  
しての鶏舎・兎舎が實業青年學校より獨立して建てられ、此處に鳩舎  
と共に飼育實習系統が出来たわけである。

2、改訂綜合科題目系統一覽表(別表)

3、教授細目の修正と綜合科掛圖の編輯

(1) 教授細目の修正

改訂せられたる教材によつて、昨年度制度したる細目の修正を完了  
したのである。この修正に當つて特に留意した點は

① 要旨の書下しに充全の注意を拂ひ、

② 一教科内に於ける縦の連絡、他教科との横の連絡統一に最大の努  
力を傾注した。

③ 準備を明記し、特に新制掛圖の利用、備品、教具の活用を留意し  
た。

④ 教授參考資料をなるべく多く蒐集し、之を細目にさしこむことにし  
た。

⑤ 劇の各教材は全部脚本にし之を挿入した。

(2) 綜合科掛圖の編輯

各學年の綜合科學習を、より具體的に、より直觀的に、より生命的  
にせんが爲、各學年に相應する「綜合科掛圖」を新制したのである。  
模造紙全紙を用ひ、一枚毎に使用し得るやうに製作したのである。

第四節 綜合科學習の指導法

綜合科學習は時間、場所、指導法によつて展開される。それ故學習  
の時間、學習の場所、學習指導法について述べることにする。

1、綜合科學習の時間

綜合科は本校の特設教科なるが故に、學習の時間も法令外の時間即  
ち課外に一週一時間一ヶ月四時間をまつてゐるのである。尋四までは  
一教材二時間學習、一ヶ月二教材主義をとり、尋五以上は一教材四時  
間學習、一ヶ月一教材主義をまつてゐるのである。一言附言したい事  
は小學校教育に於ける時間割編成の重大な事である。我々は日々時間  
割によつて實地の教育に當つてゐるのであるから、十二分に反省する  
必要があらうと思ふ。稍々もするに兒童の自然なる生命的な發展を阻  
害してゐる事實がないでもない。我々に於ては、一日の生命の流動を  
考へ、内而教科と表現教科との適切な調和を考へ、この上に時間割が  
編成せられてゐる。時間割の編成に當つては充分にこの點考慮せねば  
ならぬ。教室や授業者の事は第二義的な事ではなからうか。兒童の生



命發展に立てる時間割でありたいものである。

2、綜合科學習の場所  
従来の小學校教育の場所は校舎の扉の如く教室に限られてきたやうである。教室がよい時がある。然し大自然を擁護してある田園小學校に於ては、時間の許す限り教材の性質により校外でやりたいものである。

綜合科に於ける郷土文化科・郷土公民科・兒童劇・工作は主として教室に於て行はれてゐる。しかし以上の教材に於ても、一面自然に接觸しなければならぬやうになつてゐるのである。郷土自然科・園藝は主として自然で行はれるのである。前者は學校附近の森・川・谷・神社・山で行はれ、後者は生産園藝園・裝飾園藝園で行はれてゐる。

3、綜合科學習の指導法

(1)學習の一般的指導法 (昨年三月發表研究物「綜合科」)  
(2)各學年の指導着眼點 (教育の實際参照ありたし)

(3)學習指導上の一・二の問題  
兒童劇・認識的勞作・筋肉勞作各々の指導法並びに各學年の指導着眼點については、昨年度の研究物に譲り、こゝでは綜合科學習指導の最も留意せねばならぬ點一・二を擧げて置きたいと思ふ。

綜合科の指導は、こゝまでも郷土に於ける兒童生活を導くといふ觀點に立たねばならない。色々分科的な色彩を有してゐるが、之を分科的に、學科的に取扱ふ部面を少くして、兒童が郷土に於て全面的に生活するやうに指導せねばならぬ。廣い文化生活へ伸び行く全體的體驗を得させるといふ心持で指導せねばならない。我々は稍々もするこ専門家振るのである。これはよい習癖ではない。兒童の生命の動きを觀取して、よき糧を與へねばならない。分科的な色彩を有するこは學科的に教授するこは意味ではなく、生命の豐潤な發展を願つての事である。それは丁度よい料理には消化不良になつたり脚氣になつたり

しない様に適當な營養素が配割してあるやうなものである。生命の綜合科學習は、現在の生命の動きに適切な教法を用ひるばかりでなく、かゝる生命に發展し來れる過去をも追驗し、又將來への發展も豫感して、生々發展の充實をはからなくてはならない。その爲には綜合科教材自身の開展と他教科との相關結合を求めて行かねばならない。其處に教授者の獨自の工夫が必要なのである。

第五節 綜合科學習の具體的發展

全學年を一貫して兒童劇が指導せられ、認識的勞作は尋三までの自然科、尋四までの國史教育及郷土地理教育、尋五以上の公民教育を内含して、兒童の郷土生活を指導してゐる。筋肉勞作は工作と園藝を含み、前者は尋五以上性別になつて居り、共に農村工藝・農産加工の立場に於て指導せられ、後者は蔬菜園藝としての生産園藝と花卉園藝としての裝飾園藝との内容をもち、工作と相提携して郷土の特異性に立つて兒童の生活指導をなすのである。

これ等一々の具體的發展については稿を改めて詳述して置くことになつてゐる。

附録

引用書目

(一)哲學の根本問題續編	西田幾太郎著
(二)思想	千秋
(三)勞作教育	小西重直著
(四)古事記新講	次田潤著
(五)公民教育の根本問題	廣瀬喜雄著
(六)教育思想の研究	小西重直著
(七)國語教育第廿卷第一號能學と國民性	能勢朝次稿
重なる參考書目	
文學序說	土居光知著
國文學史講話	藤岡作太郎著
我國體觀念の發達	深作安文著
日本精神を各科教育の諸問題	京師附小著
基調させる各科教育の諸問題	橋本秀一稿
綜合科教育の實際	

特設綜合科  
に於ける  
兒童劇指導の實際

## 第一章 兒童劇指導の目標

兎角知識の注入といふ事に追はれて肝腎の情操教育を忘れ勝になつてゐる今日の教育にあつては、兒童の藝術的薰陶といふ事は實に必須な缺くべからざるものといふべきである。だから藝術本能を善導して子供の心性を萬遍なく、多方面に、自然に且つ圓滿に啓發し、撫育し陶冶するやう、劇によつて指導する必要がある。かるがゆゑに、本校は綜合藝術としての劇の創作と鑑賞によつて、其の缺點を補ひ、美意識一般を體得せしめやうと、情進してゐるのである。

兒童劇の本領は高い意味の教育的でなければならぬ。注人的、干渉的、強迫的のそれでない。誘導的、自發的、自然的の教育法に則つたものであらねばならぬ。ルソーやペスタロッチやフレーベルや、近くはモンテッソーリや、エレンカイなどの教育主義に副ふ所の立場で以て子供等を教へ導く所の劇であらねばならぬのである。

子供の活動性を善導するに適したもので、彼等をして其自己を表現させるやうに導くものであらねばならぬ。又自己訓練に適するものであり、なるべく活潑に四肢五體を働かすに適するものでありたい。靜的よりも動的で、娛樂といふよりも遊戯で、個的の遊戯であるよりも群團的の遊戯であらねばならぬ。無邪氣で、純じ、無技巧な、子供みづからの爲に子供みづからによつて演ぜられ得るやうな劇。即ち彼等の創造本能や藝術的衝動をいゝ工合に誘導して、彼等の心性を萬遍なく多方面に、自然に且つ圓滿に啓發し、撫育し、陶冶し得るやうな劇子供らの心から自發する、純な、自然な、遊戯と同脈の劇を指導の目標としてゐるのである。だから世俗の卑猥な劇や活動寫眞などを見てきた目で、可愛らしい、麗はしい、無邪氣な劇を見るに何だか氣持がすつきりしたやうに感じる。是でなければならぬのである。世俗の劇よりも趣味の低いものであつたら兒童劇たる資格はない。劇は一般の

人に見せないものだが、假令見られても世俗のものよりは趣味が高く教訓のこもつたもので、俗塵を洗ひ流すやうな、純真な綜合された藝術であらねばならぬ。父兄をも何となくほろりさせ、家内にも見せたい、自分の娘も喜んで出したい……こ、かういふ兒童劇を目標としてゐるのである。子供が木下藤吉郎を眞劍に賞演したならば次第に寒さにも堪へる子供になるだらう。又娘が「マリーのキチン」を心から賞演したら、あのマリーの様な國を思ふ心を體験させることが出来るやうと思ふ。我々同人は美しい人性を欲する、崇き人間性を培はんことを欲する。だから藝術の前にぬかづきかゝる正しき兒童劇をうち立てようを努力してゐるのである。尙我國に於ける舞臺藝術の花として、古今東西を通じて非常に勝れた獨特な美しさを持つてゐる所の能は、歌詞(謡曲)音楽(囃子)舞踊(舞又は型)の三要素から成立つ綜合藝術である。

その脚色は一見して甚だ單調に感ぜられるが、實は取材の範圍は頗る廣くて、形式も亦多種多様で、劇的傾向を多分に包含し、莊重優雅を主として、俗情を遠ざかりたる一種の品位があるから、觀賞の度を増すに従つて、妙味愈々深く、感興益々加はつて行くものである。かゝる神秘的な思想が流れてゐて、觀衆には嚴肅な氣分を抱かせ、美的要素を多分に具有してゐる莊重優雅な能樂の性質、脚色、構造(形式)、組織等すべて吾人の讚嘆惜かざる所で、兒童劇も範をこれに求めてその眞價を發揮せんことを企及したのである。

## 第二章 兒童劇指導の材料

### 第一節 題目選擇・排列の標準

自動性・劇的本能

兒童は其本來性として、自動性に富んでゐて、他に動かされるよりも

自ら動くことを好むものである。又頗る劇的本能に秀でてゐるものである。だから打すて置いて自分でも自然に其の見聞する物の眞似をして頻りに活動する習ひである。つまり自己表現と自己訓練を自然にするのが子供の本能である。じつとして居させるのは無理であるが、正しく活動させるのは、少しく利導さへすればむづかしくない。さういふ自動性を善導するのが教育の本旨である。

この劇的本能といふものは、他の言葉で言へば模倣本能である。人間はすべて子供の時には見聞くものを眞似ることに長じてゐる。それが即ち造化の妙作用で、成長するにつれて段々眞似が下手になる。さうして本能よりも智慮に、模倣よりも工夫に依頼するやうになる。だから其自動性を、其劇的本能を善導し、誘接して行くやうにすれば、そこに自ら有利な効果が生ずる。ところで、さう云ふ劇的本能や模倣性の最も盛んに現れるのは所謂遊びに於てである。

女の子がマ、ゴトをするのは唯單に衝動に驅られて、本能的にやつてゐるに過ぎない。男の子が「アリアヂンノ」を囃して、棒切れや銀紙ばりの刀で叩き合をしたり、競馬の眞似や電車の眞似をしたり、何々ゴツコをするのも、同じく唯本能や衝動に驅られてしてゐるのであるが、其無意識に、無秩序に併しながら最も好き好んでやつてゐることを、立派に規則立て、次第に理想化させるといふのが藝術化の端緒である。

兒童劇へ開展

そこで普通の遊戯や娯樂に新意匠を加へて品のよい藝術に引き直すといふことが教師の任務となつてくるのである。かくして子供等の性來遺傳してゐる所の本能、其性向、其情緒、其嗜好等をなるべく自然に且つ有利に誘導して彼等の心身を出來る限り圓滿に發達させる爲の

必然の手段として兒童劇へ展開し躍進するのである。あらゆる本能を發揮させ、其品性陶冶の上にも有效な働きをし、頗る複雑で、心理的にも、倫理的にも、また藝術的にも有益な結果をもたらすのみならず、男の子供にも女の子供にも同時に、同様に適用され得るといふことの教材を殆くすべて讀本中に求めたのである。

讀方教材の劇化

讀方の教育は劇化の爲の方便でない事はいふ迄もない。だがある場合には劇化する事によつて一層光輝を放つ事も否定し得ない。眞の劇化によつて教材は更にくかややかしくまた強く生き得るのである。兒童に藝術を興へよ。それは兒童にゆるさるべき當然の權利だ。兒童の持つ藝術心をすくく育ててやらう。それは我々教師の當然の義務ではないか。教材の内容が逐次充實し、兒童の想像、聯想、記憶、感情、感覺等が豊富明晰確實になつてくるに、その自らなる發展して内なるものが外に向つて表出せられざるを得なくなり、そこに具體直觀化につゞく行動化としての劇化作用が必然的に内部から要求されてくる。そして圖書、手工、國語、唱歌、遊戯、舞踊、地理、歴史等々々を合した所謂綜合藝術としての眞價が發揮せられる事になつて教育上極めて有利な方法となるのである。

劇の材源

而して其の材源は、童話神話史傳郷土美談其他國文學の傑作を單純化して劇化し、或は世界文學の傑作を單純化して同じく兒童劇化して採用してゐるのである。

第二節 改訂されたる各學年兒童劇の系統

科	民公土郷						科化文土郷			科然自土郷			色	目的	月	
	高二	高一	尋六	尋五	尋四	尋三	尋二	尋一	尋一	尋二	尋三	尋四				尋五
美的勞作	美的勞作	美的勞作	美的勞作	美的勞作	美的勞作	美的遊戯	美的遊戯	美的遊戯	美的遊戯	美的遊戯	美的遊戯	美的遊戯	美的遊戯	美的遊戯	美的遊戯	四月
劇	劇	劇	劇	劇	劇	劇	劇	劇	劇	劇	劇	劇	劇	劇	劇	五月
																六月
																七月
																九月
																十月
																十一月
																十二月
																一月
																二月
																三月
																三月

第三章 兒童劇指導の方法

第一節 脚本製作の方針

- (一) その學年の子供に適すること。
- (二) 出來得る限り筋や山は讀本の文と一致させること。
- (三) 讀本中の語句はなるべくそのまゝ生かすこと。
- (四) 時代的なものは正しい史實によること。
- (五) 單純な中にも藝術的感じを出し、無邪氣で純朴な脚本を創作すること。

(六) 讀本教材を主材とした脚本なら間違ひはない。演じて何等の危懼を感じないが讀本以外の脚本を使用する時には脚本の選擇に格別の注意を要する。脚本の檢閲は返すくも大切なことである。

國語讀本の教材中最初に劇化されたのは巻七「マリーのきてん」である。これから方々で劇化が行はれ、尙も讀本教材中劇に仕組まれるものは悉く劇化されて演演されるやうになつたのである。

第二節 劇化の指導法と其の要件

讀本教材を劇化しようとするには、先づ其の補充的取扱ひしてその教

材の劇的要素即ち構想、性格、背景、行爲者、行爲、時、場所等を吟味し、臺辭の種類に會話、獨白旁白等の有る事を知らしめ、テーマを考察し、そのクライマックスに達する道行の吟味をしてかゝらねばならぬ。そしていよいよ児童をして戯曲を仕組ませようとするに當つては、大槪左の如き諸注意を守らなければ、折角の努力も水泡に歸する場合がある。

- 一、この劇には人がおられたらどうか。いふ間によつて児童をして登場人物の問題を暗示する。
  - 二、児童自身で劇の役割に夫々適當の児童を選択するやうに仕向ける
  - 三、次に臺詞、場面、背景等の問題も同様な態度で解決させる。
  - 四、すべて童話を戯曲化する場合には、もし其物語の内容を繪畫的に表現した優秀作品があれば、必ずそれを見せること。これは舞臺装置や劇的所作及び裝飾等の考察上大なる示唆を與へるから。なるべく藝術味の豊かな、上品な、さうして成るべく簡單な脚本を作り、之が定つたら先づ子供達に巡廻りに朗讀させる。それから作意の説明をする。役々の説明をもする。科白の言ひ方や仕草や表情などについても、なるべく細かに説明をする。但し自分ですぐやつて見せたり、聽かせたりするのは、萬止むを得ない時だけにし、なるべく児童に工夫させて、色々直させるやうにする。
- かやうにして教師は出來得る限り自己及び自己の意見を晦匿しながら巧妙な示唆によつて一歩々々児童の劇的企圖を考察を抽出し、以て児童をして興味を感じつゝ反應的創造を構成的努力を完了せしめねばならない。
- 次に取扱方に關する要件として。
  - 一、開會の辭、閉會の辭、舞臺の設備等一切児童が分擔して所謂自治の精神を發揮させてゐる。

- 二、児童唱歌の中、三人が出て最初の歌の初句は甲兒、次の歌の初句は乙兒が歌つて、おの／＼其の後を合唱し、二曲ですむしたら丙兒だけ初句を歌はないことになる。四人の中二人除かれるのはかまはないが、三人の中一人除かれるのは、除かれる兒が氣の毒だから教師は細心の注意をしてゐる。
  - 三、揃ひの服を着させることいふことになれば、得て無理が出来る。父兒の負擔が大きくなる。是非不斷着のまゝでよいこといふ主義を實行してゐる。
  - 四、或一人の者がやたらにしゃべつて、まるで一人演説を聞くやうではならぬ。脚本がさうなつてゐても、もう少し相手の者にも物をはせるやうに修正してゐる。
  - 五、光明裡に幕を閉すことを児童劇の理想にし、たゞし脚本は悲劇になつても多少の變化を加へて陽氣な場面を終らせる。
  - 六、學校の歸途良兒を不良兒が虐めたりするやうなものには劇として感心できぬ。眞に迫れば迫る程苦々しく感ぜられる。
  - 元來児童劇は趣味を本旨として高尚優美な精神の涵養に資すべきものである。だからなるだけ美しい空想に満ちた夢のやうな、幻のやうなシーンを見せたいと力めてゐる。露骨な自然主義のものは避けなければならぬ。巡査から届けられたり、校長から叱責されたりするやうな場面は、見てゐる者に一種の苦痛を與へる。いふまでもなく劇の看客は児童である。で、児童本位であるべき筈だ。大人の見物人をアテに演ぜらるべきものではない。たゞし児童にも喧嘩調懲戒等餘りに現實味の多い、而も暗黒面の曝露は好ましくぬ事はいふまでもない。
  - 七、脚本の配布
- 脚本を謄寫して全校の児童に與へ、まづ補充讀物としての取扱を一通りして、全文即ち誰の役の言葉でもすら／＼讀めるやうにしておく。

八、本讀み

脚本を出演児童に讀ませるのであるが、その語調や聲量ははじめから相互批判で正させ、又大いに範讀して實感的に讀ませるやうにしてゐる。之は何べんなくくりかへして、自然に暗誦するまでにする。

九、役割の決定

なるべく多くの児童を働かせて、常の學習時に持たれぬものを持たせようとしてゐる。

兎角な評を受けるのは、この出演人物の選定にあることが多い。理想からいふなら全部の児童に行き渡つて出演させたいものであるが、それはなかなか望まれない事であるから、或る特色のある児童をその個性に應じた配役に選び、他は止むなく共同的な作業にたゞ壇上に顔を出させるといつたやうな方法をみることもあるが、何れにしても無理のないやうに、自然であり、公平であるやうに、さうして教育的であるやうに努めてゐる。

しかし劇鑑賞の心理いふ事を考へてみるに、必ずしも全部の子供が出演しなくとも、出演者を観衆、創作を鑑賞との關係が成立つ。見物席ミステージは空間的には離れてゐるが、時間的には一つのステージの上に演じられてゐる、即ち同一世界を共有してゐるのである。児童劇は綜合された藝術で、多勢が出演するものであるから、劇的な統一された藝術的満足は、見なければ即ち觀衆の一人でなければ決して味へないものである。

- 一〇、道具をつけて練習することにしてゐる。
- 言葉やシグサの練習のみを先にするのは非教育的である。仕度や道具が揃つてこそ、言葉やシグサが早く且つ創造的に出來るのである。
- 一一、しぐさの練習、

一ヶ所づゝしつかり基礎づけて行くのがよい。一つ誰かをしぐさをしたら、皆して批評し、これでよしと思ふまで決定的に出來てから、次のしぐさに進むのである。

「さつ／＼通り」なんて非効果的にし／＼進めてしまつては、それが先入主になつて、あとで部分々々を是正するのは仲々骨が折れる。

一二、振しぐさ

相當に誇張させるがよい。思ひきつて大げさにする。それでない観覽者によく分らない。勿論その時々によつてちがふが大方は言葉と共に動作するのがよい。

一三、言葉の句(セリフ)

十分息を吸はせて、出來るだけ短く句を切り、思ひ切つて言はせる様にしてゐる。

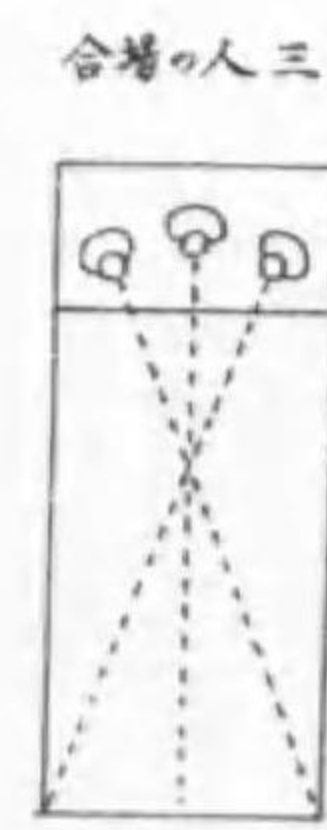
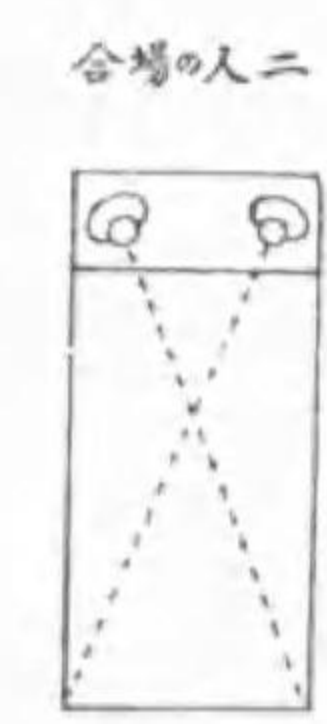
「もつ／＼大きな聲を出せ」といふよりも、句を短く切らせて、息を澤山吸はせれば聲が高くなる。

一四、セリフ廻し

は假聲じみないほうがよい。爺婆の聲が子供の聲であるが却つてよい。妖精や化物や大豪傑の聲が子供のまゝのピ／＼聲であるのが面白い。子供は物眞似は存外成人以上に巧妙なものであるから、身振は寫生的に工夫させ、爺婆は爺婆らしく猫や犬や豚や馬や牛は、其物らしく眞似させてゐる。

一五、體の向

觀覽席



二人の場合は室の對角線の方に胸を向け、(上手の者は右足前、

下手の者は左足で立止つて、首だけ二人がむき合せる様に。三人の場合は、中の者が正面に向いて首だけ左右の話者の方を向ける。こいつた具合にしてゐる。然し互に餘りくつゝかないで、少し離れ目の方がよい。四人以上はすべてこの考が必要である。さうするに狭い舞臺でも廣く見え、ゆとりが出来る。

幕を引く時は最もむづかしい。早かつたりしては最後の瞬間で印象をわるくして下ふ。よく話して置いて、幕を引き終つても、先生が「よし。」といふまで動作をつとけておける様に習慣づけておくのである。こゝだけ何度も練習しておく必要がある。

二二、幕

幕を引く時は最もむづかしい。早かつたりしては最後の瞬間で印象をわるくして下ふ。よく話して置いて、幕を引き終つても、先生が「よし。」といふまで動作をつとけておける様に習慣づけておくのである。こゝだけ何度も練習しておく必要がある。

二二、鼻汁、便所

實演前に必ず注意してゐる。

二三、舞臺裏にゐる時

いたづらをしたり、話しあつたりするから、よく注意しておく。之は共同的社會的な生活指導をするのによい機會である。

二四、實演前必ず聲を出させておく。

熱い部屋で長い間出演を待つてゐる場合などは、水をくゝませて口をしめさせる事も大事である。

二五、實演中の指導

場所を考へずに出て不調和なところで、平氣でやつてゐることは屢々ある。こんな時はその實演中、思ひきつてはつきり「○○さん少し前、もう少し。」等と言つて注意してゐる。これも練習中から、教師がさう言つても、實演を止めないで、注意の言葉に従ふ練習づけておく必要がある。

二六、幕前の時間

出来るだけ短縮する工夫をしてゐる。それは前の作業が終る前、已に兒童の仕度が完成するやう、早くから用意しておいて、少しでも早くベルをならし、一人誰か先に

二〇、登場退場

兒童は見える所へ出るに緊張するが、見えないと思ふと氣をゆるめる。打つて拍手の呼びをかけて、場を緊張させ、靜肅に返す必要がある。

一八、拍手や喝采はなるべく幕開きて、幕の終りまでだけにしてゐる。一つには劇の進行の邪魔になるから。二つには子供の事だから、だしぬけに拍手されたり何かするに、セリフを忘れること等もある。三つには喝采を目的にするやうな弊——即ち場受けを祝ふ辭を醸す弊も生じる。

一九、役割の下へ子供の名を書き出したり、貼り出したりする事はしてゐない。

虛榮辭を附ける原因になるから、他人に観せるのが主でなく、自ら楽しむのが主である以上、名を貼り出す必要はない。さうはいふものゝ、極めてよく出来た場合に、讚辭を與へるのはわるい事ではない。

二七、批評の仕方  
すべて批評は落膽させたり、自暴自棄に陥らせるのは趣旨でない。自奮自勵として、將來の光明に向て突進する意氣を養ふのである。

批評の目的は進歩發展の促進である。批評は具體的にして、よい所を多く、希望する所を少々にせよめ、その直し方を具體的に示すのである。そして學校の教育方針がその批評の上に浮出るやうに工夫してゐる。

例へば、その點が工夫し創作してあつたか、又その程度まで熟練が出来てゐたか、作業活動、自治活動がみんなに出来たかを認めてやる等々々

二八、結果にあらず過程を

兒童劇に對する精神的觀念が不足してゐるに、劇の本質を忘れてたゞもうまく上手に失敗のないやうにやらうとのみか先に立つて、何でも彼でも、詰込主義の其の場限りのものが多いなる。これがいけない。上手なものを見ようとか、見せようとかいふ見なら、他にいくらか適當な機關がある筈だ。我々同人のいふ兒童劇はそんなお祭騒ぎのものではない。だから本當の意味はその結果にのみ重きを置かないで、そこに到達する迄のプロセス、言ひかへれば本校の指導方針によつて教育して來た結果の一例が、其の日演じた兒童劇であるのである。

第三節 道具製作の方針

(一)實的でなく、象徴的に想像の餘地を多く残すやうに作る。こゝ。(二)圖畫手工書方等に轉向伸展して、兒童自身が工夫發案し、製作する事を眼目とする。

(三)奢侈に流れず、浪費をせぬやうにする事。

衣裳でも背景でも小道具でも、出来るだけ簡單な質素なもので間に合してゐる。大まかな暗示的な、象徴的なもので、ちよつとそれらしく思はせさへすればよいのである。

要するに上品簡素な支度を出来る限り、兒童が工夫し、製作するのである。舞臺装置は机か椅子か兒童の腰掛、それに毛布位で間に合ふやうにしてゐる。簡單な支度で暗示し、それに必要なだけの實感的効果は收めてゐると思ふ。これは兒童の豊かな想像力に信頼してよい。

日、月、星、樹木、草、土堤、山、建物等はボール紙へ描いて、上部に鈎針形に針金をつけておいて、適當なところの背景の幕等へブツリさして、ふら下けるのが一番手取早くてよい。

但し舞臺前方のものは、小さな板か細い角材に釘で打ちつける様にす

る。乗馬は椅子に紙製の馬の頭をつけ、汽車の窓も椅子に紙製窓をはりつけて作る。

ステージの上を空にするには背面に紙に書いた窓を貼る。又「マリー

の部屋」なき、揭示してもよい。又林中の様子を表すには大きな岩山を作るには蚊帳を使つてもよい。又林中の様子を表すには背景の繪をかけて、外に二本ばかり紙製の大木を立て、木の枝を結びつけておけばよい。

鳥、兎、龜、鼠等に身なりをつけるには、冠をつけさせてゐる。

老人は白髪と眼鏡、町人風は烏打帽子一つでよからう。

帽子布ハンテン等は兒童の家庭から集めて、程よい物を借用することもある。

何れにしても、ごく簡單で、たゞ暗示に役立てばよいのである。

第四節 綜合藝術への裏書

昭和七年吾々同人が唱導した綜合學習に、裏書きする教材が始めて昭和九年二月小學國語讀本卷三十六かちく山によつて發表された即ち打ち込んで内燃ゆる生命の姿を表現し、そこに發動的活動的遊戲的模倣的想像的並びに創造的生活の営みを具象化しようとするのが兒童(殊に幼童)生活の真相であらねばならぬ。本教材はかうした兒童生活の本質に喰ひ入つて生活描寫の妙諦を極めた名文である。良雄と太郎の溶け込む様な美しい友情を基調として、まづ圖畫作業に入り、手作業及び話方作業へ連続的高次の發展を辿り、遂に劇的作業に進んで思ふ存分童心を躍動せしめつゝ、そこに感情の清淨を圖り、創造性の深化を期し、智能陶冶の契機を索め、かくて限りなき生の歡びの中に魂の高揚を促さうとする創意になつてゐる。圖畫に手工にはた又劇に全心を打ち込みつゝ、刻々に生の創造を實現して行く所に何ともいへぬ快味を覺えしめ、かのありふれた所の型にはまつた劇なきは其の趣を異にしてゐる。即ち創意と創造を無視した普通の學習劇ではない。固形化した生命の糟粕に押し込められた束縛がない。すべてが動的だ。自由だ。朗かだ。新鮮だ。思ひのまゝに創造的生命が燃焼していくのだ。そして最後に、優しい母と姉が眞に迫つた劇の魅力に引きつけられてゐたのだ。これ全く吾人のいふ兒童劇と合致するところのもので其の卓見と洞察に滿腔の敬意を表するに共に萬斛の溜養を下けたのである。

第四章 兒童劇指導の實際

第一節 改訂系統の劇指導要目

Table with 7 columns: 月, 題目, 間時, 要旨, 結合聯絡教材, 指導場所. Rows include 一 コアトリ四, 二 花サカヤイ, 三 ヌズメイリ, 四 ヌズメイリ, 五 ヒノマル, 六 ヌズメイリ, 七 スズメ.

1 第一劇指導要目

2 第二劇指導要目

Table with 7 columns: 月, 題目, 間時, 要旨, 結合聯絡教材, 指導場所. Rows include 一 白うさぎ, 二 浦島太郎, 三 山かちく, 四 山かちく, 五 山かちく, 六 山かちく.

3 第三劇指導要目

Table with 7 columns: 月, 題目, 間時, 要旨, 結合聯絡教材, 指導場所. Rows include 一 神風, 二 神風, 三 神風, 四 大蛇たい, 五 大蛇たい, 六 熊襲征伐, 七 熊襲征伐, 八 熊襲征伐, 九 熊襲征伐, 十 熊襲征伐, 十一 熊襲征伐, 十二 熊襲征伐.





日露戦争始まつた。  
さつさ逃げるはロシアの兵  
死んでもつくすは日本の兵  
五萬の兵を引きつれて  
六萬六千みなごろし  
七月八日の戦ひに  
ハルビンまでも攻めよせて  
クロバトキンが逃げました。  
東郷大將萬々歳。(兒童作であるから事實と相違する點がある)  
一回すんで第二回目の半ば頃まで進んだ時、  
チリン／＼／＼と號外の音がきこえてくる。  
テマルツキをしてゐる女兒の一人  
「あゝ號外や〜」  
男兒一名新聞配達人になつて、古新聞を小さく切つたものを澤山持つて勢よく走つてくる。女兒二三人  
「號外おくれ、おくれ」もらひに行く。  
配達人二三枚投げて駆け去る。  
もらつた女兒の一人  
「何の號外やわからへん。〇〇さん読んでんか。」  
女兒の一人暫くじつと見てから(同じテマルツキをしてゐる中の一女兒)  
「これは三勇士の事やがな。江下、北川、作江といふえらい三人の兵隊さんがビョウコーチンでばくれつ弾を投げて鐵條網を打ち破つて名譽の戦死をせられた事が書いてあるわ。」  
女兒三四名  
「何さまあ、えらいない。」  
女兒一名

「あゝオタビのサイレンがなつてゐる。もう遅いからみんな歸りませう。」  
女兒一同「かへろ〜」「歸りませう〜」  
互に肩に手をかけながら、或は手をつないでゐる兒もある。  
「夕焼こやけて日がくれて、山のお寺のかねがなる、お手でつないで皆かへろ、鳥も一しよに歸りませう。」の歌を歌ひながら歸途につく  
第二幕 (安田小三郎氏宅、夜深更)  
役場の宿直員夜中遅く安田君の宅をドン／＼／＼とたたき。  
「今晚は、今晚は。こゝのうちはネボケやな。今晚は、(一段聲をはり上げて)今晚は……………」  
漸く家族の者が目をさました。  
母「さなたです。」  
役吏「役場からです。急用です。」  
母「今すぐあけます。……………」起きて戸をあける。  
役吏「召集令狀が來ました。之を小三郎さんに渡して下さい。」  
母「あゝ、さうですが、夜中遅く御苦勞さんです。」  
役吏「さやうなら。」母「さやうなら。」  
家族の者起きて次の様にする。  
小三郎 弟(益次)  
正面 父〇  
(火鉢) 母  
母「小三郎に召集令狀が來ました。……………」令狀を父に渡す。  
父「あゝ、さうか。目出度い〜」令狀を見て次へ渡す。こゝへ在郷軍人分會長土橋清次君が急ぎ訪問する。

分會長「今晚は、今晚は……………」小さい聲。  
母「さなたです。」  
分會長「私です。土橋です。」  
母「起ちてすぐに戸を開き火鉢のそばへ案内する。  
分會長「夜分御邪魔してすみません。小三郎君に召集令狀が下つたものですね。」  
父「はい、ありがたう御座います。一家の名譽です。みんな喜んであります。小三郎を出征さすについては、一日も早く私の病氣をなほして、二人分働いてしつかりやりたいもんです。」  
母「小三郎がゐなくても、皆が力を合せて其の氣で働けばよいのです」  
分會長兩親の言をきき、感激してホロリとする。  
弟の益次、兩肩を立て、ぐつと力を入れ、指を握つて膝の上に置き元氣に。  
「何、大丈夫です。總ては僕の責任です。御安心下さい。アニキの仕事は自分の精出す事によつてのみ解決するのです。」  
稍兄の方をむいて、  
「兄さん、家の事は僕が引受けます。さうか安心して御奉公して下さい。あゝこの事は僕にまかして下さい。」  
小三郎  
「それでは皆さん、留守中はよろしく頼みます。平素今日ある事をまつてゐたのです。」  
分會長「やゝ、すい分遅くまで御邪魔しました。皆さんの心がけ、まことに感心の外ありません。安田君さうぞしつかりやつて下さいねいづれ又御目にかゝります。左様なら。失禮いたします。」  
家族一同「左様なら。」特に母だけ戸口まで見送る。  
第三幕 出征の日  
見送人の一人「あゝ勇ましい軍歌がきこえて來た。」

組の者全部國旗を持つて軍歌を歌ひながら、歩武堂々舞臺の下に集合。  
(軍歌は兒童の一人がものした、安田小三郎君出征の歌・中村新太郎少佐の曲)  
1、所は寺田の中西の、旗をくましました其の中をタスキをかけて勇み出る  
其の名は安田小三郎さん。  
2、義勇報公四つの文字、  
胸にきざみてむちを擧ぐ、  
ますらを安田小三郎さん  
ゆくては遠し上海へ。  
これを何回もくりかへして勇壯に歌ふ。  
暫くたつてから安田君舞臺に現れ、擧手の禮をする。全兒童旗を高くあけて  
「バンザイ〜」  
次に安田君が不動の姿勢で挨拶する。  
「皆さん、今日は雪解けで、大變道がわるく、其の上お忙がしいにもかゝはらず、私の爲にわざ／＼お見送り下さいまして、誠にありがとうございました。さうございませう。」  
おそれ多くも 明治天皇は、  
國を思ふみちに二つはなかりけり  
いくさのには立つも立たぬも  
ミ仰せられました。私が戦に行くのミ、皆さんがうちで仕事に精をお出しになるのミ、少しもかはる所はありません。それに、こんなに盛んな御見送りをうけまして、何とも御禮の申し上げやうもございませぬ。私は一命をさゝけてみ國のために盡します。さうぞ皆さん、御からだを御大事にして下さいませ。では行つて参ります。皆

さん左様なら。」  
安田君舉手の禮、一同國旗を高く擧げて

「バンザイ・バンザイ。」  
一 兒童「電車はピタリと驟にこまりました。」(舞臺裏より)  
一 兒童「ピリッ、ピリッ、笛を吹いて、」

「やがて奈良電車は南に向つて靜かに動き出しました。」と叫ぶ。こ  
れと同時に、安田君は舞臺の上で舉手の禮をしながら歩き出す。兒  
童一同は安田君が歩き出すと同時に、同方向に前の出征歌を歌ひな  
がら歩く。

出征歌の

(1) 所は寺田の中西の  
旗をくました其の中を  
タスキをかけて勇み出る

其の名は安田小三郎さん。

電車の中で萬々歳、

國旗を振り振り萬々歳。

(2) 義勇報公四つの文字

胸にきざみてむちを擧ぐ

ますらを安田小三郎さん

ゆくては遠し上海へ、

電車の中で萬々歳

國旗をふりく、萬々歳。

と舞臺の裏を通つて、尙勇ましく歌いながら退場して幕。

結合聯絡教材

讀本卷七第十三、一太郎やあい

讀本卷九第廿四、水兵の母

尋五綜合科 十月 水兵の母の劇

鼓堂々たる有様、全く平素の動作とはちがつてゐた。日本民族の血潮  
は彼等の全身に脈々として躍動してゐたのである。

「真劍」實に恐ろしいものだ。

いよいよ公開！ 學藝會の日は来た。四月六日(昭和八年)寺田校  
創立六十周年記念日……教育後援會發會式の佳日來。

私も兒童も相當に自信を持つてゐた。可なりの出來榮だつたらうこ  
ひより天狗をきめこんでゐる。

餘り子供が巧くやるのは興のさめるものだ。まつたくだ。専門化す  
る。寶塚化といふ事は問題だ。勿論我輩のやつた劇は専門化も寶塚化  
もしてゐなかつた事と自負してゐる。

が、其の劇は兒童本位で、我輩の獨創したもので、相當熟練した所  
があつたことと自惚てゐる。

其の上學藝の空氣になくはならぬ上品、明朗、元氣といふ點も備は  
つてゐた三四度うのほれて置く。昔から自惚と瘡氣のない者はない。「  
こいふからね。

斯道の大家長尾豊氏は

「劇を遊戯だといふことを喜ばぬ人もあらふ。けれども、兒童の喜ん  
で演ずる遊戯であつて、又さう作られたものであつて、はじめて兒童  
の文學であり、藝術であるといへる。反對にそれがいかに藝術的であ  
り、文學的に立派であつても、兒童の喜んで演ずるものならなければ、  
少くとも兒童の劇ではない。だが、これはひゞり文學的や藝術的  
だけの話ではなく、それが如何に教育的に立派に出來てゐても、兒童  
が喜んで演ずるところがなければ、同様に兒童の劇ではないのだ。」と  
言つてをられる。……してゐる。我輩が指導したこの劇……  
だこぼるゑんてゐる。

最後に私は、  
「學校文化の一つとして、その學校の兒童が、兒童劇の一つも持つて

尋五 修身第四課 舉國一致 備考

安田君の出征は昭和七年二月廿六日午後三時半寺田驛出發、三重縣  
津聯隊へ入隊、程なく上海へ出征、

劇 郷土美談 安田小三郎君の出征(訓導 櫻 覺 雄)  
私は安田君の事は知悉してゐる。だからそれを劇に仕組むのは易々  
たる事であつた。其事實を事實のままに書きつらねただけで、少しの  
潤色も加へてゐない。

兒童も亦同君の日常は勿論、出征當日の光景を熟知してゐる。だか  
ら其の演出は極めて容易であつた。  
加之當時は上海事變の眞最中だつたから、小國民連までが敵愾心に  
燃え上つてゐた。

「皆さんの知つてゐる安田小三郎さんの劇をしませう。」と言ふと拍手  
喝采、早や拳を握りしめていきり立つてゐる。

「さあ練習しよう。」例により學校の方針に準據して

- 1、登場人物の吟味。
- 2、役割の選擇は兒童自身の手でなされ。
- 3、場面背景等も同様の態度で決定。
- 4、國旗は各自が二本づゝ作つてくること。
- 5、其他の小道具類全部兒童の手によつて用意せられた。
- 6、臺詞は私が與へた。

一れつ談判破裂しての……テマルツキの歌も、安田君の出征歌も、  
當村兒童の作だから皆知つてゐる。科白も所作も直ぐ覺えてしまつた  
出征當日の寺田驛頭の光景を目撃してゐる兒童には眞に迫つたのであ  
らう。殊に男兒は、毗裂けて眉昂り、屠龍搏虎の勢を示し、隊伍整々旗

るないといふのは、可哀さうだ。立體的綜合的なる劇を——○教科目  
の狭い枠内に、高く飛揚すべき子供の精神を閉ぢ込めつものりなのだ  
らうか。多くの兒童が參與してなされる兒童劇に於て、作業し、體驗  
せしめてこそ、教科が眞に教育的に生きて來るのだ。さらわれた考で  
ゐる。何も彼も不振になる。——兒童に對しては兒童劇だ。——と痛感  
して秃筆を擱く。

2劇 モモタラウ (訓導 西村 ヨシノ)

人物 桃太郎、おぢいさん、おばあさん、犬、猿、雉、鬼の大將、  
鬼の家來數名、唱歌隊、數名

背景 第一場 桃太郎の家の前

第二場 鬼征伐の道

第三場 鬼の城の門

道具 鬼征伐の旗、桃の紋、きびだんご、袋、鬼犬猿雉の面、デ  
ン、頭巾、うす、きね、刀、鐵棒、車、扇、寶物。

第一場

モモタラウ「おぢいさん、おばあさん、ワタクシハオニガシマヘオニセ

イバツニユキタイノデス。ドウゾイカシナクダサイ。」

フタリ「オニガシマ、マアマアマ。」

モモタラウ「オニナセイバツシタラ、スダカヘツテマイリマス。」

オヤイサン「オニセイバツトハ、イサマシイ、オベントウニ、ニツボン

一ノキビダンゴヲコシラヘテアゲマセウ。」(おぢいさんも

ちをつく)

オバアサン「ソレガヨロシウゴザイマス。ワタクシハモモタラウノオシタ

クラシマセウ。」(桃太郎の服裝をなす)

オチイサン「サア、コレヲコシニサゲテ、ユクノデス。」(きびだんごを渡

す)

モモタラウ「アリガタウゴザイマス。」(鬼征伐の服装をして出かける)  
 フ タ 「ハヤクカヘツテクダサイヨ。」  
 モモタラウ「オヂイサンモ、オバアサンモ、ゴキゲンヨウ。」  
 シヤウカ「モモカラウマレタモモタラウ、  
 キハヤサシクテチカラモチ  
 オニガシマヲバウタントテ  
 イサンデイヘチデカケタリ

第二場

イ × 「モモタラウサン、モモタラウサン、ドコヘオイデニナリマスカ。」  
 モモタラウ「オニガシマヘオニタイデニ。」  
 イ × 「オコシニツケタモノハ、ナンデスカ。」  
 モモタラウ「ニツボン一ノキビダンゴ。」  
 イ × 「ツクダサイ、オトモシマセウ。」  
 モモタラウ「ヨシ、ヨシ、コレヲヤルカラツイテコイ。」  
 サ ル 「モモタラウサン、モモタラウサン、ドコヘオイデニナリマスカ。」  
 モモタラウ「オニガシマヘ、オニタイデニ。」  
 サ ル 「オコシニツケタモノハ、ナンデスカ。」  
 モモタラウ「ニツボン一ノキビダンゴ。」  
 サ ル 「ツクダサイ、オトモシマセウ。」  
 モモタラウ「ヨシ、ヨシ、コレヲヤルカラツイテコイ。」  
 キ シ 「モモタラウサン、モモタラウサン、ドコヘオイデニナリマスカ。」  
 モモタラウ「オニガシマヘオニタイデニ。」  
 キ シ 「オコシニツケタモノハ、ナンデスカ。」

モモタラウ「ニツボン一ノキビダンゴ。」  
 キ シ 「ツクダサイ、オトモシマセウ。」  
 モモタラウ「ヨシ、ヨシ、コレヲヤルカラツイテコイ。」  
 シヤウカ「ニツボン一ノキビダンゴ  
 ナサケニツキケルイヌトサル  
 キジモモロウテオトモスル  
 イソゲモノドモ、オクルナヨ。」

第三場

モモタラウ「サア、ココガオニガシマダ。イヌハカミツケ。」  
 イ × 「ハイ」  
 モモタラウ「サルハヒツカケ」  
 サ ル 「ハイ」  
 モモタラウ「キジハツツツケ」  
 キ シ 「ハイ」  
 モモタラウ「ヤイ、オニドモオキロ」(鬼大ゼイ出場)  
 オニノ大將「オマヘハ、ドコノモノダ。」  
 モモタラウ「ボクハ、ニツボンノモモタラウダ、オマヘタチガ、ワルイコトヲスルカラ、セイバツニキタノダ。」  
 オニノ大將「ナニヲナマイキナ、ソレヤツテシマヘ。」(桃太郎軍と鬼と戦ひ鬼皆倒る)  
 モモタラウ「サアドウダ」(桃太郎鬼の大將をおさへつける)  
 オニノ大將「カウサン、カウサン、カウサンイタシマス。アナタノヤウナツヨイ人ニハ、カテマセン。モウケツシテ人ヲクルシメタリ、モノヲトツタリイタシマセン。イノチダケハ、オタスケクダサイ。」  
 モモタラウ「ソレナラユルシテヤル」

オニノ大將「サア、ミンナノモノ、タカラモノヲ、アルダケ、クルマニツンデコイ。」  
 オニドモ「カシコマリマシタ」  
 オニノ大將「コレヲオモチカヘリクダサイ。」  
 モモタラウ「ヨシ、サアコレカラガイセンダ、セケヒケ。」  
 イ × 「エンヤラヤ、エンヤラヤ」  
 キ シ 「モモタラウ「バンザイ、バンザイ」(日の丸の旗をひらいて)  
 シヤウカ「ハゲシイイクサニ大シヤウリ  
 オニガシマヲバセメフセテ、  
 トツタタカラハ、ナニナニゾ、  
 キンギンサンゴ、アヤニシキ  
 クルマニツンダ、タカラモノ  
 イヌガヒキダス、エンヤラヤ  
 サルガアトオス、エンヤラヤ  
 キジガツナヒク、エンヤラヤ」

第一場

モモタラウ (訓導 西村ヨシノ)  
 九月二十七日國語の時間「モモタラウ」の全課の取扱が大體終つた時一児童が、  
 「先生はじめから劇しよう」  
 と云つた。するにあらから、こちからからも、  
 「先生僕桃太郎さんにさしてや」  
 「わたし犬やで」「僕さる」「僕きじ」ミ、しきりに云ひはる。  
 「あした、さしてあけるから、もつこ本を讀んでおきなさい」  
 「先生ほんまやで」  
 内容が充實するに、その自らなる發展として内なるものが外に向つ

て表出せられざるを得なくなる。即ち具體化、直観化につれて行動化としての劇化作業が必然的に内から要求せられて来るのである。

我が國民精神の象徴としての本物語の劇化こそ、教育上大に價値あるものだと思ふ。

放課後早速脚本作りに取かゝつた。なか／＼むつかしいので困つた仕方なしに既成の脚本をさがし出してそれを参考にして、教科書の文は出来るだけ生かして、やつこ作り上げることが出来た。

九月二十八日、脚本を配布す。児童はみんな眼をかがやかせて一心に讀みつゞける、暫時自由讀。次に配役の決定、これは子供相互に選ばせることにした。

「モモタラウサン」「オヂイサン」「オバアサン」「イヌ」「サル」「キジ」……ミ子供相應に長所を見出し、適材適所にうまく選ぶと思つた。選ばれた子供が對話的に讀み科白の練習をも少しづつしてゐるうちに一時間はすぎた。

次の時間児童と共に劇の道具類の製作、背景の考案、製作等實演に關する仕事を各々児童に分擔させて作ることにした。學級四分團に分れて、各々割あてられた仕事に忙しい。

小塗板に背景の繪を描くもの、犬猿雉鬼の面を畫紙に描いて切抜くもの、桃太郎さんの鬼征伐の旗、桃の紋、面を作るもの、たからものを描いて切抜くもの、車を工夫してゐるもの、其他ウス、キネ、袋等を採集する者「キビダンゴ」には手工に前作つた、粘土の球桃太郎さん、おぢいさん、おばあさんのでんちには、女の子のジャンパー、刀、鐵棒には竹の棒等、小さい児童は喜びの中に、各分擔された自分の仕事に無中である。

この工作過程に於て、色々な技術が習得せらるゝと共に、児童各自にその長所を充分發揮させて、そこに眞の協力の世界を實現させることは所謂社會精神の導入の意味に於ても、價値あることだと思ふ。

九月二十九日、みんなて協力してやつこ作り上げた舞臺、まづいが子供の力、魂の入つた服装、持物で實演の練習をなす。科白、動作がさうも出来ない。第二場の桃太郎の鬼征伐の道、犬猿雉が家來になる場は、教科書のまゝだから、初めから可成出来るが、肝心の本物語のクライマックスである第三場、桃太郎、犬猿雉が勇ましく鬼をも攻め破る場面が、さうもうまく出来ないで何回もく練習をなす。

最後の犬、猿、雉が「エンヤラヤ〜」またかもの、車を引いて、桃太郎が扇をひろけて「バンザイ〜」と掛聲勇ましく、がいせん、唱歌桃太郎(三)(四)で幕さなつて終つてゐるが、最後が何だか物足りなく感じた。が長い物語であるから却つて、あつさりやつめておく方がよいのかと思ふ。

「もうやめておきませうね」  
「先生もつこさとして下さい」  
「もうーべん」

演技するもの、鑑賞するものなく、やめそうにもない。一心にやつてゐる、一心に見てゐる。

桃太郎の破邪顯正の奮闘、部下に對する信愛犬、猿、雉等の桃太郎に對する犠牲的精神、桃太郎の両親が子供の個性を生かすために、淋しさを我慢する父性道、母性道、これ等の演技と鑑賞を通して、児童の魂の中に眠る、日本精神が揺り動かされるのであると思ふ。かくして綜合藝術としての劇の眞價が發揮せられることになるのである。

附録。主なる参考書目

児童教育と演劇	坪内逍遙
第二國語の講習	八波則吉
児童劇選集	栗原登
小學國語讀本解説卷二	宮川菊
児童劇指導の實際	長尾豊

特設綜合科に於ける

# 低學年の自然科・郷土地理・國史教育の實際

## 第一章 自然科・郷土地理・國史教育特設の基礎

### 第一節 兒童教育の本義

兒童教育の本義は色々な言葉で言ひ表はされやう。私は一言に教師が兒童の生活を指導することであるを斷定したい。

教師と兒童が結合する可能は何處にあるのであらうか。先づ我々教師が兒童と時と處を同じうすることは結合を可能ならしむる條件である。然しそれは結合によつて、さほ重大な役割を演じてゐないといふことは次の例によつて明らかであると思ふ。我々は現在を越えた過去の世界に崇拜する人物を持ち得るといふ事實である。又現住所を越えた遠い人達にも心を通はすことの可能であるといふ事實である。時と處とは結合するに機縁とはなるが、結合の本質ではないと思はれる。然らば如何なる世界に本質があるのだらうか。

私は教育をして教育たらしむるもの、結合をして可能ならしむる世界は、私共の生活の中核であり、基底である。この世界の眞實性にあると言ひたいのである。私達も兒童も、この中心に毎日生活をしてゐる私が私の胸に育つてゐる眞實なものを、常に求め歩んで行く時、兒童は無意識的に或は有意識的にこの眞實に觸れ、そして彼自らの眞實性が明瞭に自覺されるのではないかと思ふのである。このまゝ、このまゝ、この共鳴共感の世界が、眞の教育の世界である。然し眞實は觀念的で超越的なものではない。この眞實は我々の生活指導原理であり、發展原理であり、究極原理であるが故に、常に我々の言動に現れるのである。それ故兒童はこの教師の言葉や動作の糸を通じて、互ひの眞實性を結びつけるのではないだらうか。この有形なものを通じて無形の世界を通はせるのではないだらうか。教育はこの教師と兒童が、時と處を同じうするといふ機縁を通じて

互に眞實を通はす世界なのである。小西先生が高著「教育の本質觀」で教へて下さる二人の行者が、イデヤの前で禮拜してゐる姿なのである。かゝる意味で教師は永遠なる世界を内に求め、兒童の生活の諸相に觸れて共に進み行くものでなければならぬ。秋の落葉のその愛の如くでなければならぬ。

兒童は兒童としての眞實をもつてゐる。この精神は凡ての兒童に附與されてゐる。この眞實性を時と場所に通はせ、結合させて行く時、兒童の全一的な生活が生れて來るのである。私は曩に原理論に於て、兒童の眞實性の具體的な姿は勞作に現れ、勞作は永遠の今に於て郷土に結びつけられて具現するものであると論述したのである。この郷土に於ける兒童の全一的な生活こそ、我々の教育對象であり、日々培はねばならない世界なのである。

兒童教育の本義は一言にしてかゝる郷土に於ける兒童の全一的な生活の指導であると言ひ得るのである。

本校の實施してゐる綜合科は、この兒童教育本義に立つて實施せられてゐるのである。私は次に郷土に於ける兒童生活の展開を辿つて見やうと思ふ。

### 第二節 郷土に於ける兒童生活の諸觀

#### 1、郷土に於ける兒童生活

##### (1) 兒童の郷土生活發展相

兒童の生命が勞作を通じ、郷土と結合された世界が兒童生活そのものである。この兒童生活は無限に發展する眞實を中心とするが故に、兒童生活も無限に發展するものと考へられるのである。

私は曩の具體的日本教育道に於て、兒童生活の展開を圖示して置いたのであるが、今小西先生の御言葉を借りてその發展相を如實に見たいと思ふ。小西先生は「郷土と無限性」なる論文に於て「子供の最初

の郷土は母の胸である。父の膝である。この育つ家庭である。こゝに彼は愛を味ひ、敬を體驗し、信に生きる。父母の眞實性の中にはぐまれ、自己の眞實性の扉も開かれて行く。母性愛、父性敬、父母の信の根本資源である。父母の眞實性こそ子供の眞實性の接融融合、これに子供の最初の郷土感である。眞實性は常に眞實の世界を求め、遂には絶対眞實へ努力し、無限界へ憧れて行く。春は野の花夏は河の流れ、秋は山の紅葉、儂りなき自然の千姿萬態、變化の中にも恒久無限のさゝやきを感じしむる。隣人の勤勞、村人の共同作業、神社の祭、寺院の讀經、地理的、歴史的、理科的、宗教的、道徳的、藝術的な様々の生活交渉は子供の郷土として體驗される。こゝに述べてられる。實に兒童の郷土生活の最初は母の胸に於て、父の膝に於て體驗され、全一的な生活が構成される。かゝる父母による全的生活は、家庭、學校、村、日本國家への過程を経て、無限への創造に向ふのである。

②兒童の郷土生活内容

かゝる發展相を踏襲してその内容を明らかにしたいと思ふ。兒童は郷土的環境と全體的精神的に交渉し、全體的體驗をなすものである。其處には科學的、道徳的、藝術的、宗教的、勤勞的生活が内含されてゐるが、かく分類せられない全一的な生活として體驗せられてゐるのである。しかもその多くは無意識的に構成せられたものであると思ふ。

かゝる兒童の内なる生活體驗を基礎にして自覺的に發展させやうとするのが綜合科の使命である。私は次に今少し具體的にこの姿を眺めて見やう。  
2、兒童の理科的、地理的、歴史的、生活の具體相、理科的、地理的、歴史的な生活は兒童生活の一面である。

日小學國語讀本・尋常小學國語讀本に現れたる理科内容  
△小學國語讀本尋常科用 卷一の部

頁	題 目	内 容
二	サ ク ラ	櫻の満開
四	シ ロ	犬の習性
六	オ ヒ サ マ	朝日の壯觀
八	ナ ノ ハ ナ	花と虫との關係
一一	ハ ハ ト	鳩の形態と習性
一二	ノ ハ ラ ト ウ シ	牛の形態と習性
一三	ヒ バ リ	雲雀の習性と形態
一四	カ ラ ス	鳥の習性と形態
一五	ツ キ	月の美觀
二一	ヒ カ ウ キ	飛行機飛翔の壯觀
二二	マ サ ナ サ ノ オ ツ カ ヒ	犬の習性
二四	デン ワ ア ソ ビ	子供の電話遊び
二六	カ ヘ ル	蛙の習性
二七	デン デ ム シ	蝸牛の形態と習性
二八	ア メ、カゼ、キノハ	自然現象の描寫
二九	メ ダ カ	めだかの習性
三〇	シヤボンダマ	しやほん玉の製作と實驗
三二	ホタルトリ	夜の螢取の體驗
三八	ハコニハ	箱庭の製作と氣象
四四	ヒゴヒ	緋鯉の形態と習性
四五	アサガホ	朝顔の栽培と研究
四六	ホシ	星の研究
四八	ウサギトカメ	兎と龜の習性

兒童は學校に入學する以前に於て、又入學後もその家庭生活、社會生活に於て父母兄弟姉妹に、或は又村人に色々教へられるものである。

春の野に花を求め、夏の河に釣竿を垂れ、秋は山にきのこを尋ね、冬はたこあけに熱中してゐる。兒童は花と語り虫に呼びかけるものである。かゝる生活體驗こそ低學年自然科の基調をなすものである。

かゝる自然交渉の間に山、川、谷等の地勢が體驗され、氣候や天産物等も生活に溶けこむものである。親類や友達の家を訪れる時、其處には村の道、隣村、交通機關等が無意識的に體驗せられてゐるであらう。村人の勤勞生活を見る毎に、産物の何であるかを知り得るであらう。かゝる生活こそ郷土地理學習の本據があると思ふのである。又冬の夜火鉢を圍んで語られる父の郷土美談や、母の我家の物語に祖母に抱かれてあやかして戴く昔噺の中に、或は又子供にこつては一番うれしい正月、祭等の行事の中に、色々な體驗が織りなされてゐる。かゝる生活には、伸び行くであらう文化の原始體驗がこもつてゐるのである。我々は此處に國史教育實施の基礎を置くのである。

以上の所説にて明らかなる如く、我が校の綜合科は兒童生活そのもの發展の具體的指導なのである。

第三節 低學年の諸教科に現れたる理科、地理、國史内容

私は第二節に於ては主として兒童の家庭、社會兩生活に於ける三科の相を見たのであるが、第三節に於ては主として學校生活に於ける三科の動きを見たいと思ふ。  
1 諸教科に現れたる理科内容

△小學國語讀本尋常科用 卷一の部

五〇	シシトネズミ	獅子と鼠の形態と習性
五四	モモタラウ	雉、犬、猿の形態と習性

△小學國語讀本尋常科用 卷二の部

課	題 目	内 容
一	山ノ上	郷土の景觀
二	オ月サマ	秋の月の形と公轉
三	アシタハエンソク	雨・空の變化を觀察
四	カマキリヂイサン	かまきりの形・生態
五	サルトカニ	柿の生形態と猿・蟹・蜂・栗の形態
六	カラスヨイソゲ	鳥の習性
七	ケンチャン	馬の習性形態
九	ニンギヤウノビヤウキ	病氣を治す醫者の體驗
一〇	ネズミノヨメイリ	鼠の觀心
一三	カゲエ	影繪の現象(光と影)
一四	ユキ	雪の有様
一五	雪ヨフレン	子供と犬は雪がお好き
一七	ウグヒス	春の三鶯
一八	ツクシ	土筆の生・形態
一九	キシヤ	貨物列車の運行を觀察

△小學國語讀本尋常科用 卷三の部

課	題 目	内 容
一	春が来た	春の野山
三	うさぎ	兎の形態・習性
四	ミビ	ミビの習性

課	題	目	内	容
六	ひよこ		雛の親子の情愛	
八	うけい		時計の見方	
九	うねこ		子猫の習性	
一〇	蛙		蛙の形態・習性	
二	サボ		笹舟の製作とその競争遊び	
四	ねほ		さんほの形態・習性	
七	ねす		鼠の習性	
八	キンギョ		金魚の飼育観察	
九	花火		花火の観察	
二一	自動車		自動車の修繕の観察	
二三	むし		齒の種類とその衛生	

△小學國語讀本尋常科用 卷四の部

課	題	目	内	容
二	早鳥		くすのきの形態	
六	たぬき		狸の習性	
七	月雲		月雲の観察	
八	ラヂ		秋の農家生活の一面描寫(糶・栗・雞)	
九	山がら		山雀の習性	
一〇	山がら		山がらに對する愛情	
一五	すゞめ		雀に對する愛情	
二〇	北風		風を中心とする氣象觀察	

△尋常小學國語讀本 卷五の部

課	題	目	内	容
六	鯉のほり		鯉の形態・習性	

課	題	目	内	容
八	ツバ		燕の形態・習性	
九	私のうち		四季に自然の變化	
一〇	遠足		野外植物の研究	
一三	虹		虹の形態・習性	
一四	雨		降雨現象・水の性質	
一七	用水池		作用・泉井・水蒸氣	
一九	用水池		虹の現象色の分散	
二四	熊のさし		用水池の効用	
二五	熊のさし		葡萄の果實の形態と種類	

△尋常小學國語讀本 卷六の部

課	題	目	内	容
一	日本の高山		秋の農家生活	
二	ヤク		山の壯觀	
三	きのこ		鐵の性質・用途	
四	海		茸の形態・生態・種類	
五	虎		海・波の研究	
八	虎		虎の形態・習性	
一四	冬		鯉の形態・習性	
一六	磁石		吹雪すさぶ農家生活の一日	
一九	氷		磁石の性質	
二〇	氷		糸の種類・製法・利用	
二二	氷		結氷現象・摩擦	
二五	芽		象の形態・習性	

②、新訂尋常小學唱歌(文部省)に現れたる理科内容  
△尋常科第一學年用

課	題	目	内	容
二	鳩		鳩への愛情	
四	おき		おきやがりこほし	
七	ひよこ		ひよこの觀察	
九	かたつむり		かたつむりの觀察	
一〇	朝顔		朝顔の觀察	
一一	夕立		夕立時の様子	
一五	池		池の中に居る鯉の觀察	
二〇	月		月の觀察	
二一	木		木の葉・蜘蛛・鯉の觀察	
二二	兎		兎の形態・習性	
二六	犬		犬への愛情	

△尋常科第二學年用

課	題	目	内	容
四	雲雀		雲雀の習性	
七	竹の子		農村生活の様子	
八	雨		竹の子の成長	
九	金魚		雨の恩恵	
一〇	金魚		金魚の習性の觀察	
一三	こたま		こたまの現象	
一八	雪		がんの習性	
二四	雪		降雪と萬物との關係	

△尋常科第三學年用

課	題	目	内	容
三	摘草		春の植物の採集	
四	木の芽		木の芽の觀察	
七	螢		螢の觀察	
一〇	虹		虹の現象	
一三	噴水		池の中の噴水	
一四	虫		秋なく虫の種類	
一九	取入		秋の農村生活	

②、諸教科に現れたる地理内容  
△小學國語讀本・尋常小學國語讀本に現れたる地理内容  
△小學國語讀本尋常科用 卷一の部

頁	題	目	内	容
五	ハイ		兵隊の行進	
一一	オミ		宮様ご鳩	
一七	ガツ		兒童の通學の様子	
一九	グン		軍艦を思想畫として表現	
一九	フジ		富士山を思想畫として表現	
二一	ヒカ		飛行機の雄姿を機能	
二二	オツ		まささんを叔父さんの家へ行く道(自然地圖)	
二八	ハコ		まさちゃんご兄さんの箱庭の製作	

△小學國語讀本尋常科用 卷二の部

課	題	目	内	容
一	山の上	キシヤ	山の上から見た村の景観	
二	山の上	キシヤ	貨物列車の壯觀と旅行への待望	

△小學國語讀本尋常科用 卷三の部

課	題	目	内	容
一	國	びき	神話・陸・海・島	
二	サ	舟	小川で笹舟の競争	
三	長	い道	長い道への驚嘆	

△小學國語讀本尋常科用 卷四の部

課	題	目	内	容
一	富士の山		富士山の雄姿	
二	早	鳥	くすの大木で船を造り、村の産業を助ける	
三	海軍のにいさん		弟が水兵の兄から海軍日本を教へらる	
四	ラヂサンノウチ		隣村の叔父さんへおはぎをもつて行く	
五	大江の山		頼光等大江山の鬼を征伐す	
六	い	うびん	郵便ごっこ	
七	ニイサンノ入營		兄の入營日に於ける郷土人の祝ふ有様	

△尋常小學國語讀本 卷五の部

課	題	目	内	容
一	大	日本	我が國體の精華	
二	大	賣出し	呉服屋の大賣出しの様	

課	題	目	内	容
八	馬		馬の効用・高さの測り方・馬の比較	
九	大	阪	我國に於ける商業都市の模式的なものとして大阪の繁榮の原因・特に神戸との關係	
一〇	大	連だより	近代都市の形式としての大連市街大連港の壯大及輸出入品・旅順の海軍の船の大いさ・解纜時の男兒の覺悟	
一一	航	海の話	海上の航路・航海中の事柄・海國の發展	
一二	電	海ノ生物	海國日本のほこり——海の動植物	

△尋常小學國語讀本 卷八の部

課	題	目	内	容
五	揚	子江	揚子江の流程・流域・運輸・交通	
六	吳	鳳	漢口・沿岸の都邑としての上海	
七	朝	鮮人參	臺灣人の惡習を改めしめんが爲の吳鳳の苦心とその効果	
八	看	板	藥用植物としての朝鮮人參に關する傳説	
九	ア	メリカ便り	看板の職能・出し方・種類	
一〇	分	古屋市	サンフランシスコ・シカゴ・ニューヨークの三大市を通じての合衆國發達状態・納税の義務・租税の種類	
一一	分	業	城下町及商業都市としての名古屋の意義・利益・注意	

△新訂尋常小學唱歌(文部省)に現れたる地理内容

△尋常科第一學年用

課	題	目	内	容
九	私	のうち	生活場所としての田舎と都會の交通及交通機關・家屋の様	
一〇	遠	足	隣村までの遠足を地圖によつて學習させる	
一一	鷺		鷺・上簇の有様	
一二	日本	三景	日本三景の特色	
一三	峠	から町へ	村と町との生活關係・交通機關・馬車郵便の知識	
一四	東京	停車場	我國鐵道交通の一大中心としての東京停車場	

△尋常小學國語讀本 卷六の部

課	題	目	内	容
一	依	の山	農家生活のよろこび	
二	日本	の高山	我國の高山及名山・外國の高山	
三	ヤクワン	トテツピン	金・銀・銅・鐵を原料とする各種の製品	
四	町	の朝	都會に於ける人間生活の様相	
五	入營	した兄から	兵營生活の内容と我國陸軍の兵種	
六	鮭		鮭の習性とその産地	
七	加	茂川	加茂川の今昔を通じての京都市の模様	
八	モ	スリ	モスリンを中心とする種類及用途	
九	伊	勢	國民信仰の中心たる内容・外宮の有様	

△尋常小學國語讀本 卷七の部

課	題	目	内	容
一	世	界	地球の形状・表面・三大洋・六大洲・我國の位置	
二	横	濱	我國の代表的貿易港としての横濱の位置・設備・輸出入品・東京との關係	
三	兵	隊	兵隊さんへの憧憬	
四	電	車	電車さんの遊戯生活	
五	砂	遊	砂遊びの地理的工作	

△尋常科第二學年用

課	題	目	内	容
一	富	士山	日本一の富士山	

△尋常科第三學年用

課	題	目	内	容
一	汽	車	汽車の旅	
二	日本	の國	自然環境にめぐる日本	

△尋常科第四學年用

課	題	目	内	容
一	近	江	八景の特殊性	

3、諸教科に現れたる國史内容  
△尋常小學修身書に現れたる國史内容  
△卷一の部

課	題	目	内	容
一	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
二	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
三	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
四	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
五	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
六	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
七	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
八	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
九	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
一〇	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
一一	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
一二	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
一三	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
一四	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
一五	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
一六	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
一七	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
一八	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
一九	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
二〇	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
二一	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
二二	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
二三	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
二四	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
二五	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗
二六	天	長	節	天皇陛下宮城御出門・公式儀衛・天皇旗



△卷二の部

課	題	目	内	容
一四	シヤウヂキ		松平信綱の正直	
一五	チノウヘイカ		天皇陛下御即位式 朝見の御儀	
一六	チユウギ		(旅順口閉塞)日露戦争時の廣瀬	
一七	ヤクソクヲマモレ		武夫の忠勇義烈	
一九	ソセンヲタツトベ		廣瀬武夫の知行合一 稻生春女の祖先崇拝	

△卷三の部

課	題	目	内	容
一	皇后陛下		皇后陛下の御日常三御仁慈	
二	ちゆうくんあいこく		明治十年西南役に於ける谷村計介	
三	かうかう		の忠烈	
四	しごこにはけめ		二宮金次郎の克く孝にして、勤勉	
五	がくもん		刻苦したる古事	
六	せいさん		本居宣長の整頓	
八	師をうやまへ		師をうやまつた上杉鷹山	
一〇	きそくにしたがへ		規則に従順であつた春日の局	
一一	ぎようぎ		松平好房の行儀作法正しかつたこと	
一二	ゆき		木村重成の剛毅と眞の勇	
一三	かんじん		毛利吉就の奥方の沈勇	
一四	物ごにあわてるな		皇祖・天照大神を祭る伊勢皇太后	
一五	皇太后宮		宮に敬神崇祖の念	
一六	祝日		四大節(新年・紀元節・天長節・明治節)の由来と祝日の意	
一七	けんやく		徳川光圀女中達に儉約をすむ	
一八	じぜん		鈴木今右衛門夫婦の慈善	

課	題	目	内	容
一九	おんをわすれるな		永田佐吉の報恩	
二〇	くわんだい		貝原益軒の裕恕と健康に苦心した	
二一	けんかう		傳	
二三	共		元利元就が三子隆元・元春、隆景	
二七	よい日本人		に共同の必要を教ふ よき日本人たる爲に國體を重んじ教育勸諭の聖旨にそひ奉るべきこと	

△卷四の部

課	題	目	内	容
一	明治天皇		明治天皇の御盛徳	
二	能久親王		北白川宮故能久親王明治二十八年	
三	靖國神社		臺灣に赴かれ國家の爲に御辛勞あらせらる	
四	志を立てよ		靖國神社の沿革、大祭	
五	皇室を尊べ		豊臣秀吉の立志	
六	孝行		秀吉の尊皇	
七	兄弟		渡邊登の孝養と兄弟の親愛	
八	勉強		登の刻苦勉勵	
九	規		登規則正しく身を持す	
一〇	克己		高崎正風の克己	
一一	自立自營		伴信友健康につこむ	
一二	自立自營		高田善右衛門の自立自營	
一三	自立自營		圓山應舉の勉勵	
一四	自立自營		瀧鶴台の妻善行の習慣をつくる	
一五	自立自營		國旗の意義 國旗に對する心掛け	
一六	自立自營		祝日、大祭日の由来と心掛け	
一七	自立自營		栗田定之丞の公益	
一八	自立自營			
一九	自立自營			
二〇	自立自營			
二一	自立自營			
二二	自立自營			
二三	自立自營			
二四	自立自營			
二五	自立自營			

△卷五の部

課	題	目	内	容
一	大日本		我國體	
二	大蛇		神代に於ける草薙劍の古事	
三	大蛇		神武天皇の御東征と金鷄の古事	
四	大蛇		日本武尊熊襲を隨がへられた古事	
五	大蛇		養老酒の傳説	
六	大蛇		八幡太郎義家の慈悲と度量	
七	大蛇			
八	大蛇			
九	大蛇			
一〇	大蛇			
一一	大蛇			
一二	大蛇			
一三	大蛇			
一四	大蛇			
一五	大蛇			
一六	大蛇			
一七	大蛇			
一八	大蛇			
一九	大蛇			
二〇	大蛇			

△卷六の部

課	題	目	内	容
一	くりにから谷		木曾義仲平家をくりにから谷に攻む	
二	くりにから谷		屋島の合戦に於ける義経弓流しの	
三	くりにから谷		古事	
四	くりにから谷		木曾義仲の家來、手塚の太郎光盛	
五	くりにから谷		の女唐糸が頼朝の爲に獄に入り	
六	くりにから谷		女萬じゆの舞を神かけての祈願に	
七	くりにから谷		より許された	
八	くりにから谷		賀茂川のしる京都の歴史	
九	くりにから谷		神國日本に於ける元寇の際の神古	
一〇	くりにから谷		風	
一一	くりにから谷		千早城に於ける正成の忠勇	
一二	くりにから谷		お節句さしやうぶ	
一三	くりにから谷		伊勢參宮の父からの手紙伊勢神宮	
一四	くりにから谷		のお社及神苑の有様等	
一五	くりにから谷			
一六	くりにから谷			
一七	くりにから谷			
一八	くりにから谷			
一九	くりにから谷			
二〇	くりにから谷			
二一	くりにから谷			
二二	くりにから谷			
二三	くりにから谷			
二四	くりにから谷			
二五	くりにから谷			
二六	くりにから谷			

△卷七の部

課	題	目	内	容
一	長き行列		現代日本小學生の数をよみ、國	
二	長き行列		にさいける覺悟の自覺	

二六 人の名譽を重んぜよ  
伊藤東涯他人の名譽を重んずよき日本人たらんが爲に國體を重んじ教育勸諭の聖旨にそひ奉るべきこと

二七 よい日本人

△卷一の部

朝日に懐れる。  
日の丸の旗の長久を壽ぐ。

頁	題	目	内	容
六	オヒサマアカイ			
七	ヒノマルノハタ			

課	題	目	内	容
一	オ正月		お正月への憧憬、待望、希求。	

課	題	目	内	容
一三	牛若丸		五條の橋で辨慶が牛若丸の家來になる。	
一一	國比		神代の神話	
一二	浦島太郎		日本傳説としての浦島太郎。	

課	題	目	内	容
一六	白兔		大國主命の白兔をたすけられたお話	
一七	豆まき		節分の話	
一九	ひなまつり		ひなまつりの話	

六	鎌倉攻	新田義貞鎌倉の北條氏を攻む。
一四	川中島の戦	上杉謙信、武田信玄の川中島に於ける戦。
一八	木下藤吉郎	豊臣秀吉の立身出世の事。
二三	加藤清正	加藤清正の武勇。

△巻八の部

課	題	目	内	容
三	競馬	馬	或村の氏神に於ける競馬の話。	
四	武將の幼時	時	1、頼山陽の幼時の武勇物語。 2、頼山陽の幼時の武勇物語。 3、松平信綱のお祭りの人殺しが呉鳳によつてやめられた。	
六	吳鳳	鳳	1、一人の子に親二人の裁判をさばいた大岡越前守。 2、白木綿盗人を探した越前の守。お正月に對してのもちつき。	
一四	餅つき	き	盲目にして大學者となつた塙保己一。	
一七	塙保己一	一	名古屋市史。	
二三	名古屋	市	日露戦争に於ける廣瀬中佐の忠烈。	
二四	廣瀬中佐	佐	乃木大将の幼時傳。	
二八	乃木大将の幼年時代	代		

△新訂尋常小學唱歌(文部省)に現れたる國史内容  
△尋常科第一學年用

課	題	目	内	容
一〇	日の丸の旗	旗	國旗の讚美	
牛若丸			牛若丸の辨慶の古事。	

△尋常科第二學年用

課	題	目	内	容
三	二宮金次郎	郎	二宮金次郎の刻苦勉勵。	
一四	浦島太郎	郎	日本傳説としての浦島太郎。	
二七	那須與市	市	屋島の戦に於ける扇の的。	

四四

課	題	目	内	容
二	かがやく光	光	神武天皇の御東征と金鷄。	
一五	村祭	祭	村祭の有様。	
一六	鶴越	越	一ノ谷の戦況。	
二二	豊臣秀吉	吉	豊臣秀吉の天下平定。	
二五	川中島	島	川中島の古戰場。	

△尋常科第三學年用

課	題	目	内	容
四	靖國神社	社	日本精神の高調。	
一〇	曾我兄弟	弟	曾我兄弟工藤祐経をつつ。	
一七	廣瀬中佐	佐	旅順口閉塞と中佐の忠勇義烈。	
二一	八幡義家	家	八幡太郎義家の人情。	
二七	橋中佐	佐	中佐の忠勇美談。	

4、文部省の意圖

低學年の修身・國語讀本・唱歌の國定教科書を理科・地理・國史の立場に於て眺めて來たのである。此處に於て文部省は、低學年には三科を獨立の教科として課して課しないが國語讀本を中心にこれ等の生活指導をなすべき意味を與へてゐるのである。この文部省の意圖を汲

んで只國語としてではなく、先程來の意味に於て指導して行くならば必ずやよき成果を挙げ得るものと信ずるものである。尙文部省は各教科書に於ける内容を盛るばかりでなく、各教科各個の連絡統一に苦心してゐる事がわかるのである。施行規則第一條の「各教科ノ教授ハ其ノ目的及方法ヲ誤ルコトナク、互ニ相連絡シテ補益センコトヲ要ス。」の意味が充分理解し得るのである。百科大辭典の教育ではなく、生命擴充發展のための多方陶冶でなくてはならない。

第二章 自然科、郷土地理、國史教育の目標

第一節 自然科教育の目標

兒童は自然物や自然現象について豊富な經驗を有し、しかも興味が強いため、これを基礎にして有意的に自然を直観させ、自然の中に入りて自然を理解させ、科學的趣味を養ふのが自然科教育の目標である。自然科は強制的な自然物・自然現象の押賣に墮してはならない。どこまでも兒童の生活に立脚し生命の培養と伸張をはからねばならない。

第二節 郷土地理教育の目標

我々は一定の時と場所に於て人々と共に日本國民として生活をしてゐるのである。この生活こそ生を起點として、日々生々發展する生活相である。

學齡期前の兒童は家庭生活を中心に、學齡期の兒童は寺田校生活を中心に自然と交渉し、又そこに營まれる村民の生活と深い交渉を持つ

ものである。かかる生活に郷土地理學習の基礎を置き、實地の觀察によつて郷土寺田村及其の附近の自然地理及び人文地理に關する基礎的要素を、自覺的に生活せしむる事が郷土地理學習の目的である。換言すれば郷土の表面と郷土人の生活状態に關する知識を學習せしめ、村勢の大要及びその附近の重要な町村の情勢を理會せしめ、以て愛郷心の涵養につとめるのが目的である。

第三節 低學年國史教育の目標

小學校に於ける國史教育の使命は、日本國家の尊嚴性、個性的な日本文化を理解せしむると共に創造せしめる日本國民の養成にあると云ひ得る。

我が國に於て實施してゐる低學年國史教育の精神はこれと一致してはならない。低學年の國史教育の目的は、郷土に育つ兒童の歴史心を基礎にし、郷土史・郷土行事・諸教科に現れたる國史教材を綜合的に統一して教育し、生活内容を豊潤にして、我が日本國家の尊嚴人物、事蹟等を知らせ、歴史を喜ぶ心を啓発するにありと云ひ得るのである。

要するに兒童に多様な經驗をさせ、歴史を愛する心を養ふといふのである。かかる教育は、必ずや高學年の國史學習に際し、益々深化擴充されて、日本人たるの自覺を強めることであらうと思ふ。

かかる三科の教育は、郷土に於ける一元的兒童生活の多方陶冶であり、兒童自らの生命を培養する教育であり、高學年へも發展する基礎

教育であると言ひ得る。

第三章 自然科、郷土地理、國史教育の材料  
第一節 自然科の新系統とその選擇・排列の精神

1、自然科の新系統

項	學年	尋一	尋二	尋三
生物		メダカ、ソラマメ (園藝) イナゴトバツタ オチバヒロヒ ツクシツミ アサガホ(園藝) 二十日大根(園藝) カブラ(園藝) チユウリツツ(園藝)	わらびごり、松虫 草(園藝) 玉池のまんほ みのむし なんきん豆(園藝) 百日草(園藝) ななば(園藝) 菊(園藝) えんごう(園藝)	ぶどう畑 きのこごり コスモス(園藝) ねぎ(園藝) かほちや(園藝) 柳(園藝) あぶらな(園藝) 百合(園藝)
物鏡		スナアソビ イシヒロヒ		
學化		あぶり出し		みようばんの 水あそび
物理		水でつぼう		虹 やしろべい(工作)
天文 象氣		かんだんけい		
地理				

備考 夏季休暇の自然科生活指導として尋一に「コノハアツメ」尋二に「おしほ」尋三に「昆虫採集」を課す。  
2、教材の選擇・排列の標準  
① 國語教材にありて、科學的基礎概念の取得によき教材

② 兒童の郷土生活の即したる教材  
③ 尋四以上の理科教育との連絡に都合よき教材  
④ 生理衛生教育は雨天時に於ける體操の衛生講話による。  
⑤ 教材排列の標準  
⑥ 國語教材の進度に合はせて、  
⑦ 教材相互の連絡を吟味すること  
⑧ 兒童の心理的狀態に従ふこと  
⑨ 季節に適應すべきこと  
1、郷土地理の新系統  
第二節 郷土地理の新系統とその選擇・排列の標準

項	學年	の基觀念的養成に資するもの					
		自然體氣象	地理地象	人文地理	交通	産業	政治
	尋一		ハコニハ コウノス山				
	尋二			村の道	郵便局	私さものの着物	
	尋三			私の學校	寺田村		
	尋四					寺田市場	交通しらべ 村の看板廣告 寺田村とその 附近

備考、各學年共夏季休暇の郷土學習として「我が家」の研究をなさしめてみる。

2、教材の選擇・排列の標準

- 1 教材選擇の標準
- ① 郷土の人文地理に重點を置く。
  - ② 自然地理は自然科に重點を置く。
  - ③ 兒童心意の發達程度に應ずる。
- 2 教材排列の標準
- ① 國語教材の進度に合はせて、
  - ② 兒童の心意の發達に應じて、
  - ③ 他教材との連絡を考へて、

第三節 低學年國史教育の新系統とその選擇・排列の標準

1、尋四までの國史教育の新系統  
A表 國史教材による系統

時代	學年	新系統	統
神代	尋一	ヒノマルノハタ(劇)	
大和時代	尋二	大蛇たいぢ(劇)	
和代	尋三	白蛇(劇)	
奈良	尋四	熊襲征伐(劇)	
良	1370-76餘		

代	現	正大治明	代時戸江	山桃士安	町空野吉	倉鎌	安平
2586-	2527-60	2263-260	2233-30	2052-180	1993-60	1852-140	1454-400
尋四	尋四	尋四	尋四	尋四	尋四	尋四	尋四
	安田小三郎氏の出征(劇)	忠魂碑(人文)	島利兵衛(人文)	木下藤吉郎(劇)	鎌倉攻(劇)	萬壽姫(劇)	

備考、附録郷土史一覽表参照ありたし。





2、郷土地理指導要目

(1) 第一郷土地理指導要目

Table with 4 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Summary), 指導場所 (Instruction Location). Topics include 山ノ上, ハコニハ, ハノイヘ, コウラスノ.

(2) 第二郷土地理指導要目

Table with 4 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Summary), 指導場所 (Instruction Location). Topics include 八私の家, 五村の道, 四私の學校, 三私の家.

(3) 第三郷土地理指導要目

Table with 4 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Summary), 指導場所 (Instruction Location). Topics include 寺田村, 私の家, 郵便局, 寺田市場.

(4) 第四郷土地理指導要目

Table with 4 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Summary), 指導場所 (Instruction Location). Topics include 寺田市場, 寺田村, 寺田村, 寺田村.

五〇

3、低学年国史指導要目

(1) 第一国史指導要目

Table with 4 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Summary), 指導場所 (Instruction Location). Topics include 村の看板, 寺田村, 寺田村.

(2) 第二国史指導要目

Table with 4 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Summary), 指導場所 (Instruction Location). Topics include ひな祭, 寺田村, 寺田村.

(3) 第三国史指導要目

Table with 4 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Summary), 指導場所 (Instruction Location). Topics include 四國之光, 寺田村, 寺田村.

五一

Table with 4 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Summary), 指導場所 (Instruction Location). Topics include 八私の家, 十一寺田村, 十二交通.



本學年の寺田村の學習に於ては、村の現状、概況を認識させるのが主眼である。随つて地理的な取扱、地圖を中心として學習させることが最も適當であるを考へて、略地圖を用意しておいた。

十二月十三日 第二時

教室には寺田村の地圖がかゝけてあり、各分團の研究は小塗板に書かれてある。家庭作業であつた村の繪、主として宮さん、寺、役場電車の停留所等が後の掲示板にはられてある。前時の各分團の研究問題について發表。

- 一分團「地圖によつて北東北西……」
  - 二分團「人数と家数グラフによつて」
  - 三分團「お宮さんの所在、祭神」
  - 四分團「お寺の名前と所在御先祖について」
  - 五分團「役場の人の名前、仕事」
  - 六分團「郵便局、駐在所、組合各所在と仕事について」
  - 八分團「山川、田畑、道、電車地圖によつて」
- それら各分團の代表者が説明をなす。皆緊張した態度でよく。可成よく調べて来た様だが六分團の仕事の説明がはつきりせず、みなに徹底せなかつた様である。次に略地圖に各所在を記入させ、寺田村についての感想文を作ることを家庭作業としておいた。

十二月十九日 第三時

本時は子供の感想文を發表させて、將來如何なる寺田村へ、子供ながらも研究を進めたいと思つてゐるが、感想文がこちらの期待してゐる様には書いてないのは、がっかりしてしまつた。

しかしつくづく考へてみるに、成程三年生の子供としては、稍重荷であつたと思つて、あきらめることにした。研究問題もなるべく子供の自發活動にまかせ様としたために、稍材

料が多くなつて却つて子供の頭を繁雜にさせた様にも思ふ。しかし兒童の研究よりは、子供ながらに眞剣であつた。私はほんまに有難く思つた。郷土に對する認識を幾分なりとも深め、將來よき寺田人へ祈るのである。

(2) 尋問 交通しらべ

(指導者 石橋 訓導)

日時 昭和九年十二月十一日

教材 交しらべ

目的 低學年の地理學習として村の交通しらべを行ひ、交通機關の利用に就いて調べさせて、村民の受ける恩惠の大なることを知らせる。

指導過程

第一時

一、交通はどんなことか。

教師 皆さんは交通と言ふ言葉を知つてゐますか。

兒童 知つてゐます。

教師 さんなこゝで聞きましたか。

兒童 交通安全週間の話を聞いて知つてゐるのです。

教師 よく覚えてゐました。それでは交通安全週間といふことは、どんなことなのですか。

兒童 道の左側を歩くことです。

乙 汽車や電車の踏切を通る時に氣を付けるのです。

丙 道は左側を歩き、自轉車や自動車によく注意することです。

交通安全週間には皆が今言つたことをよく守るのです。交通安全週間といふのは、人が道を通る時には必ず左側を歩き、道一

ぱいになつて他の人に迷惑をかけぬやうにし、又自轉車や自動車等を動かす人は、人に怪我をさせぬやうに注意をするし、通

る人も之等の車にはよく注意して、怪我をせぬやう、常よりは特別に、此の定められた一週間はお互に氣を付け合ひませう。

と言ふことでした。

それでは交通と言ふのはどんなことですか。

兒童 道を通ることです。

乙 道を通つて、行つたり來たりすることです。

何が道を通つて、行つたり來たりするのか分りますね。

兒童 人がです。

教師 その外には。

兒童 自轉車や自動車等に人が乗つたり、又荷物を積んだりして、道を通つて行きます。その外にもいろいろあります。

それによく分りました。交通といふ言葉のわけは「ゆきかよひ」

又は「ゆきき」すると言ふことで「人や物が或る場所から他の場所へ行くこと」が交通です。

二 交通機關はどんな物であるか。

教師 人や物が或る場所から他の場所へ行くことが交通でしたね。今

或る場所と言ふのを寺田とし、他の場所を京都と考へて見ませう。

さうすると、寺田から人や寺田で取れた桃や西瓜のやうな物が京都へ行くにはさうして行きますか。はじめに人から言つてごらん。

兒童 甲 奈良電に乗つて行きます。

乙 新田から汽車に乗つても行きます。

丙 自動車か自轉車で行きます。

丁 歩いて行きます。

教師 いろいろの方法で行けますね。乗物が無ければ歩いて行きますね。所が近頃は歩いて行く人が無く乗物で行きますが、何故歩かないのか、そのわけはいろいろあります。考へて置きなさい

三 寺田村の交通

教師 さう分れますね。陸上交通機關と海上交通機關と空中交通機關との三つですが、近頃又この外に地下鐵道と言つて土地の下にトンネルを掘つてその中を汽車や電車が通つてゐます。



教師 寺田村の交通をしらべませう。交通機関にはみんなものがありますか。

児童 奈良電車・汽車・乗合自動車・自轉車・リヤカー・トラック・舟。

教師 その他にもう一つ、ここにもあるもので一番大切な道路があります。寺田村にはこれだけの交通機関があつて、皆さんも村の人々も皆がこれらの交通機関に乗つて、遠くへ行つたり、荷物を積んで運んだりしてゐます。

(以上の過程で第一時は終り、次週の第二時までに次の課題を提供して置いたが、児童達は、この種の調査には非常に興味を感じらしく大層熱心に調査を行つた。)

1、汽車・奈良電車・乗合自動車の行先方面。

2、各町別で、自轉車リヤカーの所有数と戸数を調べてくること。

第二時

教師 前の時間には「交通」に「交通機関」に「寺田村の交通機関」に就いて調べました。此の時間は何を調べるのでしたか。

児童 先生自轉車リヤカーの数を調べてきました。

教師 皆調べましたか。

児童 はい調べてあります。教師よく調べてきましたね。それは後から発表してもらひませう。

児童 先生一學期に町々の家数と人口を調べてきた時のやうに、グラフにしたらどうです。

教師 よい所へ気が付いてゐますね。後でやつてもらひませう。

児童 奈良電車や汽車等の研究をするのです。

教師 さうです。それを先に研究しませう。皆に此の地圖を渡しますから、机の上に擴張して置いて研究したことを書き入れるのですよ。

(寺田村の交通略圖を配布した。)

一 道路

教師 寺田村を通る一番大きな道路は？

児童 學校の前の道です。

教師 石段の下を南北に通つてゐる道ですね。何と言ふ道ですか。

児童 奈良街道

教師 奈良街道です。北はここへ、南はここへ行くか知つてゐますか。

児童 北の方へ行くよ、巨椋池の堤を通つて京都へ行きます。

教師 途中はみんな村や町を通るか順番に考へてごらん。

児童 久津川村・大久保村・小倉村・伏見・京都。

教師 この道は伏見から東北の方へ行つて醍醐・山科と言ふ方面へ行きます。この方面も京都市です。伏見から京都の方へつゞいてゐる道は、奈良街道とは言ひません。その中久世郡はここへか分りますか。

児童 久津川村・大久保村。小倉村。

教師 さうです。それから北は京都市ですね。それでは南の方は？

児童 奈良へ行きます。

教師 南は富野莊村を通つて、綴喜郡・相樂郡の町村を通り、木津の町を過ぎて奈良へ行きます。

児童 久世郡は富野莊村だけです。

教師 これで奈良街道は終つたが、此の街道は大層大事な道路であることが分ります。久世郡のこの町村へ行くにも皆この道路を通つて行けばよろしいね。もつと近道もありませうが、道が悪くて自動車等は通りませぬ。次は村の中の道ですが、澤山ありますね。中心はきれいですか。

児童 觀音から停留場へ行く道です。

教師 それでせうね。水度神社から寺田の真中を通つて停留場まで行く

きます。そこから二つに分れませう。左手の方へ行くのが水主へ行く道で、右手は乾城・塚本を通つて上津屋・佐山・御牧・淀へ行きますね。

二、奈良電車

教師 奈良電車は寺田の一番西を通つてゐますね。北はここまで行くのです。

児童 伏見・京都驛まで行きます。

教師 途中停留場が澤山あるが、久世郡には幾つありますか。

児童 久津川・大久保・伊勢田・小倉の四つです。

教師 村に大體一つづゝあるから便利ですね。それから向ふは皆京都市です。南の方はここへ行きますか。

児童 甲 西大寺へ行きます。

乙 奈良へ行きます。

丙 大阪へ行きます。

丁 伊勢へも行きます。

教師 随分あちらこちらへ行つてませう。その他に神武天皇の橿原神宮前を通つて吉野へも行けるのです。黒板へ寺田を中心として北と南は、こんなにあちらこちらの方面へ行けます。

二、汽車

教師 學校の東側を通る鐵道は何線ですか。

児童 奈良線です。

教師 さう奈良線と言つてますね。くわしく言へば、名古屋から大阪の湊町までの線から分れたもので、關西支線奈良線と言ひますが、ここからここまでか。

児童 京都から奈良。

教師 京都から奈良の間の線です。その間に三つの川を渡つてゐますか。

児童 京都から奈良。

教師 京都から奈良の間の線です。その間に三つの川を渡つてゐますか。

児童 宇治川と木津川。

教師 もう一つあります。京都へ行く途中宇治驛を出てすぐに宇治川を渡り、京都驛へ着く時に賀茂川を渡りませう。奈良へ行く途中トネルを二つ三つ越えて、木津川を渡るのを知つてゐませう。停留場は寺田にありませんか。

児童 新田が長池かで乗ります。

教師 随分遠いね。今まで奈良電の通つてゐない時には、寺田の人は皆新田が長池まで行つて汽車に乗らねばならなかつたのですから、今思へば大層不便でしたが近頃は電車があるので、しあはせでせう。學校から旅行するにも樂ですね。

四、乗合自動車

教師 奈良街道を毎日走つてゐる乗合自動車を知つてゐますか。

児童 學校の前の煙草屋さんで止ります。

教師 あの自動車はここまで行つてますか。

児童 宇治へ行くのです。

教師 北の方へ行つて新田から東の街道を通つて宇治橋まで行きますね。南は富野を通り綴喜郡の宇治田原まで行くのです。このやうに電車や乗合自動車がありますから、遠くへ行くにも長い時間がかからないから、大へん便利です。

(以上で主な交通機関の研究を終つて、一時間過ぎたが、豫定の児童の調査発表は約二十分間の時間を取つて行つた。各町毎に児童が戸数と自轉車及リヤカーの數量を調査したのを、發表させて板書し、全村所有數を求めさせてから、一戸平均幾臺所有又一臺を幾戸に所有するかを算術應用問題として計算させた。次に自轉車及リヤカーを別々に、各町別の數量を一纏十臺として棒グラフに表はした。参考の爲に児童の調査を示す次の通りである。これで大體、私の取扱つた「交通しらべ」は貧弱ながら終つたのである。)

兒童の調査表

町名	リヤカー	自轉車	自轉車
北東	四二	四五	一戸平均〇・六三臺
北西	一七	四一	一臺平均一・六戸リヤカー
中東	三〇	四〇	一戸平均〇・五三臺
中西	四一	五六	一臺平均一・八八戸
小南	五六	五四	寺田村戸數六三〇戸
大南	二九	三七	
乾城	二六	四二	
水度坂	一九	一七	
觀音	七六	六二	
水主	三三六	三九四	

3 低學年國史の體驗記録

△尋一 白 兎

(指導者、森 協 訓 導)

「先生、僕大國主命にしてや」「先生、僕々」

「僕、白兎に」「いや、僕や」。配役選定の時間である。大國主命の候補者の何れも優勢である事よ。そして八十神達のそれが何れも淋しい事よ。仁俠精神の讚美正義への憧憬皇國日本の輝かしい將來が豫想されて頼もしい。

「白兎はみんな心でせう」

「ハイ、少しは悪いです」

「それがですか」

「わにざめをだました所です」  
 「先生、白兎は大變正直です」私は嬉しかった。  
 「さうですね。さうでそんなに思ひましたか」  
 「悪い大勢の神様にも、自分がわにざめをだました悪い行をかくさずに言つた所」さうだ、所に眼を着けて呉れた。さうせ神様の寄り集りでない以上、善い所もあれば又悪い所もたくさんあるのだ。人の缺點はさかく眼に着き易い。人の短所ばかりが眼に入るのは自分に未だ悪の分子が宿つてゐるからなのだ。いゝ所を見よう。みんな悪の世界にだつて必ず人に知られない美點がある筈だ。

以下は私が大國主命の後日譚として兒童に語つた神話の大要である八十神達は何かにつけて、大國主命が癪に障つてたまらない。そこで一計を案じて、大國主命を伯耆國手間山へ伴れて行き、「此の山には赤い猪がゐるさうだ。今私達が追ひ下して来るから、下に待ち受けてゐて、生捕りにするのだぞ。若し取逃がす様な事があつたら、唯では置かないから」命は欺される事は知らないから今や遅しと待つてゐる。果して物凄く地毒に共に眞赤な塊がころけて来た。「さうならね」さばかり命はむづこ組附いたが、可愛想に到頭大火傷をして死んでおしまひになつた。それは猪ではなくて眞赤に焼けた大石だつたのだ。之を御覽になつた母君は大變泣き悲しんで、天に上つて神産巢日神にお願ひされる。神産巢日神も氣の毒に思はれて、きき貝姫と蛤貝姫をお遣はしになつて、大國主命を蘇生せしめ給ふた。折角の計略が見事に失敗したのを見る。八十神達は今度こそは、命を山へ連れて行き、一本の大木を打割つて、其の裂目に楔をはめ、其所へ命を入れて又も拷殺してしまつた。しかし今度も母君の手厚い看護によつて、命は運よくも生きかへられた。さあかうなる。母君は心配でたまらないさうしたものか。色々思案されたが「根の堅洲國においてなる素戔

鳴尊をお訪ねして御相談申したらさつきいゝ智慧をかして下さるに違ひない。さお考へになつて、一先づ命をお父様の素戔鳴尊の所へ行かせる事になつた。そこで大國主命は母君の言はれる通りに根の堅洲國へ行かれる。其女須勢理姫がお出でになつて、「お父上大層美しい神様がお越しになりました」と言はれる。父神が出て見る。命が立つてゐるので早速呼び入れて蛇のる部屋に寝かせられた。する。蛇はこつそりこ「蛇のひれ」を命に授け「若し蛇があなたを食はうとしたら、このひれを三度お振りなさい」と教へられた。其の翌晩はむかでや蜂の一杯るる部屋に入れられたが、今度も姫から授かつた、「むかではちのひれ」によつて助かる事が出来た。次には鎧矢を廣い野原へ射込んで、その矢を捜して来い。命は早速その野原へ入られる。直ぐに四方から火をつけて、命を焼かうとされる。命はびつくりして逃げようとするがさうする事も出来ない。する。其所へ一匹の鼠が現れて「内はほら」。外はすぶ。云ふ。不思議に思つて大地をさく。踏んでみる。大きな穴があいて、命はその洞穴に入られた。その中に火は洞穴の上を過ぎてしまつた。命が穴を出て其のあたりを眺めてみる。さつききの鼠が鎧矢をくはへて持つて来てくれた。素戔鳴尊。須勢理姫は命がきつと焼けて死んでしまはれたに違ひないと思つてお出でになる。大國主命はピン／＼してゐられるので大變驚かれた。かうして素戔鳴尊のあらゆる試練に打勝たれた大國主命は愈々最後の難題にぶつかる。それは素戔鳴尊の風取りであつた。しかもその頭には恐ろしいむかでがウヨ／＼とひ廻つてゐる。此の有様を御覽になつた須勢理姫は、掠の實。埴土。命を命に與へて、其實をかみ、埴土を含んで唾を吐き出す様に命を教へられた。命がその通りにされる。父尊はさてはむかでも恐れずかみころしてゐるんだなと思はれて、氣持ちになつて眠つておしまひになつた。今の中に思つた命は父尊の髪を部屋たるきに結びつけ重い石をその部屋の戸

口に横たへ須勢理姫を脊負つて父尊の大刀や弓矢それから天ノ沼琴を持つて逃げて出ようと思はれたが其の琴が樹の枝にひつかつて大變な音を立てた。そのために今まで眠つておいでになつた父尊はびつくりして眼を覺まされ、其部屋を引き倒してしまはれた。しかし父尊が髪を解いてゐる。しやるひまに命は遠くへ逃げのびられた。父尊は、黄泉比良坂まで追つて行き逃げて行く大國主命に「おーい。お前はその大刀、弓矢でお前を苦しめる者を攻め従へるがよい。そして須勢理姫をお妃として宇迦能山の麓に御殿を作つて國を治めよ」と仰せられた。かうして大國主命は元の國へお歸りになつて、八十神達を降参させ出雲の國を立派にお治めになつたのである。大體こんな風にして國譲りを話し天孫降臨にまで及んだ。子供は本當に神話が好きである。そんな超現實的な事件でも子供の世界ではそれが不思議でなくなる。大人の小さな俗知を笑ひながら燦然と輝く日本神話、私達はあの根を堀り葉を掘る様な考證學的なかしこぶつた態度を捨てよう。唯大空に輝くあの月の光、慈愛に輝く白光にぬれて、しばらくなつかしい夢の世界に遊ばうではないか。

第三節 學習指導案

△尋一 自然科指導案 落葉 (指導者 橋本秀一)

日時 昭和七年十一月廿六日(上) 第一時限

場所 理科教室北側空地

教材 落葉

教材観

子供は落葉がすきだ。いや拾ひ集めるこゝが好きかも知れない。がさく／＼音を立てながら美しい木の葉を拾ひ集める姿は繪だ。そこへ風でも吹いて木の葉が散らうものなら、ギヤ／＼と音を立てる。この詩の世界に遊ばせながら、落葉の持つつゝ微妙な神の啓示の世界

郷土植物教材目録

No. 1	適用教材	適用学年
	ダンボキ	尋四理・尋四綜
	キノク	尋四理・尋四綜
	リュウノウギク	高一綜
	ヒヤクニチサウ	高二綜
	コスモス	高三綜
	ダリヤ	尋五綜
	タマザシヤ	高一綜

参考教材

アキノキノリサウ、アキノノゲシ、カウゾリナ、カハラヨモギ、ガンクビサウ、カウヤボウキ、キツコウハダマ、サハヒヨドリ、サソギク、タカサプロウ、ヂシバリ、チチコギク、ヤマダイコン、ニガナ、ハルノノゲシ、ノボロギク、ハハコアサ、ヒヨドリバナ、ヒメジョオン、フヂバカマ、ノアザミヤクシサウ、ヤブタバコ、オトコヨモギ、オホササギク、カシハバハダマ、カハラハハコ、コメナミ、スギラン、センダングサ、タカサゴサウ、ノアキ、ホソバノアキノノゲシ、モミザハダマ、ツバキ、ヤブレガサ、ヤマノコギリサウ、リュウノウギク、

No. 2	適用教材	適用学年
	キウリ	尋四理・尋四綜
	カボチャ	尋三綜
	マツタケ	尋五綜
	ヘチマ	高一綜

参考教材  
スズメウリ

No. 3	適用教材	適用学年
	キノ	尋四理

参考教材

アゼナ、カマヂシヤ、ササゴケ、クガイサウ、シホガマギク、ヒナノサスツボ、ママコナ、ミズホホツギ

No. 4	適用教材	適用学年
	ナス	尋四理・尋四綜
	シヤガイモ	尋四理・尋四綜
	トマト	高一綜

参考教材

クゴ

へ導いてやる。その鍵は子供がもつてゐる直観力を活動させることだ  
考へる力を直進させる事だ。かうして目覚めさせられた直観力は子供  
の生活を豊かに深くする事であらう。私はかうした兒童の生活そのも  
のに即して、彼等の科學的な芽生を伸ばしてやりたい。  
目的は、さくら等の形態、生態等を直観させ、蒐集、會話、作  
業の中にそれを導き、見こらして行く。  
準備 畫紙、ハサミ(雨天の節は落葉三種二枚宛)  
区分 一時間  
指導過程  
1、目的指示(雨天の節は③のリズムの表現から)  
2、名前の検討、既有觀念と植物名札と比較して  
3、材料の蒐集、敷へつゝ三種で十五枚  
4、事實の直観、色、形、硬さ、芽の状態。  
5、事實の意味づけ——勞作  
① 言語的表現——①なぜ葉が落ちるのでせう。  
② 葉の落ちない木と落ちる木。  
③ 色がついてゐますね、なぜでせう。  
④ 色がついてゐる。色を塗らせる。切らせる。  
⑤ リズムの表現——國語讀本「キノハ」の唱歌と自然な表情遊戯

附 録

一、郷土博物館の經營とその標本目録  
(一) 郷土博物館經營の根本精神  
郷土の自然物による教育を實施せんがためそれ等の標本を一定の場  
所に集めて教育的に利用せんとするものである。  
(二) 郷土博物館經營の方法  
△今理科準備室の一部で理科主任及び同好の齋藤、島中、石橋三訓導  
と共に之が經營に當つてゐる。將來は一堂を興へてほしいものだ話  
してゐる。  
△採集せられたものが標本になるまでには相當な日時と苦心が拂はれ  
てゐるし、相當經費もかかるものである。然し冗費を節してなるべく  
多く作成したいと思ふ。  
△標本の持つ教育的價値はその運用になつて定まるものである。だか  
ら標本の活用法を考へ、各標本にレッテルをはり、その標本の活用さ  
れる學年及び教材を明らかにしてゐるのである。  
△植物の腊葉標本は科別毎に一括し尙それを活用學年毎に一纏にして  
箱に入れてゐるのである。動物標本は大體液浸であるが、之も活用教  
材及び参考教材を一つの箱に入れて運用に便してゐる。動物も又同じ  
である。  
△標本目録作成について前京都市向島校長竹内敬先生京都二中丹信實  
先生の御指導をうけた。兩先生に深謝いたします。  
(三) 郷土博物館標本目録——昭和九年十一月三日現在。

参考教材  
シヤマカタバミ、ムラサキカタバミ、

No. 12

ま め 科

適用教材	適用学年
スイトピー	尋五綜
グイヅ	尋六綜
ソラマメ	尋五理・尋一綜・尋四綜
ナンキンマメ(エンドウ)	尋二綜

参考教材  
カラスノエンドウ、カハラケツメイ、カズ、クララ、コマツナギ、シロツメグサ、ナンキンマメ、ネコハギ、ノササゲ、ミヤコグサ、イヌハギ、ヤハズサウ、

No. 13

い ば ら 科

適用教材	適用学年
サクラ	尋四理

参考教材  
ウシコロシ、チハビイチゴ、クサイイチゴ、フユイチゴ、ヘビイチゴ、ワレモカウ、カハラサイコ、キヤウガツコ、シモツケ、ヤマアキシヨウマ、

No. 14

十 字 花 科

適用教材	適用学年
アアラナ	尋四理・尋三綜
ハツカダイコン(カア)	尋一綜
ダイコン	尋四綜・高一綜
スイサイ	尋五綜
キョウナ	尋六綜

参考教材  
イヌナヅナ、イヌガラシ、タネツクバナ、ワサビ、

No. 15

ひ つ じ ぐ さ 科

適用教材	適用学年
ハス	尋四理

参考教材  
オニバス、ヒツジグサ、

No. 16

ひ ゃ 科

適用教材	適用学年
キノコヅチ	尋四理
ケイトウ	尋四綜

参考教材  
アサビユ

No. 5

ひ る が ほ 科

適用教材	適用学年
アサガホ	尋四理・尋一綜
サツマイモ	尋四理・高二綜

参考教材  
ヒルガホ

No. 6

か き 科

適用教材	適用学年
カキ	尋五理
カキノ澁抜	尋五綜

参考教材  
クボガキ、フユウガキ、ゴシヨガキ、シラウガキ、ツルノコ、シノガキ、デンシラウ、

No. 7

し や く な げ 科

適用教材	適用学年
ツツジ	尋四理
ツツジノ挿木	尋四綜

参考教材  
イハナシ、クランサイミツバツツジ、ナツハア、ホツツジ、モチツツジ、ヤマツツジ、ソルコケモモ

No. 8

あ り の た ふ 科

適用教材	適用学年
フサモ	尋五理

参考教材  
キンギヨモ、ホザキノフサモ

No. 9

つ ば き 科

適用教材	適用学年
ツバキ	尋四理

参考教材  
サカキ、ヒサカキ、サザンクワ、(校庭)

No. 10

か へ で 科

適用教材	適用学年
モミヂ	尋四理

参考教材  
ヤマモミヂ(校庭)、ウリハカヘテ

No. 11

か た ば み 科

適用教材	適用学年
カタバミ	尋四理

イ ネ..... 尋五理  
 ム キ..... 尋六理・尋五綜  
 ナ シ バ..... 尋六綜・尋二綜

参考教材

ウシノケグサ、エノコログサ、チヒシバ、カヅノコグサ、カニツリグサ、カセグサ、カラスムギ、カ  
 ハライチゴツナギ、カモザグサ、キンエノコロ、クサヨシ、ササグサ、シバ、スズメノチヤヒキ、ス  
 ズメノヒエ、チガヤ、チカラシバ、チカラグサ、ドゲヤウツナギ、トボシガヤ、ヌメリグサ、ネヅミ  
 ガヤ、ノビエ、ヒメコバンサウ、ヒエガヘリ、マコモ、ムラサキエノコログサ、メヒシバ、アアラス  
 スキ、コスカグサ、チゴザサ、チチミザサ、トダシバ、ナギナタガヤ、スカキビ、ミゾイチゴツナギ

No. 24

まつ科

適用教材 適用学年  
 マ ツ..... 尋五理  
 マ ツ・ス ギ..... 尋六綜

参考教材

アカマツ(校庭)、クロマツ(校庭)、スギ(校庭)、モミ(校庭)、ビヤクシン(校庭)、ハヒビヤクシン  
 (校庭)、

No. 25

うらばし科

適用教材 適用学年  
 ウ ラ ビ..... 尋五理・尋二綜  
 ノ キ シ ノ ア..... 尋五理  
 コ シ ダ..... 尋三綜

参考教材

イヌウラビ、イヌチシダ、キノモトサウ、カウヤウラビ、クマウラビ、シシガシラ、タチシノブ、ト  
 ラノチシダ、ヒメウラビ、ホラシノブ、マメヅタ、ヤマソテツ、ヤハラシダ、カナウラビ、クワシ  
 ダ、シユウモンシシダ、ナライシダ、ヒメノキシノブ、シヤマクマウラビ、ミヤマシシダ、ミヤマ  
 イヌチシダ、

No. 26

菌類

適用教材 適用学年  
 マ ツ タ ケ..... 尋五理  
 キ ノ コ 取..... 尋三綜

参考教材

ハウキダケ、カハラダケ、シメダ、キシメダ、クロカハ、シヨウロ、コセミダケ、クナベニダケ、サ  
 ルノコシカケ、ベニダケ、ホホチヤリンダケ、

郷土動物教科目録

No. 1

爬虫類蛇類

適用教材 適用学年  
 ヘ ビ..... 尋五理  
 爬 虫 類..... 高一理

No. 17

くわ科

適用教材 適用学年  
 ク ワ..... 尋五理  
 イ チ シ ク..... 尋五綜

参考教材

カナムグラ

No. 18

ぶな科

適用教材 適用学年  
 ク ヲ..... 尋五理  
 ドシケリ(實)..... 尋一綜・尋三綜

参考教材

コナラ、アラカシ、イチイガシ、アベマキ(校庭)、クヌギ(校庭)、

No. 19

あやめ科

適用教材 適用学年  
 ハナシヤウブ..... 尋四理

参考教材

ヒアブキ(草園)

No. 20

ゆひ科

適用教材 適用学年  
 ユ リ..... 尋四理・尋三綜  
 チューリップ..... 尋一綜・高二綜  
 ネ ヤ..... 尋三綜

参考教材

サルトリイバラ、シヤノヒゲ、ノビル、ハウチヤクサウ、ヤブラン、ツバメゴモト、ツクベネサウバ  
 イモ、ノギラン、ホトトギス、

No. 21

うきぐさ科

適用教材 適用学年  
 ウ キ グ サ..... 尋五理

参考教材

コウキグサ、アナウキグサ、

No. 22

てんなんしやう科

適用教材 適用学年  
 サ ト イ モ..... 尋四理

参考教材

カラスビシヤク

No. 23

禾本科

適用教材 適用学年  
 タ ク..... 尋五理

No.5ノ1

昆虫 鱗翅類

適用教材	適用学年
モンシロテフ	尋四理
カヒコ ズキムシ	尋五理
昆虫類	高一理
村ノ害虫	尋五綜
参考教材	
クロアゲハ、ミヤマカラス、アゲハテフ、ジヤカウアゲハ、アサチアゲハ、キテフ秋春型、ヒカゲテフ、リュウキユウムラサキ、アサギマダラ、オホカバマダラ、キマダラヒカゲ、	

No.5ノ2

昆虫 鱗翅類

適用教材	適用学年
モンシロテフ	尋四理
カヒコ ズキムシ	尋五理
昆虫類	高一理
村ノ害虫	尋五綜
参考教材	
ヒオドシテフ、ルリタテハ、アカタテハ、ヒメアカタテハ、テンゲテフ、キタテハ、オホウラギンヘウモン、ウラギンヘウモン、ツマゲロヘウモン(同雌)、ミドリヘウモン、ギンボシヘウモン、コミスゲ、イチモンジテフ、コムラサキ、メスゲロヘウモン、ゴマダラテフ、オホウラギンスゲヘウモン	

No.5ノ3

昆虫 鱗翅類

適用教材	適用学年
モンシロテフ	尋四理
カヒコ ズキムシ	尋五理
昆虫類	高一理
村ノ害虫	尋五綜
参考教材	
ウラギンシジミ、ウラナミシジミ、ベニシジミ、ツバメシジミ、ヤマトシジミ、ウラナミアカシジミ	

No.5ノ4

昆虫 鱗翅類

適用教材	適用学年
モンシロテフ	尋四理
カヒコ ズキムシ	尋五理
昆虫類	高一理
村ノ害虫	尋五綜
ミノムシ	尋二綜
参考教材	
ヤマユギ、シンジュセン、オホミヅアザ、ウスサン、ウスダビガ、トモエガ、モモズメ、シモフリガ、アケビコノハ、ワモンキシタバ、カキバ、スガカシハ、	

参考教材  
マムシ、アホダイシヤウ、

No. 2

兩棲類無尾類

適用教材	適用学年
カヘル	尋五理
兩棲類	高一理
参考教材	
アマガヘル、アカガヘル、ツチガヘル、ヒキガヘル、	

No. 3

魚 類

適用教材	適用学年
フナ	尋五理
魚類	高一理
メダカ	尋一綜
参考教材	
タナゴ、モロコ、メダカ、ナマズ、ギギ、ヤツメウナギ、ドジョウ、	

No.4ノ1

昆虫 鞘翅類

適用教材	適用学年
ホタル	尋四理
ゲンゴロウ ミズスマシ	尋五理
昆虫	高一理
参考教材	
カタモンコガネ、マメコガネ、ヒメサクラコガネ、スヂコガネ、コガネムシ、コアナハナムグリ、アカマダラコガネ、シラホシハナムグリ、アナカナブン、カナブン、ドウガネアブイ、ヒゲコガネ、シロスヂコガネ、コフキコガネ、キンイロジヤウカイ、ジヤウカイボン、シロスゲカミキリ同雌、ゴマダラカミキリ、クハカミキリ、キイロトラカミキリ、ベニカミキリ、リンゴカミキリ、ゴマフカミキリ、ヨツボシカミキリ、オホクハガタ、ノコギリクハガタ同雌、ヒラタクハガタ、コクハガタ同雌、ネブトクハガタ、カブトムシ同雌、タマムシ、ウバタマムシ、クロタマムシ、	

No.4ノ2

昆虫 鞘翅類

適用教材	適用学年
ホタル	尋四理
ゲンゴロウ ミズスマシ	尋五理
昆虫	高一理
参考教材	
ゲンゴロウ、コガタゲンゴロウ、マルガタゲンゴロウ、ハイイロゲンゴロウ、ガムシ、ハンメウ、ミイアラハンメウ、セアカゴミムシ、キマハリ、クロマルコガネ、ガホニシユウキホシゲンタウ、ウリハムシ、クロウリハムシ、オホザウムシ、ヨツボシオホキスビ、ヨツボシクシキスビ、ウバタマコメツキ、	

No.9ノ1

昆虫 脈翅類

適用教材	適用學年
トシボ	尋四理
昆虫	高一理
玉池ノトシボ	尋二綜
参考教材	
ウチハトシボ、オホヤマトシボ、コヤマトシボ(同幼虫) ギンヤンマ、オニヤンマ、コシボノヤンマ	

No.9ノ2

昆虫 脈翅類

適用教材	適用學年
トシボ	尋四理
昆虫	高一理
玉池ノトシボ	尋二綜
参考教材	
シホヤトシボ、コシアキトシボ、テフトシボ、シヤウシヤウトシボ(同雌) ノシメトシボ、ヒメマユタテアカネ、ハラビロトシボ、ナツアカネ、シホガラトシボ(同雌) アキアカネ、ツノトシボ、イトトシボ、ホシウスバカゲロフ、カワトシボの一種、ハゲロトシボ、オホアチイトシボ、ミヤマアカネ、	

No. 10

昆虫 直翅類

適用教材	適用學年
コホロギ	尋四理
昆虫	高一理
イナゴトバツタ	尋一綜
参考教材	
シヤウリヤウバツタ、キチキチバツタ、オシバツタ、トノサマバツタ、ハラビロカマキリ、ツチイナゴ、セスダイナゴ、クロカマキリ、カマドウマ、クツロムシ、キリギリス、オナガササキリ、ツユムシ、クラ、クサキリ、セスデツユムシ、エンマコホロギ、ミツカドコホロギ、ツブレンサセコホロギ、スズムシモドキ、スズムシ、マツムシ、トゲナナフシ、クルマバツタ、ヒシバツタ、トゲヒシバツタ、ヤマトバツタ、エグリトビケラ(毛翅類)、ゴキブリ、ハネナガイナゴ、	

No. 11\*

くも類

適用教材	適用學年
クモ	尋五理
参考教材	
シヨロガモ、クサガモ、オホヒメガモ、デグモ、ナガコガネガモ、	

No. 12

甲殻類

適用教材	適用學年
エビ	尋六理
カニ	
ミズシロ	
参考教材	
サワガニ	

No.5ノ5

昆虫 鱗翅類

適用教材	適用學年
モンシロテフ	尋四理
カヒコ	尋五理
ズキムシ	
昆虫類	高一理
村ノ害虫	尋五綜
参考教材	

メスガタズメ、キイロスズメ、セスダズメ、オホスカシバ、ツガカレハ、フクラスズメ、シマガラス、シロシタケンモン、シロヒトリガ、マツカレハ、モンゴロシヤチホコ、ギンギシヨタウ、ナミイラガ、ホタルガ、カノコガ、シロハビノメイガ、ウスバツバメ、ユフマダラエダシヤク、コスズメ

No. 6

昆虫 膜翅類

適用教材	適用學年
ハチ	尋四理
昆虫	高一理
参考教材	

ウマノチバチ、カバドロボチ、スズメバチ、アシナガバチ、キアシナガバチ、セグロアシナガバチ、スズバチ、ベツカフバチ、キボシトツクリバチ、オホホシナガバチ、オホフタオビドロバチ、キオビベツカフ、クロアナバチ、オホハキリバチ、オホモンハラナガツチバチ、モンズメバチ、ヒメハラバチの一種、ミカドロボチ、マルモンツチスガリ、トツクリバチ、ヒメハラナガツチバチ、ニホンキバチ、クロズメバチ、クマバチ、オホモンクロベツカフ、

No. 7

昆虫 雙翅類

適用教材	適用學年
カ	尋五理
昆虫	高一理
参考教材	

ヒメニクバハ、ベツカフバハ、オホイシアブ、コウカアブ、シホヤアブ、アチメアブ、ウシアブ、ギボシアブ、シマアシアブハナアブ、

No. 8

昆虫 半翅類

適用教材	適用學年
セミ	尋四理
ウンカ	尋五理
昆虫	高一理
村ノ害虫	尋五綜
参考教材	

クマセミ、アブラセミ、ヒゲラシ、ツクツクホウシ、ハルセミ、ニイニイセミ、オホキンカメムシ、ホシハラビロヘリカメ、ハラビロヘリカメ、トビイロサシガメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、ナガメ、ホソヘリカメ、イチモンジカメムシ、シラホシカメムシ、ベツカフハゴロモ、オホヨコバイ、ハマアブハフキ、テンダスタバ、タガメ、ヒメミヅカマキリ、タイコウチ、アメンボ、コホシムシ、

二郷土史一覽表

課	題	目	郷	土	的	關	聯
一	神代(高)	天照大神(寺)	(水産神社、府社、寺田村)天照大神、高泉産靈神、豐玉姫命、(水主神社、府社、水主)天照御魂神以下十柱の神々(雙葉神社、郷社、佐山村)天照大神、素戔鳴尊、事代主命	本殿特別保護建造物			
二	神武天皇	神武天皇					
三	皇大神宮の創立	日本武尊	(久世神社、久世)素戔鳴尊	本殿特別保護建造物			
四	皇威の振興						
五	朝鮮半島の服屬と文物の傳來	神功皇后	粟隈縣、粟隈氏、大久保村久津川村邊、車塚古墳、久津川村平川、粟隈の墓?白骨、鏡劍玉、發掘粟隈、古川邊?仁德帝十二年				
六	佛教の傳來と美術工芸の發達	仁德天皇	桐原日術宮、菟道稚郎子、本殿保護建造物、(宇治神社)の宮付社、應神、仁德帝、稚郎子、拜殿攝社特別保護建造物、御神體稚郎子木俣國寶				
七	奈良時代の學藝	風俗	要渡邊修、推古帝十五年、宇治川架橋、孝德帝大化二年、斷碑橋寺境内に現存日本三碑の一				
八	奈良時代の佛教	和氣清麻呂	尼塚、寺田村東北、經十間圓墳式古墳、埴輪發掘、古墳、富野村觀音堂東部、古瓦刀劍類發掘				
九	聖武天皇	和氣清麻呂	寺田郷、園城寺蹟				
十	和氣清麻呂		正面寺、寺田村、大伽藍、兵火にかゝる、御牧村、左馬寮、御牧場舊趾				

一三	平安時代初期の發展	桓武天皇と田村	行宮、宇治、桓武帝、別業、宇治、源盛公、行宮、宇治、陽成天皇、山城郡久勢郡一統日本紀				
一四	藤原氏の專權	菅原道真	北野神社、宇治、山莊、道長				
一五	藤原氏の專權	藤原氏の專權	平等院、道通、縣神社、祭神、木花咲耶姬、賴通平等院の總鎮守神				
一六	平氏の騷擾	平重盛	宇治宮、縣神社内、菅原道真、宇治天神宮、神明栗駒山、菅原道真、宇治十帖、赤坂部、宇治拾遺、源隆國(宇治大納言)				
一七	武家政治の起	武家政治の起	宇治、鐘掛松、駒掛松(共に二代目)、源三位賴政、宇治川先陣、橋小島ヶ崎				
一八	鎌倉幕府の創設	鎌倉幕府の創設	後鳥羽帝建久二年茶種を榮西唐よりもち歸る、宇治茶、三條寺、寺田村、兵火に罹る				
一九	鎌倉幕府の盛時	鎌倉幕府の盛時	興聖寺、宇治朝日山麓、道元禪師開祖、直行寺、宇治一ノ坂、日深上人開基(日蓮法孫)				
二〇	建武の中興	建武の中興	笠置靈寺御加勢三六名、寺田村二名、佐山一名、富野三名、寺田、女院御料一花山院蹟、圓淨寺、寺田村二大伽藍の一				
二一	室町幕府の盛時	室町幕府の盛時	宇治茶園一産滿				
二二	室町幕府の衰微	室町幕府の衰微	三條寺、橋山中興十一世再建				
二三	足利氏の衰微	足利氏の衰微	全佛寺、寺田村、智覺中興、西陣、應仁亂西軍山名宗全陣				

No. 13 軟體動物類 腹足類

適用教材 カタツムリ  
 参考教材 クラベニマイマイ、オホタニシ、マルタニシ、カクタニシ、カハニナ、キセルガヒ、

No. 14 軟體動物類 斧足類

適用教材 二枚貝  
 参考教材 タガヒ、カタハガヒ、トンガリササノハ、ササノハ、イシガヒ、マツカサガヒ、ナマトシジミ、セタシジミ、

No. 15 鱈形動物類 環虫類

適用教材 ミミズ  
 参考教材 ミミズ、クワミミズ、イヨウビル、ウマビル、

郷土鑛物教材目録

No. 1 非金屬鑛物 石

適用教材 水晶(石英)  
 参考教材 スナバ、アソビト、イシヒロヒ、石英、硅化木、玉髓、

No. 2 火成岩

適用教材 花崗岩  
 参考教材 安山岩、英雲安山岩、石英斑岩、

No. 3 水成岩

適用教材 方解石(石灰岩)  
 参考教材 燧岩、鳴石、砂岩、礫砂岩、和泉砂岩、珪岩、角岩、粘板岩、珪質粘板岩、炭質凝灰岩、石灰岩、



三三	國內の統一	横島城跡、義昭公信長に敵し豊を築く。今城跡跡三茶園一方二町許一段高地也。
三四	横田信長	宇治橋工事奉行、羽柴秀吉、唐銅製寶珠二十二基。横島城跡、文鏡三年秀吉。
三五	豊臣秀吉	宇治茶に關する禁制を發す秀吉天正十二年。
三四	邦人の海外發展と當時の文化	高岳寺中興、誓岳。築城市衛、秀吉、淀城、徳川氏増築。松平定綱。山崎天王山の戦。龍關小栗酒光秀の死。聚樂第、徳川内裏跡。
三五	江戸幕府の創立	宇治橋架換慶長四年(十三年毎架換)。秀忠伏見城を定(一)。
三六	徳川家康	松平定綱、水井尚政、石川憲之、松山光熙、松平紫邑、稲葉正知(明治四年)。
三七	島原の亂と鎮國	長光寺天空再興。
三八	産業學問の發達	參勤交代、助郷、馬借參照。キリスト教の禁、宗門改、寺手形、獨書參照。關藏院、大久保村、萬安、開創、禪宗。
三九	江戸幕府の中興	廣野新田、深隈山一部大久保村民開墾。寺田、花山院領より天領となる。
四〇	徳川光圀	水主禁裏御料。
四一	大石良雄	三線寺焼失。
四二	尊王論と國學の勃興	淀藩火藥庫跡、廣野八軒屋(明治五年廢止)。船利兵衛、琉球、黄ヶ島より甘藷を持歸る。寺田芋百連一揆、木津川水害、庄屋等投獄。
四三	後光明入皇	現在の總持作りの三線寺成る。荷田春滿宅、稻荷神社内。
四四	彦九郎と君平	(彦九郎銅像、三條大橋)。

四四	大政奉還	本津川二十七間決潰東宮野流失家屋二〇餘戸。
四五	孝明天皇	本津川決潰宮野地頭より救米額を定む參照。
四六	武家政治の終	伏見鳥羽古戰場、御香宮淀親馬附近下鳥羽城南宮。
四七	明治維新	明治元年宇治川筋汎濫、横島村家屋流失一八戸。
四八	明治維新	明治三年宇治川堤防決潰一三〇町歩荒蕪地。廢藩置縣、明治維新後の官制沿革參照。
四九	邊境の開發	六年四月六日寺田小學校創立開校。
五〇	西南の役	十八年宇治川堤防破壊、一三五町荒蕪。
五一	立憲政體の確立	長池宿舊記念碑建つ(二一年)。
五二	憲法發布	二年巨椋池堤防破壊、濁水村内没入。
五三	朝鮮事變と明治	二六年巡査駐在所。
五四	明治二十七八年戦役	二七年隔離隊舎。
五五	國運の進歩	二九年奈良線開通。爾來水難より免る。
五六	四年京阪電鐵開通	四三年京阪電鐵開通。
五七	昭和三十年奈良電鐵開通	昭和三十年奈良電鐵開通。

備考 參照とあるは久世郡誌參照のこと

月日	行	事	摘	要
一	四方拜賀式	初詣と初商ひ	神社参拜をすませ後、學校にて講話をきく。	農家は萬方の田へ御禮廻り、商家は得意先へ挨拶に行き、學童のみ書をかく。
二	書	會	青年團新年宴會をなす。	

五	初縣参り	宇治町の縣神社へ参拜する者多し。ぜんざいを祝はねば「川にはまる」と言つて各家ぜんざいを祝ふ。
六	小寒入り	なづな、餅を入れた白粥雑炊を祝ふ。六日の夜七種を組板の上に載せ「七種なづな、唐土の鳥が日本の國へ渡らぬ先に……」と云ひながら準備をなす。
七	七種粥(七日月)	村の消防組、一所に集つて初演習をなす。十四日の夜、餅をちぎり火にくべながら「蚊の口、のみ口……」と稱しながら魔除けを行ふ。
八	消防出初式	仕事を休んで小豆のお粥を祝ふ。家々で神飾を焚く。
一四	魔除け	母、奉公人、里へ歸り休養す、普通子は母と共に里歸りをなす。
一五	小豆粥(小正月)	入營する方々を見送りに行く。
一六	敷入り	京都市の東寺へ参詣するもの多し。
二〇	初年兵入營	初弘法の様に多くはないが、京都市の北野神社へ参詣す。
二一	初弘法	村人休んでお祝する。
二五	初天神	豆を撒き、「福は内、鬼は外」を稱へる。この日必ず神社と地藏様へ参る。
二六	二度正月	村人、五穀の豊穰を祈る。尋五以上参列す。
二七	節分	學校にて式、建國の精神を追驗して、將來の努力を誓ふ。
二八	初元節	村にある稻荷様を祭り、おひたきをなす。
二九	初午	字水主にある、牛、馬の神様の祭りで子供歡喜す。
三〇	權井月神社祭	學校にて講話、皇后陛下の御誕生をお祝する。
三一	權井月神社祭	村の忠魂碑に参拜して講話を聴く。
三二	權井月神社祭	彼岸餅はしないが墓参は必ずする。(一八一―二四) 旗日、お墓にまゐることを獎勵してゐる。
三三	陸軍記念日	各町、日を異にして天照大神を祭り、夜明けに氏神に参拜す。
三四	春幸皇靈祭	
三五	ひまち	

一〇	卒業式	學校にて卒業式を行ふ。
一一	田螺拾ひ	春の野に蓬摘をなし、田に田螺を求めものが多い(二五日―四月初めにかけて)。
一二	入學式	學校にて入學式を行ひ、式後水度神社に於て奉告祭を行ふ。
一三	神武天皇祭	けんぎよと田螺の酢あへをして食し、蓬餅、菖餅をして供へる。
一四	羅祭り	學校にて敷式、講話。
一五	天長節	自家用又隣村へ茶摘をなすもの多し。
一六	茶摘	忠勇美談を講話としてなす。
一七	海軍記念日	この頃の兒童、苗代に出て蝦虫を採集す。
一八	蠅虫採集	節物として粽、拍餅をこしらへ、屋根へ菖蒲、蓬をあげて厄祓となす。鯉ははこの日で終る。
一九	端午の節句	宇治町の縣神社の祭には澤山参詣す。
二〇	縣祭	講話、時間尊重を誓ふ。
二一	時の記念日	この頃より村人、田植に多忙、兒童之を手傳ふ。
二二	田植	青訓の行事を参觀す。
二三	青訓記念日	夏、腹を痛めないやうにと、この日おはぎをたべる。
二四	七夕祭	學校で幼學年のみ七夕祭をなす。
二五	金比羅祭	大久保村の金比羅さんに参拜する者多し。
二六	土用入	この日あんけのものをたべる。
二七	土用丑	あげ、鯉のやうな油氣あるものをたべる。
二八	墓参	各自の寺、墓へお詣りする。(一―七)。
二九	七日盆	井戸がへをなす。
三〇	衛生掃除	この頃全村衛生掃除、兒童がお傳ひをする。
三一	精進迎へ	しんこをこしらへてお供へする。
三二	精進送り	精進あげと言つて鶏肉をたべる。
三三	敷入り	母、奉公人里歸りをなし休養す。

一七	長光寺觀音祭り	踊りをしないと疫病ありと稱して毎年踊る、子供歡喜す。
一九	虫送り	隣村と共同して虫送りをなす、實に壯觀。
二二	辨財天祭り	寺田村の念佛寺内にある辨財天を祭り踊りをなす。
二三	地藏盆	墓參して、寺の地藏様を祭り、百萬遍を稱へて夜を徹す。婆さんと童兒のみ。
二三	夏作物評會	村の夏作物品評會、兒童も出品す。
三〇	盆踊	青年團主催にて盆踊をなす(二〇—三〇)
	水津川水泳場	七月一日より八月末日まで水津川水泳場開設、兒童澤山泳ぎに行く。
九、一	關東大震災記念日	講話、勤儉を奨励し、避難演習をなす。
一三	乃木祭	講話
二二	招魂祭	彼岸中に神式によつて在職中、在學中死亡せし人々の招魂祭をなす。
二三	秋季皇靈祭	お寺、お墓へ詣る。
二五	市	方々からきたりお祭の道具、雜貨を賣る。村人之を賣ふ。(二五—二六)
三〇	おいで	御輿をかついで御神體を迎へに行く。晝くりやかやの行事をなす。
三一	宵宮	夜十一時頃盟神探湯の行事をなす。
二	水度神社祭典	御神體を水度神社の本殿に遷す。さば番司、かしわを祝ふ。
三	水度神社祭後宴	お客様を送り出した若い人々の慰勞休み。
一三	水主神社祭典	宇水主の人、仕事を休んでお祝する。
念日	戊申詔書下賜記	講話。
念日	大運動會	學童の運動會を行ふ。村人多く參觀す。
一七	半名月	有志の人はこの日芋を供へて月を賞す。
一七	神嘗祭	國旗日。
三〇	教育勅語下賜記	講話。
二、三	明治節	講話、御感徳を奉讃す。
二、三	新嘗祭	水度神社の神殿に新五穀を供へ、加護を感謝する。

三〇	除障日	村人、除障する人々を迎へる。
三、五	秋じまひ	新米で赤飯を焚き、親類、近所へ配る。(五—二〇)
八	針供養	針仕事を休みコンニャクをたべる。
一四	義士會	お話會。
二三	まびす講	商家ではまびす様を祭り、近所へあんころもちを配る。
二五	大正天皇祭	國旗日。
二六	砂持ち	町々日を異にして道に砂を置く。
二七	餅搗き	この頃各戸餅搗きをなす。
二九	煤拂ひ	この頃家々煤拂ひをなす。
三一	門松、注連飾	三十一日午後門松、注連飾をなす。
	お火もらひ	午後三時頃から水度神社へ提灯を持ってお火をもらひに行く。

四 重なる参考書目

- 引用書目  
郷土科學第九號郷土に無限性
- 参考書目  
最新各科教授法  
私の理科教育  
自然と直観  
尋四迄の國史教育  
尋四迄の地理教育  
年中事物考  
綜合科教育の實際
- 小西重直著  
小西重直著  
關原吉雄著  
芳澤喜久著  
大松庄太郎著  
鶴居滋一著  
矢部善三著  
橋本秀一稿

特設綜合科  
に於ける  
日本公民教育の實際

## 第一章 小學校教育と公民教育

### 第二節 日本公民教育概論

#### 1. 公民の意義

公民の語が我が法制中に次の意義に於て表現せられてゐる。「帝國臣民タル年齢二十五年以上ノ男子ニシテ二年以上町村住民タルモノハ其ノ町村公民トス」也。しかし之は政治的能力者ヲ謂ふ意義であつて公民教育上の意義を表現するものではあるまい。公民教育の所謂公民は之よりも廣義なもので、内容的に見るならば政治的・經濟的・社會的の諸内容を充實したる人とする。今この内容を鮮明にするために公民教育の起因に一瞥を與へよう。

#### (イ) 政治生活の要求

十八世紀から十九世紀にかけて、國家が興隆し、國民的團結の必要を痛感した。殊に正しく國家生活を理解し、政治生活を向上せしめる教育を必要としたが、此の傾向は歐洲大戰後、世界共通の國民教育強調によつて一層強くなされた。要するに近代の立憲國家の本質から來たものであつて、近代國家が凡ての成人をしてその國家生活に參與せしむるに至つたこと謂ふ事が、此の教育を要求した有力な動因である。故に國民はその國家の本質や、その制度や、その作用に對して興味と理解とが大切になつて來た。

#### (ロ) 社會生活の變動に伴ふ要求

産業革命後社會生活の大變動が極端なる物質文明を現出し、唯物思想、性道德の混亂、郷土感情の荒廢、社會問題の發生等の道德生活の低下から之等を救済し、向上せしむる爲には、眞に國家公民としての道德的自覺を喚起する必要あり、又社會事業や社會政策に關する根本的の教養を與へて、健全・中正なる公民思想の持主たらしむる事は目

下の急務なりとの叫びが強くなつて來たのであつた。

#### (ハ) 經濟的生活の要求

經濟の組織を理解することは他の知識と相併んで共存共榮の爲に缺くべからざるものとなつた。即ち自給自足から物々交換の行はれた頃には、さまで重要性を有しなかつたであらうが、今日の如く貨幣經濟となり、信用組織が發展し、生産と消費とが國境を越えて世界的關係を持つ時代に於ては非常な意義を有することになる。

我が國に於ける最近の公民教育の要求も如上の原因によるものである。今、廣瀆教授の御言葉を拜借して簡単に述べる。

#### (イ) 國民の政治生活

是は、結り普通選舉を實施して見た所がさう立派な成績を擧げることが出来なかつた。

#### (ロ) 思想國難

モット日本人をして社會生活に對する自覺を與へ「我は日本人なり」といふ國民たるの志操を強く把持せしめたい。

#### (ハ) 經濟國難

經濟國難は金解禁以來の現象のやうにも觀られるが、必ずしもそれだけではない。人々をして經濟組織全體に對する正當の認識と、それに充分堪え得て現状を打開する氣持と實力とを養ひ、産業開發的に行動せしめたい。

次に最近の政治教育思潮を聽く。

本年一月號の改造誌上で、佐々木惣一博士も「政治教育計畫」といふ論文に於て立憲政治意識の確立の必要より公民教育の重要性を力説されてゐる。「今日、吾々が、社會生活に於て幾多の革新すべき事のあるを知りながら、之を實現することの出来ないのは、吾々が政治に眞剣にならないからである。政治は社會生活を向上せしむるが爲の努力であるから、吾々が政治上の行動を爲すに當つては、公の見地に於

て其の行動を決定すべきであり、又其の行動について責任を負ふべきである。公の心と責任の感、この兩者が吾々の政治上の行動を適正ならしむるものである。然るに人は恰もこの兩者に於て弛緩し易い。故に智識の方面から、又性格の方面から、常に公の心と責任の感を鼓吹し保持するやう、特に努力しなくてはならない。政治教育の必要なる特性の理由が茲に存するのである。しかして政治教育は公民教育の一種である蓋し公民教育は、國民をして、國家に於ける共同生活の負擔者であるといふ自覺を保たしむることを中心觀念とする教育であるからである。公の心と責任の感はたゞに政治生活のみに限られず吾々の生活の全面に亘つて、特に今日堅く深く自覺されなければならぬ。

思ふに人々は先づ個性を發見し自我に眼ざめ、次で社會を發見し社會の力を認め、更に國家を發見し國體を知り、民族精神を見出すに至つた。かくて公民教育の教育的意義が深く掘下けられる時、そこには遂に日本精神に到達するのではなからうか。

## 2、日本公民教育の意義

茲に於て諸説を考慮し日本公民教育とは、「日本國民をして、我が國家發展完成の爲に政治・經濟・其他社會生活に關する知識を授け徳性を涵養し、以て實踐躬行せしむる教育である」とす。即ち公民教育は、社會生活に於ける綜合的知識を與へ、將來我が國の中堅國民として、眞實な社會意識に覺醒せしめて、共存共榮の生活を具現せしむるにある。

最後に公民教育と國民教育の別を明にして公民教育の内容を明にしたい。小學校令第一條中にある「國民教育」の意義について、この起草者江木千之氏の説明によれば「一國の特性に關する教育即ち國民教育をして國に普及せしめんには大に普通教育による所なかるべからず」と。即ち國民教育といふのは、我が大日本帝國の特性に關する教

若き公民をして自己の觀察と經驗に基いて、其の社會生活の意義、並に之と關聯して政治的の意義をも了解させることは可能であり、又しなくてはならぬ事でもある。これが小學校に於ける公民教育の使命であり目的である。

## 2、小學校教育と公民教育

勿論小學校に於て公民科として獨立の教科は設けられなかつたが、小學校にて全然公民教育の機會が與へられなかつたこと云ふことは出来ぬ。小學校令第一條に「小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ道德教育及國民教育ノ基礎並其ノ生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス」とあり。小學校令施行規則では修身に於て「國家及社會に對する責務の一斑」を、地理に於て「國勢の大要」を、國史に於て「國體の大要」を知らしめんとし、各教科に於て公民的教材が如何に多く盛られてゐるか一別紙一覽表参照しを知るべきが出来る。従つて是等各教材の教授を適宜系統組織立つれば、國民の政治生活、經濟生活並に社會生活を完うするに足る知識を涵養することが出来る。否さうあるべきである。しかして小學校に於ける公民教育の問題は系統的な知識教授よりも實行に訴へて共同生活を體驗すること、その重點をおかねばならぬことは云ふまでもない。要するに小學校に於ける公民教育は各教科指導を通し、諸行事諸施設に亘つて即ち教育全般の施設中に織込んで、公民生活の基礎となるべき公民精神を涵養し、堅實に一步々々々、その基礎を堅め行くべきである。

## 第二章 綜合科に於ける公民教育

### 第一節 兒童の公民生活

我等は既に第一章に於て公民教育の必要を十分に知つたのであるがさて本校が特設する綜合科に於て公民科が如何なる分野を占むべきで

育となる。又地方學事統計事務打合せに於ける文部省の説明も全く同じ精神であるとの事で、故に國民教育と公民教育とは深い關係を有す一國の特性は、國體・國民精神・國民道德・國語・國文學・風俗・習慣・神話・傳説・思想・社會制度なきの上に表示されるものであるから、修身・國語・國史・地理なきの諸學科は國民教育の中樞となさねばならぬ。而して公民教育は國民たる立場を離れて、單に健全なる社會人を育成する爲の教育ではないのであるから、國民教育の基礎の上に立たねばならぬ。たゞ其の主眼とする所が、一方は主として公共生活に於ける知識を具へしめるといふに對し、他は我が國の特性に關する教育であるを解すべきであらう。

### 第二節 小學校教育と公民教育

#### 1、公民教育の可能性

公民教育の中心問題は、社會國家の構成原理を教へ、社會國家と個人の關係を明瞭にさせることである。ロード・アベリーが「兒童をして「私」といふことを考へるよりは「我々」といふ事を考へるやうにする」といふことをいつたが、これが公民教育である。而してこの我々の範圍は家庭から郷土へ、郷土から國家へと擴がつてゆくのである。我々の「公民」は地方自治體の一員たる資格のみならず、社會の一員國家の一員たる資格をも包含するのである。この資格への教育が公民教育であつて、まだ市町村公民たる資格を備へないその準備として尚距離の遠い小學校兒童に對しても、公民教育は行はれ得る。何故なら小學校兒童がそのまゝに社會の一員として公民であるから、この幼き公民としての教育であり得るわけである。

兒童も將來の公民として、其の準備期にあるばかりでなく、兒童として既に幼き公民、若き公民である。しかして少年期になればすでに無論多くの錯誤をも混へたま、無秩序無系統に社會的事實に關する知識を持つてゐるのである。これに秩序と系統を與へ、誤謬を正して

あらうか。綜合科の目的を今一度顧みて明かにしたい。

「兒童の無自覺的な郷土生活の諸相を、自覺的に爲さしむることによつて、高次の郷土生活を創造せしめ、以てよき日本人たるの基礎を陶冶す」これが綜合科の使命である。今假りに兒童の郷土生活を左の如く彙類してみよう。

- 1、全一的生活——郷土自然生活
- 2、科學的・藝術的——郷土文化生活
- 3、政治的生活——經濟的生活——郷土公民生活
- 4、農業的生活——郷土職業生活

又その生活の場所によつては、家庭生活・學校生活・社會生活とも見る考へ方もあらうが、其の何れにしても兒童の公民生活はある。従つて茲に公民教育がなければならぬ。家庭は廣い社會の小さい模型の様なもので、父母兄弟姉妹が父母の統制の下に分業協力生活を營んでゐるのである。年齢と能力に応じて掃除、子守、寮所等の仕事を手傳ふのは分業であり、其が結局一家の幸福を目的としての協力である。親子の間には上下の關係があり、兄弟姉妹の間には平等の關係がある。分擔する仕事からは責任の觀念が養はれ、父母の教導に順ふことは遵法の精神の基礎となる。父の職業に生産があり、母の手に分配があり、家族全體の衣食に消費がある。社會に於ける總ての關係が小さい雛形の様な家庭生活に含まれ、何等の面倒なしに平和に回潜に行はれてゐる。全體の社會が此通りであるならば極めて幸福であらう。善良なる家庭の教育は公民教育の基礎となる。其は主として、良心の心掛を養ふ訓育の方面に屬することである。兒童が父母の命を受けて外に使用する間には郵便・電信・銀行・組合・宮・寺・市場等の

機構に就いてもいづきなく理解するであらう。

學校生活に於ては、兒童の活動範圍は更に擴大される。爰にも教師との間に上下の關係、兒童相互間の平等關係があり、教室内の授業及課外の作業に於て協同の精神を養ふことが出来る。家庭では統制は父母の人格的權威によつて行はれ、自然の愛情によつて覆はれてゐるが學校では理法の觀念が人格的權威から徐々に分離獨立して来る。是も純粹な法の支配を受ける前に必要な階段なるのである。故に善良なる學校の訓育は其まゝ公民教育であること云ひ得る。

## 第二節 綜合科に於ける郷土公民科

### 1、郷土公民科特設の必要性

前述の如く郷土に於ける兒童の公民生活は、年齢を追うて漸次に展開されるものなるが故に、小學校に入學と同時に公民教育は初めらるべきであり、日常生活を通して卒業まで辛棒強く繼續されるべきものであるが、特に兒童生活の發展に應じて、之に對應すべき教育方法を當然考へられなければならない。各教科の公民的教材を通して公民教育を興ふべしとは、よく云はれる所であり、興ふべきではあるが、原理としての公民教育は稍もすれば看過され等閑に附せられ易く、又無系統斷片的に陥り易く兒童の本當のものとなり難い。こゝに於て本校は特に五年以上に綜合科として郷土公民科を特設する所以である。

しかしながら我等は世の流れに従ひ今更の如くに公民科特設を云々するものではない。既に既に我等同人の目標とする綜合科學習を實踐するべき、勢ひ郷土公民科學習に到達せざるを得ないのである。蓋し我等の綜合科は郷土公民科學習に基けるものなればなり。今、小面博士の高著「勞作教育」中の勞作社會の御言葉を拜借して、此の點を明にしたい。

學校を勞作中心に組織する場合は學校全體が勞作社會である。其處

には共同的勞作や、個人又は小群の分業的勞作も行はれる。

勞作社會を構成する兒童生徒も、横に同一學級同一發達程度のものであれば、又縦に發達の異なるもの、學年の異なるものが相結合する場合もあり得る。この場合教師も固より勞作社會の會員であつて、而も指導の地位にあることは勿論である。斯様な勞作社會に於ては、社會の會員相互は、一面には個性を發揮するが、全體としては御互に練り上げた社會の總體的意志の下に勞作案を製作して其遂行に當り、各自は全體に屬するものとしての責任を感じる。斯かる組織に於てもリットなきが廣義の辨證法的發展を考へてゐるやうに、個人の意見と全體の意見が常に必ずしも一致するものではない。會員は兩者の對立を體驗する場合もあるが、其の共鳴や若くは意見の相違なきにより、一面には個性の自覚が強まると共に、また社會性の發展も可能なる。自己の眞面目な仕事に就いては固より、他人の仕事に就いても尊重し、自他の仕事を結合して全體的になす所に眞面目な敬虔心も培はれる。社會連帯心や、相互扶助の心や、協同、認容、寛大、友愛、秩序、規律、遵守なきの諸徳が教養される。

日本人の豊かな堅固な徳性に就いては世界に誇り得るものも少くはない。併し社會的徳徳の方面に於ては尙大いに訓練を要するものがある。小學校より専門の學校に至るまで、學校生活における修身の教授時數の多いことは日本が世界第一であるが、觀念的な教授に偏して訓練が不十分であつたら、社會生活の發達も人格の充實的な構成も望まれない。わけても協同的な仕事における連帯責任の如きは、單に御互に他を侵害せずに、自己の慾望を遂げようとするやうな意味のものではない。團體の一員としての道徳的自覺に俟たねばならない。更に宗教的に深化されることが望ましい。即ち團體的生活に於て自己の責任を盡すことは絶對者に奉仕する自己の使命であるといふ信念に基づき道徳的自覺も其の自然の花であるといふやうになれば一層美しいこと

である。そしてこれ等宗教的道徳的自覺は、單なる觀念の教授のみに

よりて養はれるものではない。具體的な勞作的教育に於て、實踐的に訓練されることにより初めて眞實な自覺となり得るのである。各自は全體の人の價値生活の爲に力を盡し、全體の人は各自の價値生活の爲に考慮するといふ態度の教育も空な觀念の教育のみでは覺束ない。

個人勞作の場合には、勞作夫れ自身の性質によりて個人的方面の徳性に關係ある正確の性質、忍耐、熟慮、斷行、自己信頼、節制、創造的勞力等の精神が養はれるが、社會的精神に關係ある徳性は、勞作的社會として構成された共同勞作の實行に於て初めて具體的に實習的に涵養されるのである。殊に學校教育における勞作社會が家庭や實際社會の勤勞と結合し、子供や青少年の勞作が、家庭や社會の實際生活上の勤勞的勞働に實習的に参加するやうな機會が興へられるならば社會的道徳も一層具體的に教養されること。

即ち公民科に於ける政治的生活、經濟的生活、社會的生活を如何に生活すべきかを明瞭に御高教を賜つてゐるのである。我等の郷土公民科と稱する所以は、兒童の發達に應ずる綜合科の指導目標を明らかにしめるためである。

### 2、道徳意識の發達より觀て

更にこれに道徳意識の發達の上より考察を加へよう。

#### (イ) 低學年

幼兒は先づ、母といふ自己に最も都合良い存在を認識し、父、兄弟等自己に便宜を興へる者を好む。即ち總てを主觀的標準に依つて決定する。かくして入學當初は依然連續生活であるが、學校といふ社會を認識し、教師の指導、友人との交友生活等によつて、漸次客觀的標準に轉換する。殊に二年にもなれば益々此の傾向が強くなり、自己の信頼する先生、規則等をそのまゝ善しし、之に従はうとする。然し何と言つても價値統整が十分出來てゐない時代であるから、尙主觀的

色彩が濃厚な時代である。

#### (ロ) 中學年

三年頃は殆ど絶對的な客觀時代である。信頼する先生の言、朋友の感化、學校の規則等他によつて決定し、而も理由等を問はない無條件の服從時代である。故に低學年から中學年にかけては良き環境、教師の指導により、良習慣の基礎を培ひ、漸次自覺的、自治的に誘導すべき時代である。四年は轉換期と言はれてゐる通り、あらゆる生活に自覺的轉機を見せて、即ち客觀的傾向中には、著しく發達した知識、思考力によつて、自ら作爲工夫しようとする自覺を内含して来る。又三年の終頭から著しく團體心が發現して来るので、なるべく自己創造的な指導をすると共に、自治生活へ導入せねばならない。

#### (ハ) 高等年

五年頃になれば、最早無條件的客觀時代を脱して、自己の意志で選擇決定しようとし、理由を探求する自律時代に入つて来る。一面自己と社會の生活を一體として見る様になり團體精神の高揚する時代である。故に五・六年に於て、自ら作爲・創造する自律的生活と、共同互助の自治的相互訓練をせねばならない。高等科に入れば益々自發性・社會性の發達を見、殊に自ら進學研究するといふ自覺が急激に道徳意識を高揚せしめるものである。即ち著しく發達した意志、知力、情操體力等を基礎として自律的生活を構成しようとする意識が生じ、一方實社會の生活へも異常な興味を持つ時代であるから、自律的創造的自治的等の道徳基礎を完成せねばならない時代である。特に公民的指導は高等科の主要部面である。(西治公氏著勞作教育)

#### 3、公民科特設論

次に小學校に於て公民科を特設するの可否に就ての論を聴かう。

#### (イ) 木村正義氏—公民教育

今日世界の大事は特に公民教育を重んじ次第に公民科を獨立の一科

として取扱ふ傾向を生じて居る。我が國に於ても小學校の高等年及高等科に於ては余は寧ろ公民科を特設し今少しく慎重に、組織的に教授及訓練の上に研究施設するの急務たるを感ずるものである。

(ロ) 廣濱教授—公民教育の根本問題

小學校に於ける公民教育であります、其の必要な事は當然過ぎる程當然である。併しながら、小學校で公民科を特設するがよいか、かといふ問題になる、尋常小學校では特設しなくてもよからうが、高等小學校になる問題がある。何となれば、現在實業補習學校に於て既に公民科が課せられて居り、青年訓練所でも修身及公民科が授けられて居るから、高等小學校に於ても、それと同じやうな意味合に於て、公民科の特設を見てもよいやうでもある。

4、郷土公民の長所短所

今一つ、教育上より見たる郷土及び郷土民の長短を研究し、以て郷土公民科の綜合科に於て占める位置を明にしたい。

(イ) 長所

- 1、自治制度が相當發達してゐる。信用組合がよく活動し、農會も亦よく奮闘してゐる。政治生活—行政
- 2、位置・地質・氣候・産業に恵まれてゐる、交通も便利である。經濟生活—自然
- 3、純農村である
- 4、よく勤勞する—男子
- 5、貯蓄心が深い
- 6、文化的施設に恵まれてゐる
- 7、教育に關心を持つてゐる
- 8、村への自負心
- 9、よく一致する
- 10、敬神崇祖の念厚し

經—企業  
經—勞働  
經—消費  
社—文化  
社—文  
社—連帶  
社—連  
社—宗

(ロ) 短所

- 1、信に缺けてゐる
- 2、打算的に過ぎる
- 3、薄情である
- 4、時間尊重の念に乏しい
- 5、餘りに批評的
- 6、求知心に乏しい
- 7、流行に走り易い
- 8、家庭教育が低い
- 9、粗野で低級である
- 10、氣概に缺けてゐる
- 11、根氣がない
- 12、享樂的で飲食遊藝が多い

(ハ) 兒童に映じた郷土の惡風

- 忠魂碑の中で遊んで汚す者が多い  
玉池の船に勝手に乗る者が多い  
玉池に石を投げる者が多い  
女の人は働く事をいやがる風がある  
人の物は無茶に使用する  
夜遅くまでぶらつく人が多い  
物見高いのは江戸のくせといふが寺田も盛である  
あだ名をつけるのは日本一か  
良い噂はしないが悪い噂は村中にすぐ知れわたる  
葬式の時にもガヤ／＼よくしゃべる  
犬を見つめるにすぐ石を投げる  
物を食べながら道を平氣で歩いてゐる

社—人的關係  
社—人  
社—人  
社—人  
社—文  
社—文  
社—文  
社—文  
經—勞働  
經—勞働  
經—消費

人のかげ口をよくいふ

云ふ事は二人前する事は半人前

道路でじやまになるのに大勢で遊んでゐる

珍らしい人が来るまでどこまでもどろ／＼歩いて行く

道を歩いてゐる平氣で「チュー」ミたんつばをはく

夫婦けんくわの聲が道から聞えて来る

かさを掃いてそのゴミを溝へ捨てる

けんくわにけしをかける者がある

流行歌を歌つて平氣な者が多い

道ばたで立小便を平氣でする

夜分學校で催し物があるミ下駄のまゝ廊下へあがる

公會堂や會所の掃除をいやがる

つゝじが咲くミ折つて歸へる

重い荷車をひいていかれても他人の事だミいつた風で押してあけない

お金持の人に對してお世辭がうまい

寄り合の時になか／＼集らない

何かするとお酒を飲みたがる

自動車のあみについて走る者がある

道一ぱいになつて歩く風がある

よその部落けんくわをする

所々に樂書がある

神社や寺の前で禮をしないものがある

「つん」ミ手ばなをかむ

電車で遊ぶ者がある

きたない言葉の者が多い

大きな聲でしゃべりながら歩く

自轉車に二人乗の者が多い

夜電燈をつけないで自轉車に乗る

夜通し電燈をつけてある家が非常に多い

新しい品物を持つてすぐひやかす

人の前で内密話をする

人の名をよびすてにする

川によく汚物を捨てに行く

廣告なごをすぐ破る

鼻紙やキヤラメル箱をよく捨てる

風揚げを畑や田の中でよくする

お旅所のサイレンによく登る

樹木に字をほるものがある

壁にテマルをあてる者がある

嫁入りの時よそのにはさきをよく荒す

之を要するに個人的な長所の反面に、横の關係、平等者間に於ける

態度には、訓練の不徹底な或物のある事は否定出来ない。自分の物ミ

人の物、公有物、共通物に對する行爲に非常の差のある事は事實であ

る。又自分の仕事に忠實な我が村民も、人の仕事公の務めに對してま

だ／＼訓練されなければならぬのである。郷土公民科の嚮ふべき所

自ら明かなるものがある。

5、結語

凡て制度は末であつて人が本だ。

東郷博士の御高教を、私が私自身に言ひ聽かす言葉とした。

東郷博士はその名著「精神日本の建設」に於て述べられてゐる。

「非常時日本の打開は精神日本の建設から。精神日本の建設は農業

日本の再建から。大きな意味に於て、日本六千四百萬、植民地を入れ

て九千餘萬の國民が、今日は丁度ファウストの第一部のしまひ際をう

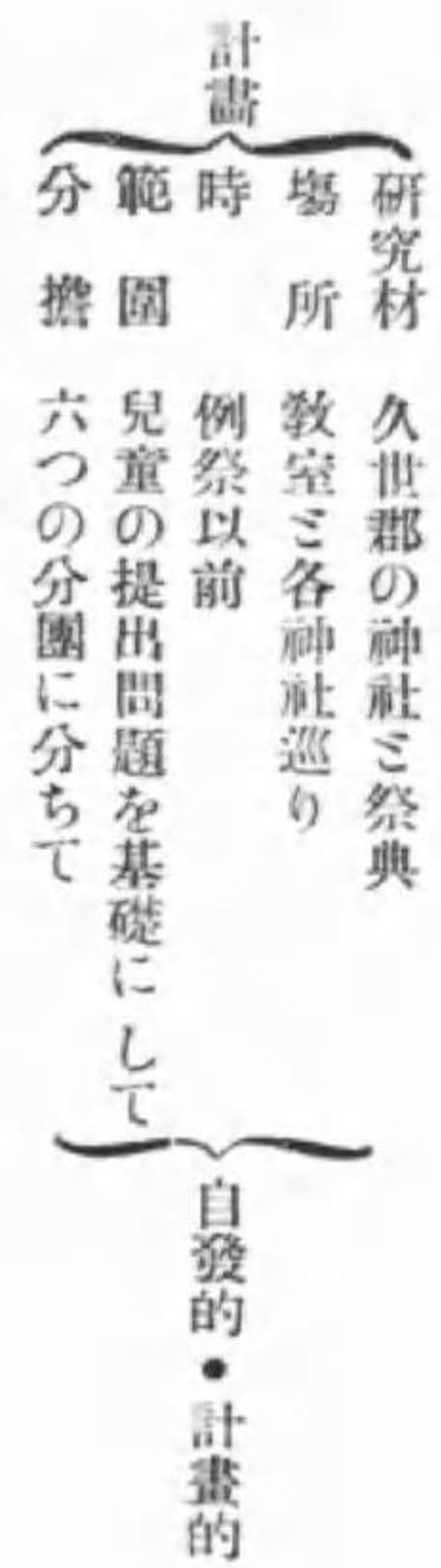
ろついでゐる様な状態であるが、これではいけない。今こそ第一部の



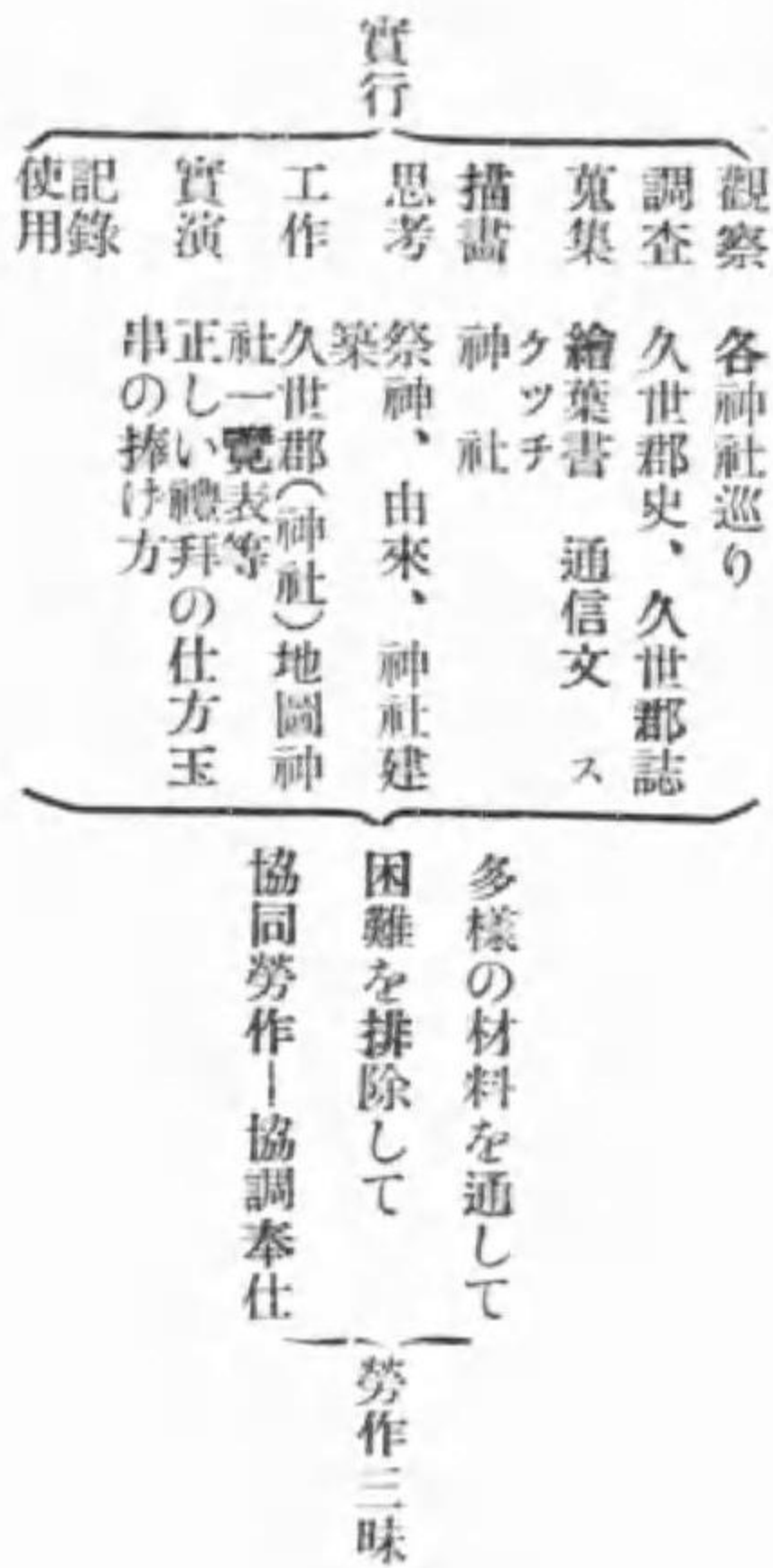
### 第四章 郷土公民科指導の實際

#### 第一節 郷土公民科の指導過程

尋五以上公民教育教材の指導過程  
筆者高試擔任の故を以て、不適當ではあるが高試に取扱つた教材を  
かり指導過程を述べる。  
1、學習價值を自覺させて

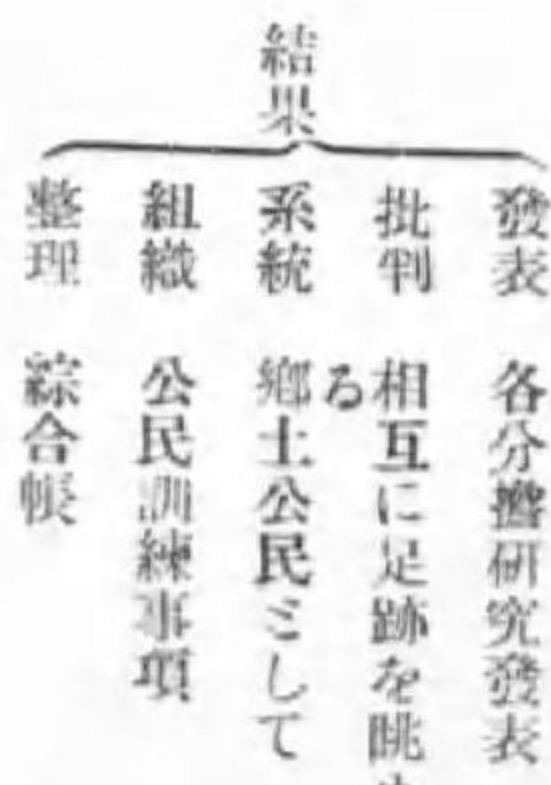


2、研究への進取的努力的態度



3、反省と組織へ

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
八	魚類、蛙類、水棲昆蟲採集	暑中休暇中の學習の一部として、興味と理解を興へる。そのために、採集物の採集し、その採集物を學校に保存し、その採集物を陳列して、其の勞働を彰顯してやる。(社會)	尋五讀九、尋四讀九、尋五讀九、尋四讀九、尋五讀九、尋四讀九、尋五讀九、尋四讀九	教室、津川、木川、附近の山
九	村の害虫	出來得る限り多數の害虫を捕らねば、特に木村と關係の害虫を捕らねば、其の形體、生活、繁殖、被害の程度、防除法、被害の状況、(經濟)	尋五讀九、尋四讀九、尋五讀九、尋四讀九、尋五讀九、尋四讀九、尋五讀九、尋四讀九	教室、昆虫掛圖
一	柿の栽培	柿は近時需要著しく増加し、栽培せられるやうになつた。従つて、柿の栽培も大に研究せられ、實用的な方法を招來するだらうといは	尋五讀九、尋四讀九、尋五讀九、尋四讀九、尋五讀九、尋四讀九、尋五讀九、尋四讀九	教室、一二柿の木



- 1、毎日神社佛壇の奉拜
- 2、元朝參、一日十五日
- 3、祭典當日の奉仕高學
- 4、正しい禮拜の仕方
- 5、新年祭、新嘗祭、例祭の代表參拜
- 6、學校園生產品の献上
- 7、入學、卒業奉告祭
- 8、入退營兵奉告祭
- 9、一日祭日前の清掃奉仕

#### 第二節 指導要目

1 尋五郷土公民科指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
八	私の家(歴史)	比較的等閑にされてゐる我が家の歴史を調べ、祖先の榮光と子孫尊重とが、一貫してある事を知らしめる。(政治)	尋五讀九、尋四讀九、尋五讀九、尋四讀九	家庭
七	物價調査	種々の物の價格を調査せしめ、その歴史的、數學的考察をなす。(經濟)	尋五讀九、尋四讀九	教室、表物價一覽
四	村の生産	生産品に對して、村の過去の變化と種類を調査し、その發展と我々の奮闘改良工夫にまで致らしめる。(經濟)	尋三讀九、尋四讀九	寺田村とその附近

#### 2 尋六郷土公民科指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
一	村の産業と農會	習してゐる。故に、漁法を習はせ、農産加工の芽を培養せしめ、(經濟)	尋五讀九、尋四讀九	農會、農會組合と組合
四	郷土史年表	郷土の歴史を研究して、其の認識を深め、郷土史年表を作らせ、郷土の發展の簡明に授けたい。(社會)	尋五讀九、尋四讀九	教室、久世郡史、久世郡史、カラフ用紙、松・杉の標
八	私の家(構造)	課期休暇の研究問題として、來得る限り、經濟的、生活的に、即ち、住宅を、更に、建築に、興味を向上させたい。(經濟)	尋五讀九、尋四讀九	教室、我家の掃除、我が國の木村、三二枚貝
九	村の警備	我々が安んじて生活し得るに、裏に警備の必要を知らしめ、警備の意義を知らしめ、當るべき公民意識を知らしめ、養成するものである。(社會)	尋五讀九、尋四讀九	教室、警察と國民







不健康さに喘いで居る。先導者は村の功勞者西村丈三郎氏。貴重な半日を割いて私達の爲にわざ／＼道案内の勞を勤めて下さるのだ。漸くの事で蒸される様な砂塵の業苦から逃れて山の入口に差かゝる。ホシノリ櫻色に薄色に薄化粧したであらう背の邊りがしつこり當つて氣味悪くシャツがからだにへばり着く。日に焼けたゴロ／＼の小石や砂を踏んで道は愈々急傾斜になつた植林地の入口に入る。雨水が深く兩側の地肌を食ひこんで洗ひさらされた骨の様に尖つた岩角がよきで現れてゐる。雑木雜草は思ふ様跳梁してゐるし、それに尙悪い事には「さる／＼いばら」言ふ奴が遠慮もなく道の真中に立はだかつて吾々の一行をさへぎる。未踏の境を探る言ふ愛すべき大きな好奇心も許しの障礙に、こもすれば他愛もなく萎縮してしまひさうになる。虎穴に入らずんば虎兇を得ず矣。吾々は須張らしい勇猛心を奮つてしやにむに猪突する。

正に午後の三時。五月末の陽光が、青黒くくろづんだ嫩葉を照らして、讀本の言草ではないがシャツも緑色。顔も緑色。それから後は唯赤土と小石と茨と其の間をうねつてゐる細い山道がある許り。何時の間にか青空も太陽もすつかり隠れて氣むつかしい憂うつな沈黙の中を泳ぐ様にして進んで行く。三十分後突如私達は須てきな峰の頂に立つて居る。右手の方は何の秩序も統一もない無愛想な山、山が南北に疾走して遙かの雲に消え、直く脚下から千仞の谷底まで一直線に延びた山肌には緑の嫩葉に交つて眞赤なつゞじが所々に燃えてゐる。薄暗い／＼つた／＼い密林を通り抜けて來た後の此の頂上の眺めは全快した様な爽かさである。しかし此所を通過する道は再び矮樹の密林に入らうるさく顔にからみつく蜘蛛の糸を拂ひのけ、拂ひのけ、茨で手足を傷けながら進んで行くのだが、さうした事が、汗がすつかり、引こんでしまつてゐる。ころんだり、滑つたりして、三十分も歩いたと思ふ頃突然前に進んでゐた一群からワーツ言ふ喊聲。

「ヤア、來た。く。」「ドコダ。」静寂な山氣が不意の闖入者の聲響にかき亂されて、一瞬の中に修羅場になつたやう。誰の面上にも俄に血の氣がさつさつとして勢ひ込む。愈々來たぞ、ス／＼／＼生ひ立つ何萬本もも數知れぬ檜の木立ち。手を取り腕を組合つた様に重なり重つた枝葉がすつかり日の光を遮つて一錢銅貨程の光もこぼれてゐない遠からず六月だと言ふのにシャツ一枚のからだには寒氣がヒシ／＼こ迫つて、目に見えない生靈がそつこつせすじから這ひ込んだやう。潺湲たる一筋の山川が遠く頂の方から落ちて來て幽鬼の忍び音を漏してゐる。世の俗塵を遠く離れて骨にしみ入る様な靈氣を呼吸した私達は、何とも云ひ難い一種の崇嚴な敬虔な心持ちに打たれざるを得なかつた氣早な連中は早や小蟹の生捕りに忙しい。これから小憩の後植林地の誕生に就いて、西村氏のお話を聞く。

谷川を挟んで、西村氏は一際高い巖上に突つ立たれる。六十の坂に手が届かうと言ふ瘦身の氏は頭髮既に霜白何處か仙客の風貌がある。六十名の兒童は嚴肅な雰圍氣に包まれて恐ろしい程の沈黙が続く。氏は徐ろに口を開かれる。

「今から五六十年も昔は、此の邊一帯は濕氣の多い一面の蒲原で、一般にガヤ谷と呼ばれてゐました。所がそれを開拓して今見る様な立派な植林地とされたのは、主として戸山寅吉翁の力でありました。」さう言つて氏は戸山翁の生ひ立ちについて話される。「翁は子供の時から大變敬神の念が厚く毎年一回は必ず大峰山に參詣されるのが例でした。植林地計畫の動機も實に此の參詣の賜だつたと言はれます。所がたま／＼日清戦争が勃發して、其の結果遂に日本の大勝利となつたので戰捷記念事業として時の村長奥村吉松氏に謀り、村會議員の決議を経て毎年五千本の植林をなすことになりました。現在では坪數七十町歩本數實に十萬本に及び其の中大なるものは幹の周りが四尺にも達して

「見渡す限りスク／＼生ひ立つ木、木。それから氏は産業道路の設置、販路収入高等に就いて説明され最後に翁の識見の高邁なりし現れさして三尺苗代を創始せられた事を説き、かうした翁の遺徳を偲ぶために村民の間に翁の銅像建立の案が熾んである事を以て結ばれた。何時の間にか夕暮れの色が四邊に漂つて峰の木々はすつかり紫色に塗りつぶされてゐる。

かうした感激を基として兒童は綴方を綴り、地圖を描き更に植林の一斑に就いて學ぶのである。

### 3、高一産業組合 (訓導 畑中 二郎)

現今の經濟界に在つては、概して大資本を以て大規模に行ふのが有利である。それは生産費を省き、生産効果を大にすることが出来るからである。従つて小資本を以て小規模の事業を行ふ者は、漸次競争に敗北して、其の經濟的獨立を失ふことを免れない。必ず多數者が集つて共同組織を作り、共同的に資本の融通も行ひ、生産販賣の業務もなるべく共同して行ふことを工夫しなくてはならない。此に於て生れたのが産業組合である。

即ち、十九世紀の中頃獨逸に於て發生し、其の成績が良好である爲各國に普及し、我國にても明治の半頃、既に此の制度を輸入したが、明治三十二年産業組合法が制定せられるに及んで、制度の上にも整備することになった。

尤も我國にも久しい以前より此の種のもののはあつた。即ち、二宮尊徳先生の報徳社の如きはそれであつた。

産業組合法に於て組合といふのは、

「産業組合トハ、組合員ノ産業又ハ、其ノ經濟ノ發達ヲ企圖スル爲左ノ目的ヲ以テ設立セル社團法人ヲ云フ。

一、組合員ニ産業ニ必要ナル資金ヲ貸付シ、及貯金ノ便ヲ得シムルコ

#### ト(信用組合)

二、組合員ノ生産シタルモノニ加工シ、又ハ加工セズシテ之ヲ賣却スルコト、(販賣組合)

三、産業又ハ經濟ニ必要ナル物ヲ買入レ之ニ加工シ、若ハ加工セズシテ、又ハ之ヲ生産シテ組合員ニ賣却スルコト、(購買組合)

四、組合員ヲシテ産業又ハ經濟ニ必要ナル設備ヲ利用セシムルコト(利用組合)

の四種である。尙其の組織上、有限、無限、保證責任の三種に分つことが出来る。

此の産業組合が保證責任寺田信用販賣購買利用組合として、我が寺田村に設立されたのは、明治四十年七月五日で、現在出支總高二十三萬圓を以て盛んに活動を續けてゐる、今其の活動を表に依つて見るに

貸付金	村	七〇、〇〇〇圓
貯金	高	一三〇、〇〇〇圓
販賣金	高	一一八、七四九圓三九
購買物仕入高	高	三三三、一五八圓六八
買入又は賣却金高	高	三五、七四六圓六三
現れてゐる。		

最近農村の自力更生がやかましく云はれてゐる。今更他人より兎や角云はれなくとも、農村それ自體の自覺に依つて、當然我等の農村更生に邁進すべきである。殊に我村は恵れた位置にあり、最近の交通の發達により、益々有利な農業經營をなし得るやうになつた。斯く見れば、産業組合が、郷土の産業助成機關として、今後の活躍大いに期待すべきものがある。

寺田人の自覺によつて生れた此の組合に、兒童は日常相當關心を持つてゐる。こ、云ふよりは、一種云ひ知れぬ親しみを感ぜ、深い信頼

の念を抱いてゐるのではないかと思ふ。自分達の學用品は殆んど總べて組合より購入してゐるのである。靴も傘も、其の他身に着けてゐる雜貨類までもがさうである。農園で、學級園で採れた葱や大根を、「市場へ」云つて持つて行く彼等の顔は何時も朗らかである。

綜合科の時間！それは彼等の最も楽しい時間であるやうに思はれる。其の教材は總べて彼等の身邊にある最も近きものであり、親しみ深いものばかりである。彼等の隣の輝くのも尤もなことであらう。

産業組合研究の時間、それを教室に書かれてある綜合科教材一覽表によつて知つてゐる彼等は、殆んど定款を持つてゐたり、尋ねたりしてノートを一頁もしてゐる。産業組合の由來を知り、使命を學び、其の組織、現況を研究した彼等は、次の勞作、産業組合一覽表の作成に取りかゝるのである。今までは漠然たる親しみより持つて居らなかつた彼等は、其の内容の明らかになるにつれ、興味も自覺に依る勞作を續ける。各々手分けして其の表現の方法を考へ、學級に發表して此れを選び、各分團に分れて、四組合の組織現況を書き入れて行く、模造紙上を靜かに動く充分に墨を含んだ筆の毛先に、彼等は聲なく吸ひ附けられてゐる。今彼等三十數名の精神は、一目的達成に統一されてゐるのだ。仕上つた時、ホット一息入れた彼等の面には、何れも歡喜の色が溢れてゐる。出來上つた表を、ちつと見詰めた時、彼等の頭の一隅には、其の將來を見決めなければならぬといふ閃き、我等の今後さるべき態度、が浮んで來る。之を彼等は文章化し級友に發表する。種々意見も出る。斯くして種々意見を交へた彼等は一の正しき彼等の歩むべき道を知るのである。

第四節 學習指導案

1 第六 日光寫眞の製作 (指導者 齋藤 實)

日時 昭和十年一月二十九日 火曜日 (第三時限)

教材 日光寫眞の製作

教材觀

一、客觀的研究

A、主材料藥品に就いて

1、枸橼酸鐵アムモニウム

1、赤褐色透明の小さい葉片狀結晶。

2、アムモニヤ水に枸橼酸を溶解する時に生ず。

3、潮解性を有す、水によく溶けアルコールには溶けない。

4、醫藥としては緩やかな鐵劑で貧血症に廣く用ひらる。

ロ、赤血鹽(フェリシアン化カリウム)

1、赤色不定形結晶。

2、黄血鹽(フェロシアン化カリウム)に鹽素を通ずるを得らる。

3、シアン化第二鐵シアン化カリウムの錯塩である。

4、顔料として用ひられる。

B、藥品の化學作用に就いて

枸橼酸鐵アムモニウム(第二鐵鹽)鐵が三價に働くと鐵鹽)

日光に觸れて還元作用→第一鐵鹽(鐵が二價に働く鐵鹽)

→第一鐵鹽に合つて

赤血鹽(フェリシアン化カリウム)→ターニアル青

(フェリシアン鐵)

濃青色不溶性沈澱

C、補助材料に就いて

1、陽畫紙(感光紙)——主材料混合液を模造紙に塗りたるもの

ロ、陰畫紙(種紙)——セルファン又は硫酸紙に思ひの繪字を

書く。

ハ、焼付額——ボール紙をガラス使用にて作る。

ニ、稀硫酸——焼付後使用(現像液)にす。

D、其の他の日光寫眞(青寫眞)製法

1、稀硫酸第二鐵カリウムを水に溶かしてこれを塗り感光紙を作る

日光に還元され炭酸ガスを發して稀硫酸第一鐵カリウムを稀

酸カリウムに分解する。焼付後鹽化白金の溶液に浸す。黒

紫色を表して美しく出来る。

ロ、右の焼付後赤血鹽に浸す。ターニアル青の不溶性沈澱を

作りこれにも出来る。

ハ、枸橼酸と赤血鹽の混合液にて感光紙を造る外に枸橼酸溶液

のみにて感光紙を作り赤血鹽液にて現像する方法もある。

E、日光寫眞(青寫眞)の利用

青寫眞法として一般的に使用されるもので特に土木建築及び機

械類の製圖用として廣く應用されてゐる。又玩具として子供等

の遊び友達として愛用されてゐるものである。

二、主觀的研究

A、日光寫眞と兒童

日光寫眞は兒童の生活に特に深い關係を有する教材であるだけに興味と歡喜を以て研究すると思ふ。感光紙が日光に觸れ少し變色すれば風を引いたといひ陽畫紙(感光紙)のこゝを種紙、陰畫紙のこゝを油紙と云ふ等は兒童の理科生活そのものである。特別な化學變化の理は知らずとも、感光紙の取扱ひ焼付の方法等は充分理解してゐると思ふ。(私の子供時代を省みて)

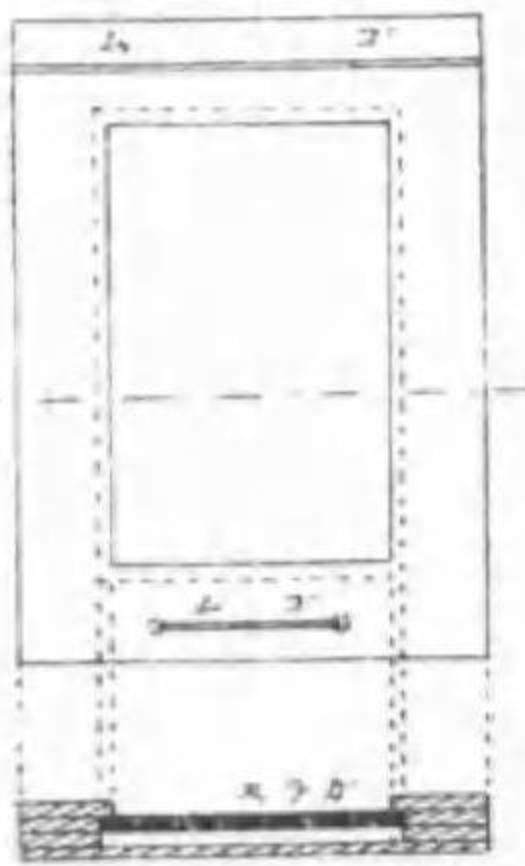
B、製作

1、陽畫紙(感光紙)……暗室にて

枸橼酸鐵アムモニウム……一〇%水溶液

赤血鹽……一〇%水溶液

等量混合液を洋紙に塗りて暗室にて乾かす、洋紙は模造紙が一番よい、筆又は綿にて一面に一回だけ塗る(兒童は之を種紙と誤唱す)



暗室といつても作業が出来なければならぬから一〇燭光位の電光が必要である。

ロ、陰畫紙(種紙)セルファン、又は硫酸紙の様な透明な紙に墨で思ひの字又は繪を書きよく乾かす。(兒童は之を油紙と云ふ)字は右字そのまゝではつきり書かねばならぬ。

ハ、焼付額

二十四番ボール紙にて葉書大又は二分の一大に次の圖の如く製作す。補助材料としてガラスゴム紐等。

ガラスは教室の破れで廢物とされるガラスを利用す。

ニ、焼付法

日光の直射する場所を選び材料を取まこめる、

先づ第一に額縁の裏面をはずしガラスの上に陰畫紙陽畫紙の順に裏向に伏せる。裏板を當てゴムにて留め直射日光に當て

約三分間焼く、表面からでも變色するのが分る、順を違へず速かに操作することが大切である。

(日光の直射しない時は長く焼けばよいが結果はよくない。)

ホ、現像……水を必要とす

焼付けた陽畫紙を取り出し速かに水中に浸しよく洗ふ約一分間(焼けない部分の白色が鮮明になるまで)これを取り出し

(稀硫酸液中に浸せばよい結果が得らる)

日光の當らない所で乾かせば濃青色の部分と白色の部分と

が鮮明に表はれ實に見事に出来上る。

C、日光寫眞製作と關聯教材

尋六綜 私の家(構造)

同 理 光、酸類及アルカリ類

同 圖 圖案

同 手 厚紙細工

D、學級の現狀

兒童數男子三十五名、本科の指導に際しては分團的取扱ひをなす場合が多いので身長順に七名一分團として研究させてゐる。本教材は特に親しんで研究すると思ふ。

しかし疑問をこまでも解決しようとする熱心さが無い。

三、主眼(綜合的研究)

化學藥品を使用して青寫眞の製作をなさしめ工作を通じて化學變化の奇妙なるを知らしめると共に興味と歡喜に浸らしめ理科生活に親しむ心を養ふのである。

區分及指導場所

第一時 焼付額製作……………手工教室

第二時 同續き、陰畫紙の製作……………學級教室

第三時 感光紙(陽畫紙)製作と藥品に就いて……………理科教室

第四時 焼付及現像と共に理、青寫眞の利用(本時)……………運動場北面

備

二十四號厚紙、ゴム紐、糊、ガラス及ガラス切、セルファン又ハ硫酸紙、藥品(クエン酸鐵アムモニウム、赤血鹽)センチグラス、模造紙、畫紙、綿、(陰畫紙、陽畫紙、焼付額)水の入れたバケツ、焼付したる陽畫紙(建築設計圖、手工製作圖其他)陰畫紙、小黑板、其の他。

指導過程

一、自覺による自發

①目的指示

②準備物整理

各人、各分團 焼付額、陰、陽畫紙、水。

二、勞作三昧……………(發問應答)

①焼付額説明

額縁裏向→上へ  
陰畫紙裏向→上へ  
陽畫紙裏向→押板ゴム留め→日光

②漸時觀察——さうなつて行くか。

③焼ける理

枸橼酸鐵アムモニウム——日光の爲還元(變化)——第二鐵鹽。

第一鐵鹽  
赤血鹽——第二鐵鹽(變化しない) 第一鐵鹽——タンブル青

が出来る。

④現像——(水洗ひ)

⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㊷ ㊸ ㊹ ㊺

㊸ ㊹ ㊺

㊹ ㊺

㊺

2 高貳 久世郡の神社と祭典 (指導者 種村 喜雄)

日時 昭和九年十月十九日金曜日第二時限

教材 久世郡の神社と祭典

要旨 「荒野拓きて村を起し、祖先の遺業多かる中に先づこそ仰け村の鎮め、齋きまつれる鎮守の宮居」

總ての營みは神によつて統一せられてゐる。この神を齋き祀る郡内神社の祭神・由緒・沿革等をしらべ、これ等産土神へ感謝の祈りを捧げ、祖先を尊ぶと共に、子孫を愛護し彌進みに進み、彌榮えに榮えんことを願ひするこの感恩・報謝の誠こそ祭祀の根本義であり日本民族の根本精神であり、國民道徳の根幹であることを明かにしたい。

教材観

(一)内面化

1、久世郡神社一覽表(省略)

久世郡史より

2、神社

a、神社の定義

神社とは皇祖・皇宗の御神靈を始めし、皇國の建國の大業に携り又皇室及び國家・地方に功績のあつた人々を公けに祀る特定の設備である。

b、敬神觀念の機能上より觀たる神社

- 1、日本國民の道徳的信念を基礎としてゐる。
- 2、日本民族の宗教的信仰の對象である。
- 3、日本人の生活意識の表現である。
- 4、我が郷土觀念の中心である。

5、建國以來日本の政治と密接の關係を保つてゐる。

6、歴史と習慣とを尊重する。

c、實質上より觀たる神社

1、帝國の神祇を奉齋すること。

2、公に祭典を執行すること。

3、公衆参拜の用に供すること。

d、形式上より觀たる神社

1、社殿を具へること。

2、境内地を備へること。

e、法律上より觀たる神社

1、公の營造物たること。

2、法人なること。

3、敬神の觀念

敬神の觀念は本來吾々日本人に内在する、最も重要な精神上の働きで、我が國體と共に悠久の古まで其の源流を遡らしめ得らるゝのである。古代の人々はその日常生活に於て、信仰の標的として崇拜する靈的實在を認識し、之を稱して神といつた。古人の信じた神の内容は頗る廣汎で、其の種類も亦多岐多様に互つて居つた。随つてその間に上下尊卑又は善惡正邪の階級的若しくは道徳的區別を附し、而して此等八百萬神を大別して高天原に現れた古い神々を天神とし、其の後國土に現れた比較的新しい神々を地祇と稱して居た。是等天神地祇には廣く一般的に崇拜せらるゝもの、部分的崇拜の對象となつたもの、我が郷土に於ては、又之を奉祀する形式に於ても必ずしも一樣であつたものはな

ひ得られない。  
かくて歴史時代に入つてからは、我國の社會組織の基礎が、同一祖先から分れた氏族團體即ち氏族であつた。氏族が擧つて信仰を集めて居た氏族神が、八百萬神々の中の中心的勢力を占め、歴史上に於ける神々の崇敬事蹟の大勢を形造る大きい力となつた。即ち皇室に於ては、祖先の神にまします天照大神を祭祀せられ、臣下に於ては、神代以來の名門中臣氏即ち後の藤原氏は祖先の天兒屋根命を祀り、之に並ぶ忌部氏は太玉命を祀つて屋た如く、夫々の氏に於て其の氏神を奉齋し其氏の守護神とした。随つてその祭祀に當つては、氏上が氏人を率ゐるて之に當りその祭祀は何よりも重大視して、こゝに擧族奉齋の誠意を披瀝したものである。されば氏神の崇敬は、氏族が社會に處する上に於ての指導精神の淵源でその氏神の威光は其氏族全般に及んだのである。かくて其後神祇崇敬の事蹟は神々を奉齋した處の神社を中心として行はれ、それが國家の政治・經濟或は宗教藝術等の各方面に提携交渉し一つの社會現象を形造り史上に脈々たる活動の跡を留めるに至つた。

4、神社ニ國民道德

我が國民道德は神社の奉祀から流れ出て居るものこそ考へるべきが出来る。

- a、報本反始  
天照大神が皇孫に神鏡を御授けになるまきの神勅が、神社を祭る典禮の淵源となつた。然して此の國家の典禮は國家組織の根源であり、あらゆる人生社會の基調を爲すもので、神勅に基き報本反始の誠を致すのが即ち禮の本源である。されば神社崇敬といふことによつて始めて禮が徹底することになる
- b、孝道の根本

- a、皇祖皇宗の祭祀  
1、伊勢神宮 明治神宮  
2、水度神社 天照大神  
宇治土神社 應神帝仁德帝 等
- b、元始諸神  
1、伊弉諾神社  
2、白山神社 伊弉諾尊  
日原神社 高皇神皇産靈神 等
- c、氏祖神  
1、春日神社

我が國民道德に重きを爲す孝は神社崇敬に於て徹底する。即ち神社に於て祖先の神々を奉祀し、祖先の過去に於ける活動を追想し、祖先の遺志を奉じ、其の理想を實現せんことを祈る。こゝに孝道の神髓に觸れる所以がある。

c、愛國心の淵源  
神社は其の地方の過去を語り歴史を示すものであるが、此の過去や歴史を知ることは同時に愛郷心を養成することになる國家を愛するといふことはこれを知ることが前提である。此の意味から神社は愛郷心、愛國心養成の淵源である。

d、心の淨化  
神社は神聖な場所、こゝに参拜する者の心は淨化せられる。「何事のおはしますかは知らねども辱けなきに涙こぼる、」國民精神の養成國民精神の作興は神社崇敬によつてよく徹底せられる。一村一郷は其の地方に在る神社を中心として精神的に統一されて居る。殖民地に於ける神社建立は日本人としての精神と神社との密接不離の關係を物語る。

- 2、水主神社 天火明命 等
- d、建國以來功勞ありし諸神

- 1、靖國神社
- 2、久世神社 日本武尊  
宇治神社 菟道稚郎子尊  
荒見神社 饒速日尊 等

e、其の他諸神

- 1、龍田神社
- 2、櫻井月神社水主
- 6、祭祀神社の主體は祭神である。而して神社の機能は祭祀である。然らば祭祀とは如何。祭祀とはマツリといふことである。マツリとは

- 1、請待(マツ)の義
  - 2、服從(マツラフ)の義
  - 3、奉獻(タテマツル)の義
- 此の三說中一の待つ義が有力説である。待つは主客相對する義で此の待つ意からマツリの語に轉り活用したものである。所謂神人合一の状態を云ふのである。又同じ待つ義に説くも請待の義で神を請待して其の恩顧に報ゆるためである。と説く者この二説あり。

- 奉齋……機能……内容
  - 祭典……儀式……形式
  - 祭禮……趣味……風俗
- 祭禮 氏子全部一郷一村擧げて祝ひ奉る神人和樂の祭禮こそは祭祀の意義を徹底させるものである。

7、神社祭祀の特質

我が國體も我が文化も歴史も神社も、之が本質となり根底となるものは、(やまこころ日本精神の奥底にあるもの)である。

やまこころは

- 1、神々しさ……永遠性
- 2、懐かしさ……統一性——日本民族性
- 3、清々しさ……純真性

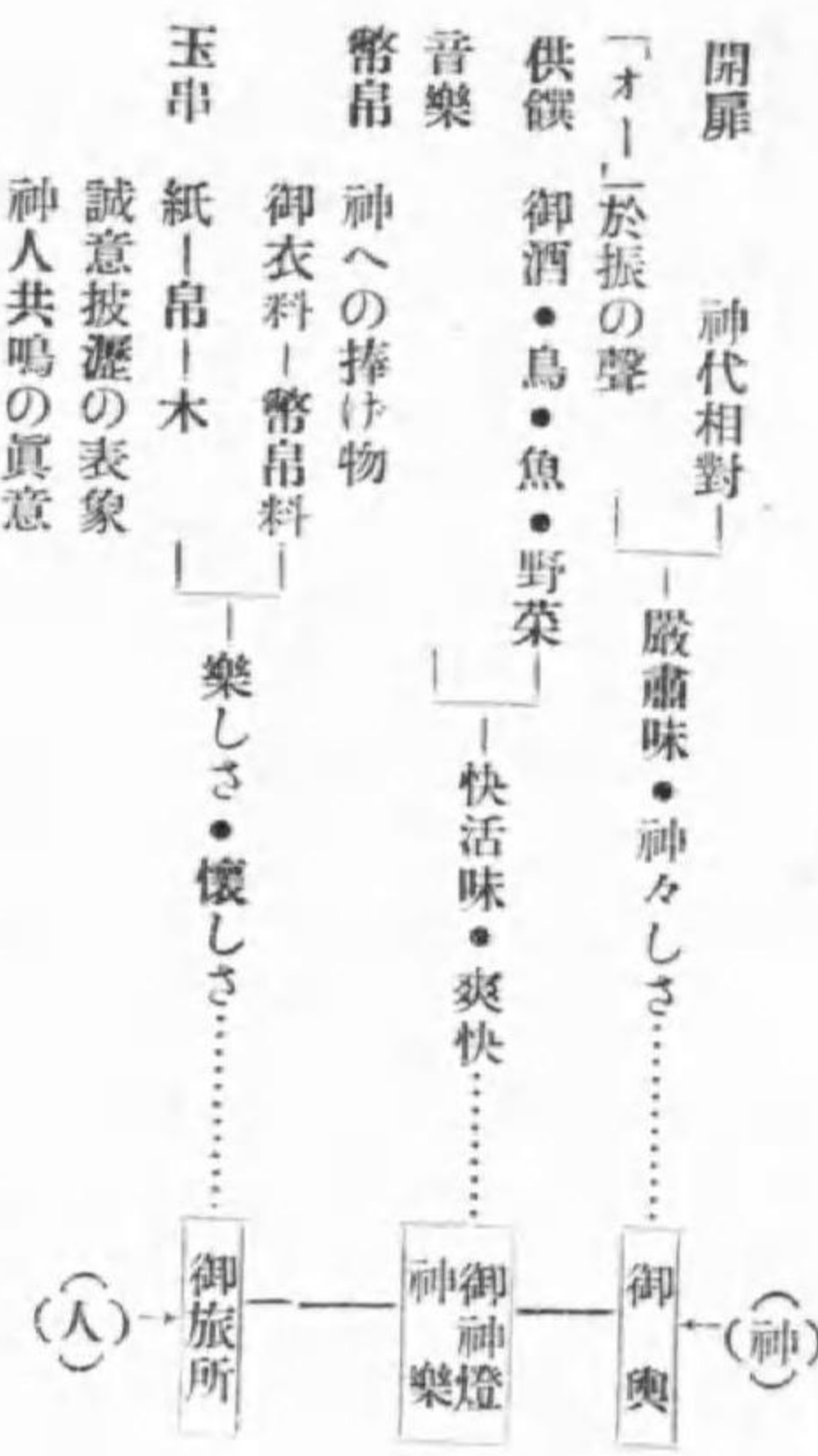
日本人の好んで口にする氣持は

- 1、神々しさ——晴れやか
- 2、懐かしさ——朗らか
- 3、清々しさ——爽やか



- 8、用語を通じて
  - 皇室の御政治 敬神愛民
  - 國民の忠誠 敬神尊皇
  - 國民道德基調 敬神愛國敬神崇祖
  - 對外來文化 敬神尚武
  - 日本武士道 敬神愛郷
  - 郷土觀念の根柢 敬神明倫
  - 明治初年生活 敬神勤勞
  - 昨今國情
- 正に敬神觀念の廣さミ力強さミを知るに十分である。之は敬神といふ日本人の心持に日本民族の生活を統一し、又指導する性質





皇室の無窮  
祝詞 國民の平安  
祈願、奉告、感謝

4、祭祀の精神  
「神々しさ」 嚴肅味・正しさ  
「清々しさ」 嚴肅味・正しさ  
「懐かしさ」 快活味・明るさ  
「祭祀」

5、他村の祭禮の有様―交換文  
6 整理―訓練へ系統

附録 1、 國定教科書に現れたる公民教材一覽表(別紙)  
2、 兒童の生活環境と訓練方針

學期	點 力 努	眼 目
學校社會及國家的行事	小 學 校 教 育	強壯で、誠實な、そして奉仕力と貫徹力とに充てる善良有爲な寺田人を養成する爲め、あらゆる教育手段と適切に講ずる
	青 年 教 育	理想郷寺田へ
兒童の生活環境	全人勞作の教育を 一、協調して明かに生活するよう 二、興味を以て進んで學習するよう 三、自主的に工夫創作するよう 四、深い反省に立つて自己の責任を完全に貫徹するよう	全人教育を 一、標準農家經營 二、追進館教育 三、實際的教育の遂行 四、自治活動の遂行
訓練目標		一、協調奉仕 二、進取斷行 三、反省貫徹
訓練方案		
訓練要目		

讀	修	讀	修	讀	修	讀	修	讀	修	讀	修	讀	修	讀	修	讀	修
四	三	三	二	四	二	四	二	四	二	四	二	四	二	四	二	四	二
一	三	二	二	一	二	一	二	一	二	一	二	一	二	一	二	一	二
三	二	一	一	二	一	一	一	二	一	一	一	二	一	一	一	二	一
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六	九	三	一	五	七	九	一	二	一	二	一	二	一	二	一	二	一
カ	キ	シ	セ	サ	イ	モ	ノ	カ	キ	シ	セ	サ	イ	モ	ノ	カ	キ
ラ	シ	ハ	キ	カ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ
ス	シ	ハ	キ	カ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ
ヨ	シ	ハ	キ	カ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ
イ	シ	ハ	キ	カ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ
ソ	シ	ハ	キ	カ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ
ノ	シ	ハ	キ	カ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ	カ	ケ	ラ	シ	ハ	キ





學								
月 六			月 五			月 四		
下	中	上	下	中	上	下	中	上
奉仕日	時の記念日(10) 託児所開始 作業日	自治會作業日 蠶虫採集 △シ齒豫防(4) 端午の節句(5) 縣祭(5)	奉仕日 海軍記念日(25) 植公祭(25) 兒童愛護デー(27)	非常時訓練 作業日	自治會 級訓制定掲出 作業日	結核豫防デー 天長節(29) 奉仕日	各町出張保護者會 教育後援會總會 作業日	始業式、入學式、奉告祭 作業日 神武天皇祭(3) 開校記念日(3) 職員任命式(6) 自治會
が先の金魚かな (雪女)	水無月 清水の坂のぼり行 く日傘かな(子規) 買ひ足していづれ	卯月 敷島の大和心を人 間は朝日に匂ふ 山櫻花 (五長)	草月 草の花に目高むれ 居る小川かな (一谷) 懐しき幼き頃のそ のまゝに五月の空 に鯉泳ぎをり (義雄)	花から若葉へ 八十八夜 茶摘み 鯉織立つ 草花の種まき わらび狩り おたまじやくし 杜鵑の初音	百花開く 摘草によし 播種 爽かな感覺 朗らかな精神 五月人形賣出し 月末より蛙鳴き初む 花吹雪	學習訓練 勉學・規律・忍耐 協同・健康・勤勉	儀式訓練 尊星・敬虔・規律 協同	學習態度 1、學習問答の訓練 2、學用具・學用品使用 豫習・復習の訓練 協力學習の訓練 天長節儀式訓練
夏至 青葉集め	山野新緑 入梅 雷 雲の峯 田植 帽子に日覆 さくろ、桐の花	衛生訓練 衛生— 協同 勇正 忍規 同法 氣信 耐律	勇氣訓練 勇氣—元 協同 義着 氣氣	衛生訓練 衛生— 協同 勇正 忍規 同法 氣信 耐律	勇氣訓練 勇氣—元 協同 義着 氣氣	學習中の勇氣訓練 運動に對する勇氣訓練 公衆に對する勇氣訓練 間に對する勇氣訓練 邪に對する勇氣訓練	衛生訓練 衛生— 協同 勇正 忍規 同法 氣信 耐律	食事の衛生訓練 齒磨訓練 △シ齒豫防デー 身體的清潔訓練 清掃訓練 トラホーム治療 姿勢の矯正

期 學								
月 二 十			月 一 十			月 十		
下	中	上	下	中	上	下	中	上
お火賣(31) 餅持(30) 砂持(29) 大天祭(28) 休中心得(27) 學藝式(24) 奉仕日(23) 義士會(14) 針供養(8) 秋しまひ(5)	自治會 作業日	新嘗祭(23) 除隊日(30)	世界大戦平和克復記念日(11) 農産物品評會 託児所開設	国民精神作興讀書下賜記念日(10) 世界大戦平和克復記念日(11) 農産物品評會 託児所開設	自治會作業日 健康兒童表彰 旅行 国民精神作興讀書下賜記念日(10) 世界大戦平和克復記念日(11) 農産物品評會 託児所開設	靖國神社祭(23) 奉仕日 教育勸諭下賜記念日(30) 遠足	壬午月(13) 神嘗祭(17) 作業日	水主神社祭典(2) 水主神社祭典(3) 自治會 戊申讀書下賜記念日(13) 大運動會(15) 壬午月(13) 神嘗祭(17) 作業日
師 走 遠くより笛なが くくとひびかせて 汽車今とある森林 に入る (啄木) なつかしき冬の朝 かな湯をのめば湯 気柔かに顔にかゝ れり (啄木)	霜 月 丸木橋わたれば瀧 の紅葉かな(松濤) 枯枝に鳥のとまり けり秋の暮(芭蕉)	神無月 柿の實の色づく 鳴くなり秋の山里 (明憲皇太后) 刈りあげし田面は 廣くなり(水)	霜 月 丸木橋わたれば瀧 の紅葉かな(松濤) 枯枝に鳥のとまり けり秋の暮(芭蕉)	霜 月 丸木橋わたれば瀧 の紅葉かな(松濤) 枯枝に鳥のとまり けり秋の暮(芭蕉)	霜 月 丸木橋わたれば瀧 の紅葉かな(松濤) 枯枝に鳥のとまり けり秋の暮(芭蕉)	神無月 柿の實の色づく 鳴くなり秋の山里 高くなり(水)	神無月 柿の實の色づく 鳴くなり秋の山里 高くなり(水)	神無月 柿の實の色づく 鳴くなり秋の山里 高くなり(水)
除夜の鐘	霜柱立つ 商家大賣出し 山茶花の紅白 南天の實紅し 年賀状	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍
協倫遵公禮忠信 同約法正儀實義	生活端正訓練 誠實 協倫遵公禮忠信 同約法正儀實義	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣
自治生活反省 校内規律訓練 週訓の訓練 清潔整頓訓練	自治生活反省 校内規律訓練 週訓の訓練 清潔整頓訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練

期								
月 九			月 八			月 七		
下	中	上	下	中	上	下	中	上
お火賣(31) 餅持(30) 砂持(29) 大天祭(28) 休中心得(27) 學藝式(24) 奉仕日(23) 義士會(14) 針供養(8) 秋しまひ(5)	自治會 作業日	新嘗祭(23) 除隊日(30)	世界大戦平和克復記念日(11) 農産物品評會 託児所開設	国民精神作興讀書下賜記念日(10) 世界大戦平和克復記念日(11) 農産物品評會 託児所開設	自治會作業日 健康兒童表彰 旅行 国民精神作興讀書下賜記念日(10) 世界大戦平和克復記念日(11) 農産物品評會 託児所開設	靖國神社祭(23) 奉仕日 教育勸諭下賜記念日(30) 遠足	壬午月(13) 神嘗祭(17) 作業日	水主神社祭典(2) 水主神社祭典(3) 自治會 戊申讀書下賜記念日(13) 大運動會(15) 壬午月(13) 神嘗祭(17) 作業日
師 走 遠くより笛なが くくとひびかせて 汽車今とある森林 に入る (啄木) なつかしき冬の朝 かな湯をのめば湯 気柔かに顔にかゝ れり (啄木)	霜 月 丸木橋わたれば瀧 の紅葉かな(松濤) 枯枝に鳥のとまり けり秋の暮(芭蕉)	神無月 柿の實の色づく 鳴くなり秋の山里 高くなり(水)	霜 月 丸木橋わたれば瀧 の紅葉かな(松濤) 枯枝に鳥のとまり けり秋の暮(芭蕉)	霜 月 丸木橋わたれば瀧 の紅葉かな(松濤) 枯枝に鳥のとまり けり秋の暮(芭蕉)	霜 月 丸木橋わたれば瀧 の紅葉かな(松濤) 枯枝に鳥のとまり けり秋の暮(芭蕉)	神無月 柿の實の色づく 鳴くなり秋の山里 高くなり(水)	神無月 柿の實の色づく 鳴くなり秋の山里 高くなり(水)	神無月 柿の實の色づく 鳴くなり秋の山里 高くなり(水)
除夜の鐘	霜柱立つ 商家大賣出し 山茶花の紅白 南天の實紅し 年賀状	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍	夕陽立 水鏡砲 水竹桃の紅 あちさいの藍
協倫遵公禮忠信 同約法正儀實義	生活端正訓練 誠實 協倫遵公禮忠信 同約法正儀實義	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣	規律訓練 協運克勤忍勇 同法己勉耐氣
自治生活反省 校内規律訓練 週訓の訓練 清潔整頓訓練	自治生活反省 校内規律訓練 週訓の訓練 清潔整頓訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練	登、降校時間の訓練 一定作業の完行訓練 起床、就寝時刻の訓練 整理、整頓の訓練

期 學 三						
月 三		月 二		月 一		
下	中	上	下	中	上	上
卒業報告会(24) ひまわり(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)
卒業報告会(24) ひまわり(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)
卒業報告会(24) ひまわり(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)
卒業報告会(24) ひまわり(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)
卒業報告会(24) ひまわり(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)
卒業報告会(24) ひまわり(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)	卒業式 卒業報告会(24)

週 中 行 事

曜 日	月	火	水	木	金	土	日
團 體 日	健 康 日	修 養 日	衛 生 日	學 習 日	反 省 日	家 庭 日	家 庭 日
本 週 的 約 束 事	體 操	合 同 修 身	眼 疾 生 治 療 查	學 習 發 表 會	約 束 反 省	兒 童 實 踐	兒 童 實 踐
吉 村 調 導	齋 藤 調 導	今 西 校 長	櫻 調 導	森 調 導	種 村 調 導	種 村 調 導	種 村 調 導

力一ばいきめてゆく、といてゆく、ねつてゆく、やつてゆく、あつてゆく

月 中 行 事

旬	上	中	下
行 事	神 社 祭 典	自 治 會 議	奉 業 日
指 導 要 項	敬 神 崇 祖、感 謝 祈 念、各 部 團 體 的 自 治、共 勞 協 調	小 運 動 會、步 行 練 習、體 操 技 術、級 級 技 術 練 習	各 學 年 生 産 園、裝 飾 園、鳩 舎 鷄 舎

3、引用並參考書目

- 橋本秀一稿 綜合科教育の實際
- 木村正義著 公民教育
- 廣瀬嘉雄著 公民教育の根本問題
- 關口泰著 公民教育の話
- 岡篤郎著 公民教育講話
- 春山作樹著 公民教育(教育科學 1)
- 淺賀辰次郎著 小學校に於ける公民教育
- 堀之内恒夫著 小學校に於ける公民教育
- 菊谷悌太郎著 小學校に於ける日本公民教育
- 文部省 公民教育資料集成
- 小西重直著 勞作教育
- 西治公著 勞作教育の新機構
- 山崎力之介著 小學校訓練の實際
- 野瀬寛著 精神日本の建設
- 東郷實著 修身教育
- 松本浩記主筆 教育問題教育研究
- 雜誌 小學校

特設綜合科  
に於ける

園藝・飼育・工作教育の實際

## 第一章 園藝、飼育教育の基礎、

### 第一節 土による人間教育

農は國の大本なり、こは我國民の信條である。決して農民の爲の我田引水論ではない。

「人は土より出で、土に歸る者なり、人は土の兒なり、土を離れたる生活は人をして柔弱ならしめ、人をして輕薄ならしめ、人をして危険ならしむ。苟も國民の剛健忠勇なる要素を求めん、欲す世界列國何れの處にか農村を除外して他に之を求めんや」こは蘇峰徳富先生の言葉である。

今や農村問題は重大な國家的問題となつてゐる。兒童はやがて此の疲弊せる農村に入つて一家を經營し一郷を背負ひ、社會の一員として大日本帝國臣民の一人として、天壤無窮の皇運を扶翼し奉らなければならぬのである。

これを想ふ時、農村小學校教育の使命も亦重大で我々農村教育者の農村教育の使命を再考察して見る必要のあることを痛感する者である。

従來の農村教育は徒らに概念の注入教育で劃一主義による都市教育の模倣に走り、その個性の發揮を等閑視し、農村独自の使命を忘れ、眞に土に親しみ土に生きんとする一貫した教育理想が忘れられて居たのではないかと思はれるのである。

眞の農村教育は單なる農業的な知識技能の問題ではない。實に土による精神の教育であり、土による實踐の教育である。健全なる皇國農民としての魂の教育と同時に實踐力の教育でなければならぬのである。

然して我が郷土、寺田村は農村である。故に土を離れての寺田村の教育はない。寺田村の教育から土の教育を取り去るならばそれは魂の

なくなつた形骸に等しいのである。

寺田村の爲に眞に強力に働き得る寺田村民を陶冶せん、欲する教育は即ち日本帝國の爲に眞に強力に働き得る日本國民を陶冶せん、欲する教育であることを信じてゐる。

本校が土による人間教育を實踐する精神も亦こゝにあるのである。

△土を離れし教育は世に惡魔を作つて共々に争はしめ暗き墮落の

地獄へ導く破滅の門なり。

△土に即せる教育は世に神々を作つて共々に榮えしめ光き幸福の

樂土へ導く彌榮の門なり。

(吉地昌一)

### 第二節 勞作による人間教育

勞作は勤勞して創作することであり、肉體と精神とを結合統一する作用である。

故に勞作による教育は勞作を中心として兒童の全人格を陶冶せん、とするものである。而して勞作を以て教育の方法手段とするのみならず又目的根底を考へるのである。即ち勞作は教育の方法原理であり、又同時に目的原理である。

教育的勞作は

- 1、目的々な自發活動であり、
- 2、精神的筋肉運動であり、
- 3、構成的生産活動であり、
- 4、作爲體驗であり、
- 5、職業的勤勞であり、
- 6、社會的協同である。

昔から我國では學問することを「修行」といふ言葉で表してゐるが

勞作教育の精神はこれ甚だよく似よつた何物かを持つてゐるに信じてゐる。

彼の明治維新に参劇した多くの偉人傑士を生むた吉田松陰先生の松下村塾の教育、あの火の出るやうな全生活の鍛練の修行、全機會の修練、一即全の把握、徹底せる行的認識——そこに今日の教育のねらふ何物かと暗示されてゐるのではなからうか。師弟相同行、時に峻烈なる叱咤、時に相抱擁して哀樂を共にしつゝ、飽くまで力の限り精進する姿こそ眞の勞作の姿である。

我々は徒らに教科書の注人にのみ離齎することなく、郷土寺田の生活事實を中心とする勞作に依つてよき寺田人、よき日本人たるの教育實踐に邁進しつゝあるのである。

「此の世界が薄つべらな人間で満されてゐるのは、我々の少年時代を其の本然の生活たる勤勞から引離して觀念的な書物にばかり親ませやうといふ眞に愚な、反自然的な教育の當然の歸結である。」  
——ベスタロツチ——

## 第二章 園藝、飼育教育の目的、

### 第一節 園藝教育の目的

○園藝勞作を課することは栽培法を會得させる目的を持つことは勿論である、けれども他の一面に於て勞作の過程に、勞作するそのことに價値を認めるのである。農作物に於て、花卉に於て、其れ等の生命の發展に限りなき希望と愉悅を感じつゝ或は培ひ或は施肥を行ふ時の心境は全く無我である。藝術品製作に於ける陶酔の境地そのものである。毎日の課業の餘暇を求めてこつた體驗を重ねさせることは情操の啓培に極めて價値あるばかりでなく、高尚なる趣味の養成に資することが出来ると思ふ。

○「居は氣を移す」言はれてゐる。誠に我々は我々の生活の周圍に

顔にも關心を持ち、一つかみの油粕をも菊の元にそつと埋めてくれる主婦であつてほしい。

本校が裝飾園藝の實踐に特に女子に重點をおくのも此の精神にならぬ。

### 第二節 飼育教育の目的

本校は動物飼育について凡そ次の數種の教育的價値を認めてゐるものである。

○兒童の世界は小動物と甚だ關係が深い。彼等は可憐な同僚として兎を見、雞を慈むと共に一方には家鴨を無理に走らせて腰を抜かせて痛快がる一面をも持つものである。故に吾々は兒童の同情本能に培つて殘忍性の矯正につとめねばならぬ。小動物を「自分達のもの」として飼養させることはこの點に大きな意義を持つと信じる。赤十字精神の萌芽の培養としても充分の價値を考へさせられる。

○日常のよい中庭の一隅に兎が午睡し、小鳥舎の中に鳩がグーグーと飛び廻つて居る光景はまことに伸びやかなもので、平和其のものであると言ひ度い。六ヶ敷い算術で疲れた頭を醫するに十分の効果のあるものであると言はねばならぬ。

まことに小動物は環境整理の最も適當なる施設とも言ふべきである。日々成長して行く小兎に興味を感じ、毎日の産卵の數に興味を覺える其の心境は一種の藝術的態度そのものと言へる。尙進んで生命の尊貴に目醒め、生命の神秘に觸れることが出来るならば所謂宗教的情操の啓培に役立つと言ひ得るのである。

○兒童の勞作が生産的實用的に意義づけられる爲には動物飼育の如きは最もふさわしい施設であると言はねばならぬ。養雞、養兎等による勞作はその過程并に其の結果に於て農業趣味の涵養、實踐力の習練に大なる効果を齎すものと言ふべきである。

○動物飼育は實際に於て當番制を採用することに於てこれは協同勞

ある凡てのものより善に於て、惡に於て、不斷影響されてゐるのである。兒童が晝間の大部分を過す學校が常に美化されてゐることが望ましいのは一つはこゝに根柢があると思ふ。校地の一隅の空地を利用して可憐な草花を栽培すること——事は極めて小さなことであるが——考へ方に依つてはこれだけ多く兒童の學習環境に潤を與へることであらう。優雅な感情を陶冶する上に多大の寄與するものであらう。こゝは疑ふべくもないと思ふ。

○教育を將來の生活準備のみ考へることは妥當でないことは勿論であるけれども、最近の傾向としては教育内容に實用的要素の加へらるゝこととが要求が相當盛んであるのではないかと考へられる。又高等小學校に於ては明かに斯の如き方向に進むべきことを國家は要求してゐると思ふ。

而し本校は蔬菜栽培の方法をのみ知らせやうとするのではない。又花卉園藝が相當有望視されてゐるから言つてこれ亦栽培法をのみ教へやうといふのではない。

今日の農村に、農家に缺乏し勝ちであるのは「潤ひ」である。物質的にも精神的にも荒み切つてゐる。人情は輕薄となり、四隣相聚ふ古よりの所謂「部落的美風」は今や全く地を拂つて人は全く利己的に懊惱し焦燥するのみである。而して今日かゝる状態を救ふ方法としては物質的方面のみが論議さるゝに止まつて居るがこれは甚だ片手落ちであつて今日の農家は物質的に如何に豊かになつても決して救はれるものではない。農家を於て昔の「潤ひ」に返らせやうとするにはさうしても一面豊かな感情を注入せねばならぬ。物質的に餘裕を與へるに共に精神的な餘裕を與へねばならぬ。

而して家庭に於ける「潤ひ」の源泉は主婦を於て他に求むべきもない。女子は家庭の感情生活の中心である。家事に、裁縫に、育児に於ては田園に忙しい女子ではあるが寸暇を盗んで畠の隅の一本の朝

作の一つの型であつて、彼等の協同意識を涵養し、共同生活體の一成員たるの責務を自覺せしむる一つの機會である。公民教育上からも價値大なりと言ふべしである。

## 第三章 園藝・飼育・教育の材料

### 第一節 改訂せられたる園藝教育の新系統

#### 1 生産園藝系統

學年	系	統
第一	京菜	收種 南小豆
第二	十日根	播種 ねぎ
第三	大根	播種 移種
第四	なす	移種 馬鈴薯
第五	きうり	播種 まくわ大豆
第六	ななし	播種 へちまさつまいも
第七	ななし	播種 宮重
第八	大根	播種 ちしや
第九	大根	播種

#### 2 裝飾園藝系統

學年	系	統
第一	朝顔	百日草
第二	リツブ	菊
第三	柳	挿木
第四	水仙	挿木
第五	だりや	挿木
第六	松	挿木
第七	石竹	挿木
第八	オラスカンナ	挿木
第九	ツユリ	挿木
第十	ツユリ	挿木

第二節 新設せられたる飼育系統

學年	飼育動物
尋三	鳩
尋四	雞
尋五男	兎
尋五女	兎
尋六男	兎
尋六女	兎
高男	牛、家鴨、鶯鳥
高女	雞

尋一から實施致し度いのであるが現在に於ては右の系統である。近く小鳥の様なものでも飼育せしめるか鳩でも分家せしめ度いと思つてゐる。

第三節 教材選擇・排列の標準

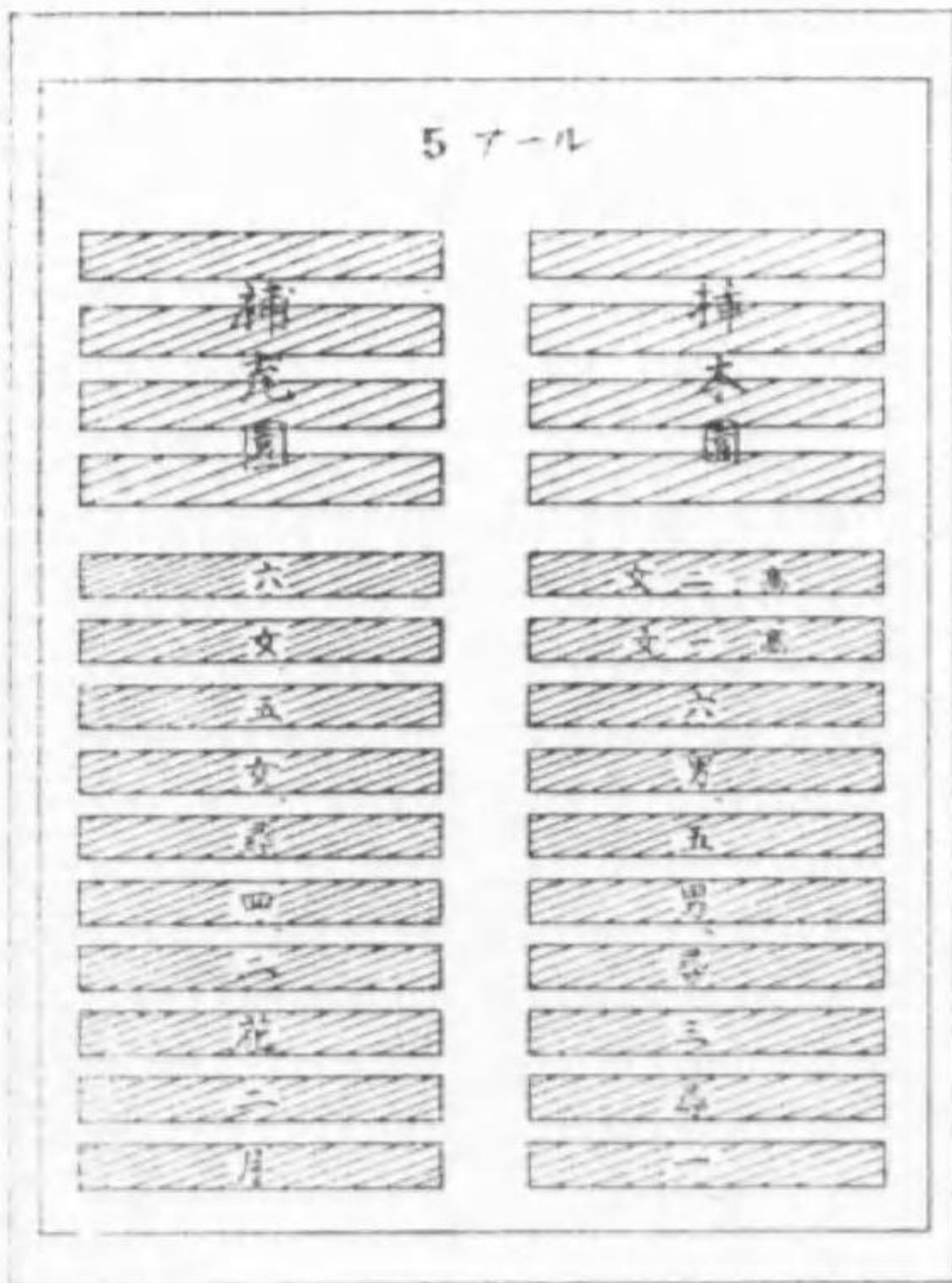
- 1、教材選擇の標準
  - イ、形態生態、栽培法に於て基本的、模式的なるもの。
  - ロ、他教科との連絡あるもの。
  - ハ、栽培の容易なるもの。
  - ニ、經費の比較的かゝらぬもの。
  - ホ、兒童の興味多きもの。
  - ヘ、輪作上都合よろしきもの。
  - ト、農産加工に適切なるもの。
- 2、教材排列の標準
  - イ、他教科との聯絡をはかること。
  - ロ、農産加工を考慮すること。

- ハ、兒童の興味を中心とすること。
- ニ、園藝園を遊ばさざる様考慮あること。
- ホ、兒童の負擔を考慮すること。

第四章 園藝・飼育教育の方法

第一節 園藝園の經營

1、園藝園の經營  
 本校は尋一から實施してゐるのであるが、子供には作物愛、それ以外何の慾望もない。實に神の姿と見えるのである。これを思ふ時、尋常科の園藝は眞に興味にはじまり、趣味に終るものだと思ふ。それが物質で置換へることの出来ない最大の收穫だと思ふ。初聲を擧げてから僅かに三ヶ年、昨年十二月に村當局の御努力によつて約五アールの廣い場所を得たので先生も子供も勇氣百倍、直ち生産園藝園







に深耕整地を終へて各級に配當したのである。配當されるが早い移植のきくものは早速移植された。寒い風も、臭い肥も我が寺田の子供には問題ではなかつた。かくして伸びて行く美しい無垢な、純真な姿を眺める時、獨り喜悅のほゝ笑みで力強い信念を覺えるのである。

## 2、園藝園の配置圖

### 第二節 藥草園の經營

藥用植物の研究は最近旺盛になつて來た觀があるが本校に於ては郷土に産する藥用植物園を設置してゐるのである。

1、藥草は兒童の興味を引き易い。一つの植物が藥用になることを知り、その植物の名を知るに至れば次々他の藥草類を知りたがるものである。これは進んでは植物全體への關心を深める機縁となり得るものであると思ふ。花が美しいとか(裝飾園藝類の如く)何にかに利用出来るとか(工藝植物藥用植物の如く)いふものは先づ最初に兒童の親しむ所のものであらうと思ふ。

2、利用厚生を養ひ天然の遺訓に注目する爲の一つの資料として充分である。

3、兒童の知識を豊富にするばかりでなく、間接に郷土一般へよい影響を與へ得ると思ふ。

藥草の内、名は分つて居るが實物知らぬもの、實物は見てゐるが名が分らなかつたもの、等が往々あるがこうした點に藥用植物園は幾分の貢獻をなし得ると思ふ。

本校に於てはかゝる意圖のもとにその設置の歩を進めつゝあるのであるが一通り蒐集するには今後相當の時日を要することと思ふ。

郷土藥草園栽培植物  
スヒカヅラ(スヒカヅラ科)

オホバコ(オホバコ科) クコ(ナス科)  
ウツボ草(唇形科) カントリサウ(唇形科) イチヤクサウ(イチヤクサウ科)  
オトギリサウ(オトギリサウ科)  
ゲンノシヨウコ(フウロサウ科)  
カハラケツノイ(マメ科) ハコベ(ナデシコ科) キノコヅチ(ヒユ科)  
ドクダミ(ハンゲセウ科) ジヤノヒダ(ユリ科)  
カラスビシヤク(デンナンシヤウ科)  
ヨモギ(キク科) カハラヨモギ(キク科)  
スカンボ(タデ科) イタドリ(タデ科)  
クララ(マメ科) チガヤ(禾本科)  
ヤマゴボウ(ヤマゴボウ科)

### 第三節 動物飼育の經營

管理は一日交代の當番制であつて學級擔任の指導によるのである。

○尋四の雞飼育に於て飼料は購入しなければならぬが卵を賣却してその金で購入するといふ自給自足經營をこつてゐるのである。

○尋五六年の兎の飼育は飼料に於て經費を要しないから容易である。發育が非常に早いから楽しみがあるばかりでなく頭数を増加させることに於ても早いので飼育趣味は大である。

○高等科の經營は農業科教員の指導のもとに主として飼育技能の練磨と情操陶冶に努めて居るのであるが村經濟よりはなれた自給自足の獨立經濟によつてゐるのである。

○尋三、鳩の飼育に於ては之亦餘り飼料を要しない爲高等科の方より配給を受けてゐるのである。

尙指導上留意すべき點は

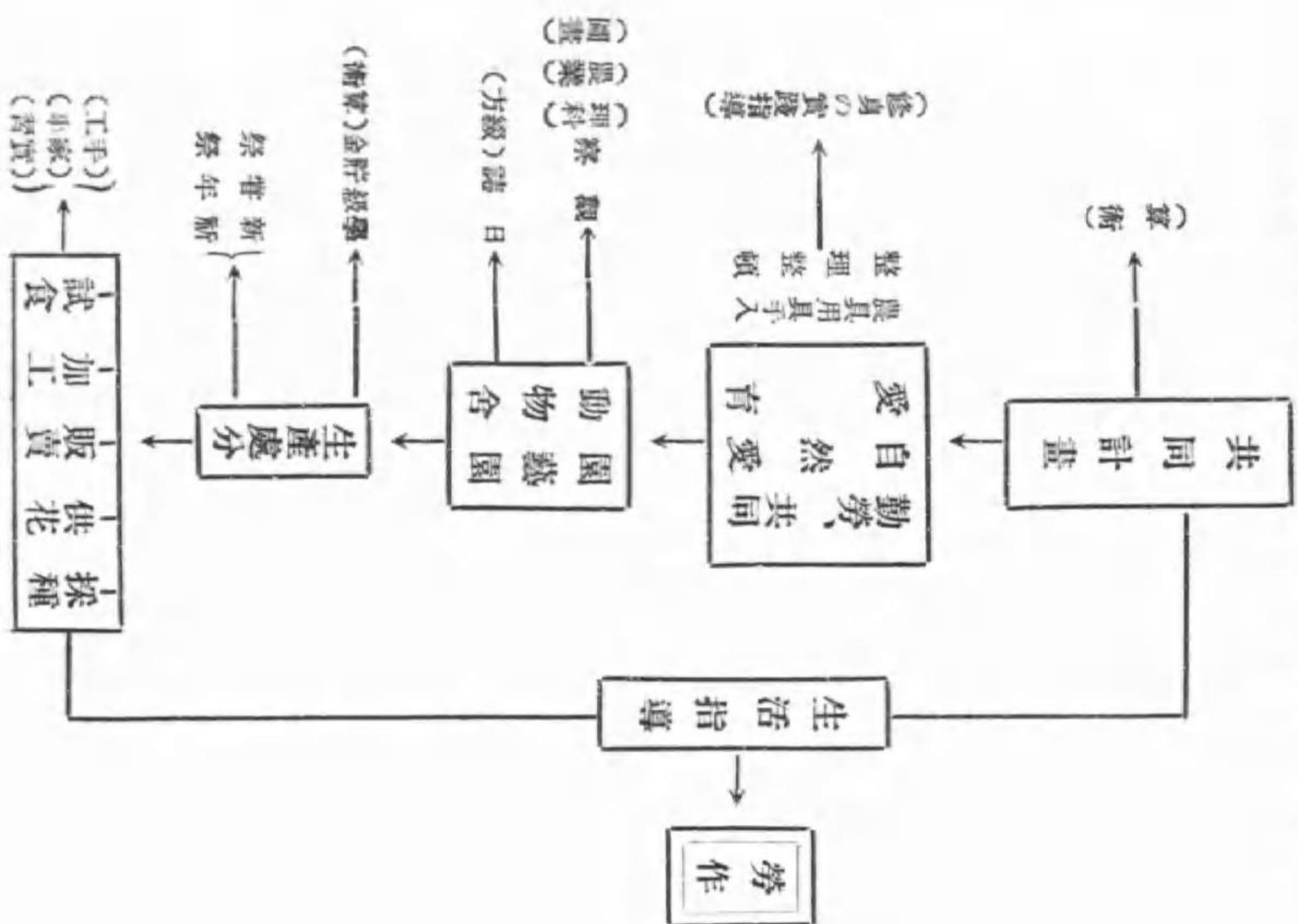
イ、日誌を必ず記入せしめて檢閲し常に情操陶冶に注意を拂ふこと。

ロ、畜舎の清潔整頓には特に留意すること。

ハ、飼料の過不足に注意し經濟的に飼育せしめること。

ニ、其他絶えず畜舎を巡視して教育的に指導すること。

第四節 園藝・飼育教育の指導の具體的體系



第五章 園藝・飼育教育指導實際

第一節 園藝教育指導要目

(1) 第一生産園藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
六	二十日ダイコン	二十日大根の種子を園藝園に播種して、その成長を日々観察させ、自然に對する興味を養ひたい。	高四綜	生産園藝園
九	カブラ	「カブラ」の種子を播種して、その成長を観察させ、不思議な土の力に感ぜしめると共に、土に對する感謝の心持を養ひたい。	高四理	生産園藝園
十一	ソラマメ	「ソラマメ」の種子を播種して、その成長を日々観察させ、園藝趣味を養ひたい。	高四綜	生産園藝園

(2) 第二生産園藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
四	なんきん豆	豆科の一年生草本である落花生を學級園に栽培し、其の成長を観察させて園藝趣味を養ひたい。	高四綜	學級園

(3) 第三生産園藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
五	なんば	兒童の生活を親しみ深いこの文化財を、學級園に移植させ、みどりの秋までもや来るべき春までも、生活を交感させ、兒童自らの生活を深め、進展させたい。	高四綜	學級園
一	えんどう	畑をつくり、種をまいてその發育状況を観察せしめ、その偉大なる力を感得させた。	高四綜	學級園

(4) 第四生産園藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
五	ねぎ	生産園藝の一としてねぎを移植せしめ、收穫にいたる迄観察や作業をなすしめ、農業趣味を養ひたい。	高四理	生産園藝園
九	なぶらな	理科教材である「あぶらな」を栽培させ、その生、形態の繼續的な研究をさせたい。	高四理	生産園藝園
五	かぼちや	生産園藝の一としてかぼちやを移植せしめ、收穫にいたるまで、形態を観察させ、栽培趣味を味はしめたい。	高四理	生産園藝園

(5) 尋五生産園藝指導要目

Table with 5 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Objective), 結合聯絡教材 (Integrated Curriculum), 指導場所 (Instructional Location). Topics include 花おしろい, 二 夢, 九 體菜, 四 まくわ.

(7) 高一女生産園藝指導要目

Table with 5 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Objective), 結合聯絡教材 (Integrated Curriculum), 指導場所 (Instructional Location). Topics include 二 王ぢしゃ, 九 大根, 五 トマト, 四 へちま.

(6) 尋六生産園藝指導要目

Table with 5 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Objective), 結合聯絡教材 (Integrated Curriculum), 指導場所 (Instructional Location). Topics include 五 大豆の播種, 四 のいちじく挿木.

(8) 高二女生産園藝指導要目

Table with 5 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Objective), 結合聯絡教材 (Integrated Curriculum), 指導場所 (Instructional Location). Topics include 一 夢, 五 さつまいも.

(3) 尋三裝飾園藝指導要目

Table with 5 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Objective), 結合聯絡教材 (Integrated Curriculum), 指導場所 (Instructional Location). Topics include 九 松蟲草, 六 菊(さしき), 五 参日草, 三 ぼうせんくわ(上).

(1) 尋一裝飾園藝指導要目

Table with 5 columns: 月 (Month), 題目 (Topic), 要旨 (Objective), 結合聯絡教材 (Integrated Curriculum), 指導場所 (Instructional Location). Topics include 四 アサガホ, 十 ツブエーリ.

(2) 尋二裝飾園藝指導要目

4 尋四裝飾園藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
一	水仙	水仙の球根を學級園に植付させて門花まで栽培させることにより、勤勞の美德及園藝趣味を養ひ度い。	高三年級	裝飾園藝園
三	けいとう	裝飾園藝材料としてけいとうの播種を行はせ、定植手入を指導することによつて勤勞の美德と園藝趣味を養ふ。	高四年級	裝飾園藝園

5 尋五裝飾園藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
三	まさき木	挿木する種類によつて、その方法と時期について、その研究し、兼ねて注意方を養ひ。	高三年級	挿木園
五	ダリヤ	球根植物は花を愛する者にとつて最も親しみの多い美しいものである。此の栽培の興味と園藝趣味を養ふ。	高四年級	裝飾園藝園
九	スイートピー	「花を愛する者に悪人なし」とまでいはれてゐる。園地を耕し、かねて計置した種子を下したものが伸び、愉快に實に自然の力が伸び、歩でこの味を生きて行く第一歩で、この崇高な靈感を體驗させるために之を栽培するのである。	高五年級	教室 裝飾園藝園

6 尋六裝飾園藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
五	松杉の播	松、杉を播種して其の發芽状態を観察せしめて種子の成り、自然物觀賞の態度を養ふ。	高五年級	五たねの發 我國の木 挿木園
六	セラニウ	セラニウの挿木栽培して其の生育の妙味を樂しませ、開花の美しい豊饒に悦びを感ぜしめ、崇高なる靈感を獲得させ、自然と人との第一歩を養ひたい。	高六年級	挿木園
九	三色すみ	草花の一種として三色すみを作らしめ草花に對する興味と園藝愛好の精神を養ふ。	高一年級	石竹 裝飾園藝園

7 高女一裝飾園藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
四	グラチオ	花卉園藝として華やかなグラチオの香に接し、視しめ生活味豊かな人間の養成に資したい。	高一年級	裝飾園藝園
九	石竹	花卉園藝の人として石竹を「作り土に親しむと共に園藝に興味をもたしめたい。」	高二年級	石竹種、挿木園

8 高二女裝飾園藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
二	りんどう	昨日山野草栽培の流行する時、我が園の周りにあるりんどうのうきくを學園に移し、園藝趣味を養成する分と共に山草の宿る古雅な氣味は、せたい。	高二年級	裝飾園藝園
四	カンナ	華華科に屬する球根植物として、廣く愛用されるカンナを植付けるやがて結ぶ花と球根への明るい希望に生かす。	高一年級	裝飾園藝園
一〇	チューリップ	春咲く球根類中最も麗麗とされ、植付るチュリップの栽培法を知らしめ、春を共に、チュリップの春として待たしめ度い。	高一年級	裝飾園藝園

第二節 體驗記錄

1. 園藝指導の體驗記錄

4. 學級園の誕生

(調導 竹村繁野)

「先生、此の細い所も掘つたら僕らの畑が出来ると思ふがな。」  
 「かたいでせう。見てごらん、この小石の多いこゝを。」  
 「先生、石は拾つたらよろしい。」  
 「先生、僕拾ひます。」  
 「でもなか／＼です。かたい／＼。君らの力では出来ない。」  
 「いや先生、しませう。え、先生。」

私は黙つて笑つてゐた。かうした堅い土を——なき考へてゐた。

しきり三子供がせがむ。

「先生、鋏を借して下さい。」

「え、かして下さい。」

「そんな所に鋏は立たない。」

私は言つてのけた。その時一人、

「先生、先生は、何でもしたら出来ると言はれたでせう。」

やられた——と思つた。仕方なく

「では、やつてごらん。」

「ハイ」

「ハイ」

の聲が、農具小屋に走る。

代る／＼掘る——額の汗、汗、小さい手は赤く血走る。

いつか私もその仲間の一人になつてゐた。

やがて、淺くも掘返された小石の土地。

小石を拾ふ兒、

土を運ぶ兒の大きい竹かご、

兒らの手は、足は、停止する時がない。

あゝ、私が悪かつた。——生れたこの學園、

雨が降る、雨の中を、花苗植付ける小さい手、

君らの心には、損もない、得もない。

その熱心さ、その心こそ、

ホントに美しい、尊いのだ。

口、兒等をみつめて、

「教育の秘訣は、子供を尊敬するにあり、ゆめ子供の缺點の看破者たる勿れ」  
——エマーソン——

劣等児、優等児の名は誰がつけ初めたか？  
習的に缺けたるこの兒にも、正直で、眞剣に働くこの長所をさうするか。  
習的に長ずるこの兒の人を愚弄するこの行爲をさうしやう。

一寸の虫にも五分の魂、

學業の劣等兒にも並々の喜憂があり、否、それ以上のそれがある。人々から、劣等視せられては、出来る者でも出来なくなる。

優良視せられて努むる者ミ、劣等視せられて、自ら卑下する者ミ、

——此の罪は誰にあるか？

神のつくり給ふた人には、一人々々に、尊い魂が宿つてゐる。此の兒に、この生命を、誰が見出してやつたか、

此の筋肉的勞作に於てのみ見出し得るのでは、なからうか。

世間的に劣等視せられる此の兒の長所を見出し、横暴なる、所謂、優兒の性格を陶冶するもの、私は、土に如くものがない、と思はされた。

指揮する者も、指揮される者もない。只自然の中に、溶込む如くに

黙々として働く隔なきこの美しい魂ミ魂、

私はこの光景の中から、この共働の中から、眞の教育が生れるのではなからうか、と思はされる。

ハ、土に生きる

「先生、面白いこが見つけました。」

「何？」

「朝顔のつるは、みんな、同じ方にまいてゐますね。この木も、この木も、みんな、こう向き（手でかつかうをする）に、巻いてゐるわ僕、面白いと思ひました。」

「こゝだ！と思つた。大きい発見である。左に巻く——約束したが、誰が教へたか、不思議でなくて何であらう。」

自然の神秘！植物の特性！

兒童の觀察眼は開けてゆく。

「茄子に實がなつた。うれしいぞ！」

「先生、僕らが植ゑた百日草につほみが出来ました。」

「僕の組の芋のつるが、大きく伸びました。」

日、一日、伸びゆく草花の姿を、毎日、慈愛ミ歡喜の眼を輝かせながら、見守る兒童の、やがては、この黒い土は、このやはらかな芽を出させ、この花を咲かせる。此の草花を育てる土の力、そこに自然に對する驚異ミ、之を支配し給ふ神を感じるこゝが、出来るであらう。

「茄子に實がなつた。うれしいぞ！」

「先生、僕らが植ゑた百日草につほみが出来ました。」

炎天下に、雜草をこる。土を耕す。地形を整へる。

全身、玉なす汗も氣付かぬかのやうに。土にまみれた小さい手——私はこれを見る時、暑さよりも喜びがある。

おゝその黒い顔のたのしいこを……。

暑さを征服して炎天に働く兒らの前途に、只、默禱を捧げるのである。

働き終つて木陰に入る。そして自分のなした來つた勞作の跡を顧る時何さいふ愉快であらう。何さいふ大安心の境地であらう。

すがすがしく涼風の汗ばんだ肌を吹く心地よき、爽しさの極、涼しさの極。

兒らの眼は、輝きに輝く。思はず感謝の念の湧くのを、おほへるのである。

みんな日和つゞきでも、道端の雜草のしほれる日中でも、學園の草木は、青黒ミ茂り育つ。こゝに兒童の丹誠がある。

一打、又、一打、鎌を振つて土を耕し、心をこめて苗を育ぐむ。

耕すこゝは、單なる耕作ではない。強い意志ミ魂を鍛へ、心を清めるものである。

自分を離れて、自然人に歸る、——神に入るの境、楽しい園藝の時間。

私は、人間教化の源泉は、宗教的陶冶にあるミ信じてゐる。

傾よれる宗教、我利を求める宗教ではない。

自然の中に生きる者としての、自然への感謝であり、神への感謝である。敬虔心である。

人があらゆる方面に於て完全なる人となる爲の唯一の基礎は敬虔心である。

ニ、藝術心の培養

學園に咲き揃つた美しい花、それは、唯單なる裝飾であつてはならない。裝飾せられたる花園の觀賞をもつてのみ、藝術心の培養をこし

てはならない。それは、遊惰の教育である。藝術教育は、美しいものを造り出さんとする勤勞の教育であり、精進の教育でなくてはならぬ。こゝ、私は思つてゐる。

ホ、生産

「先生、市場に人蔘が出ました。僕らも人蔘、賣りませう。」

「兒等の手には、薬把が握られてゐる。成程、人蔘葉のおいしい時季である。」

「さうか。では賣りませう。」

早速たはねられて賣りに出る。幼い賣やさんである。

やがて歸つて來た兒らの口は開いた。

「先生、一把三錢、五把で、三、五、十五錢です。」

喜びにみちみちた兒らの瞳、

この喜びこそ、神への感謝であり、これが、更に研究心となつて來るのである。

「先生、市場に人蔘が出ました。僕らも人蔘、賣りませう。」

「兒等の手には、薬把が握られてゐる。成程、人蔘葉のおいしい時季である。」

「さうか。では賣りませう。」

早速たはねられて賣りに出る。幼い賣やさんである。

やがて歸つて來た兒らの口は開いた。

「先生、一把三錢、五把で、三、五、十五錢です。」

喜びにみちみちた兒らの瞳、

この喜びこそ、神への感謝であり、これが、更に研究心となつて來るのである。

「先生、市場に人蔘が出ました。僕らも人蔘、賣りませう。」

學園は、眞の教育道場として、益々進歩することを、私は希つてゐる。

私は、貧しくも、児童の共勞を、喜ぶものである。  
樂しみは、朝起出でて昨日まで、なかりし花の咲ける見る時。

橋野覽

②、尋三の園藝

(訓導 橋本秀一)

私の學級に於ける筋肉的勞作の足跡を書いて見よう。  
一年生時代―子供の一生の方向は一年生教育によつて決定せらるゝ、  
さまで考へてゐる私は一年生を擔任してほんまに苦勞もしたが又反  
うらしい事もあつた。今の園藝園の生々しい生長こそ私にまつては忘  
れる事の出来ないうれしい事の一つである。

運動場の東端、それはみぞ、そはやはほ、こりの獨占地だつたのだ。  
其處を今の子等と共に切り開いて行つた。何しろ一年生相手の仕事、  
はかきらなかつたが漸く形ばかりの畠が出来た。春はトマト・ナンバ  
の定植をなし、秋には蕪を栽培したのでつた。一人々々名札を立てさ  
せて充分世話をさせた。然し結果はよくなかつたけれどその頃の思ひ  
出は深いものだ。草分けの時代は懐しいものだ。

二年生時代―子供が大分學校にも慣れ、畠にも慣れて来た。今度は  
これを教室の學習分園と同じやうに八つに分けて擔當させた。部落別  
になつてゐるので仲よく共同作業がなされてうれしく思つた。春には  
じやがいも、秋にはえんきう、麥を栽培した。

運動場に大きなぬきこあべまきの木がある。秋の末になる三澤山  
枯葉を恵んでくれる。子等と共に掻き集めては灰にして畠に入れた。  
時にはそのまゝ畠に埋める事もあつた。その頃から子等の態度は目立  
つてよくなつて来た。ほんまに土を愛し得たらさんなに幸福であらう  
と時々思ふ。土こそ我が生みの親であり、育ての親であり又同時に我

行くべき墓場なのである。私は久遠に、あのすつきりとした空にこの  
瑞々しい土を忘れたくない。

三年生時代―二年生の時に播種した麥と豌豆が大きくなつて子等は  
毎朝きつここれを見に行く。豆の手をしてやる時なき、家から竹や藁  
を用意して傍から見ても氣持のいい位眞剣に微笑みながら作業し  
てゐた。晩春の陽を受けるやうな幸福を泌々味つたのである。この  
豌豆と大麦は六月の初旬刈取られて豆は四十一錢、麥は十五錢に販賣  
せられた。雜草の中から否我々の汗が金を産んだのだ。高は餘り問題  
ではない。その過程には金には換算出来ない尊い體驗が嚴然として輝  
いてゐる。今後の教育は、この經濟と生命がガツチリ結び合つた世界  
に展開されるべきものであると思ふ。プロンスキーをけなす勿れである

この收穫後コスモスはなんばが移植せられ、なんばは九月子供の手  
に渡り、コスモスは子供の心のやうに美しく咲き亂れて運動場に遊ぶ  
子等を歡はせた。

ナンバの後へ蕪の播種である。あの九月の風害で少し痛められたが  
子等の情けで充分に成長し、十二月の半には收穫し得らるゝやうにな  
つた。愈々收穫して販賣である。引拔く事から洗ふ事、さてはリヤカ  
ーに積んで販賣に至るまでの作業等、ドン／＼とやつてのける。リヤ  
カーに積まれた蕪を見ては皆意氣衝天である。

「先生行つて来ます。今度は一圓も二圓ももつて来ます」といふ。  
其處で商業道徳を一鎖教へて、心配だつたが販賣に出した。

一時間程経つと空のリヤカーを引張つて、先生！先生！と歡聲を舉  
げて歸つて来る。帳面を出しては何處で賣れた。皆が褒めて下さつた  
等と話をする。一圓七錢の收穫である。子供はほんまに歡喜に燃へて  
ゐた。働かざるものは食ふべからずといふ人生の鐵則もかうした基礎  
體驗を通して味はれるのではなからうか。

今、高菜とかんらんが根ついて、朝きつと尋ねてくれる子等に感謝

を捧げてゐるかの如く生々としてゐる。

日本の進展、日本の教育はこの筋肉的勞作を自覺的に遂行させる時  
全き脚きを出すものではなからうか。

③、尋五の園藝

(訓導 傑 覺雄)

四月下旬に農園〇・五アールが配當されて、いよいよ百姓をやるこ  
こになつた。子等四十名を八組に分けた。

「我が國のハタラクは畑開くより轉訛したものである。此の字義よ  
りする時は、眞のハタラクは田畑を開墾して耕作培養に従事するこ  
とだ」「勞作尊重」……綜合學習の眼目だ。

「勞の字のワ冠(一)は家の廟だ。家の外へ出て頭に火花を散らして  
(炊火)火で火花が散る)力を出すことだ。」

「百姓なるものは神が人間に與へたる唯一の聖業で、農業者は正に  
神の遺業を繼承してゐるものだ。」と説明してやつた。

「ナール程く。」「よし、やらう。やらうよ。」「子等は眞剣。しかし  
さちらも全くの素人だ。頼りにするのは只角田先生と平島先生のみだ

五月十二日 土曜 雨後曇  
擔當園へカボチャ(チリメンシニアマグリ)の定植を行つた。

定植前の諸準備、定植後の仕事等々々、すべて兩先生の指導を煩は  
した事はいふまでもない。

子等は我先に牛舎の中へ飛び込んで、ユゲの立つてゐる牛糞と藁  
をつかんでゐる。

早や、勞働の神聖を體驗してゐる。  
あゝ、美しき子等の姿。

現世のパラダイス・ユートピアの現出だ。  
早や、私は崇高なる靈感にうたれたのであつた。尊い哉勞作の三昧

境。  
「ナニ、六年にまけるものか。」「子等の意氣軒昂。

「さうだ。これからは君等の足跡が一番の肥料だ。しつかりや  
つてくれよ」

「先生々々、要吉のお父さんも、

「世の中は何でも一生けんめいに働く者が勝た。米が出来るのも、  
麥が取れるのも、土こいふありがたいものが、めい／＼の骨折に對し  
て、御はうびを下さるのだ」「いってをられました。」「(讀本巻九  
第十二弟から兄へ)

「全くだ。老農山田利兵衛翁は、「仕事をする時自分の爲め自分の爲  
と思はず、我を忘れてカボチャのため／＼に、一心に可愛がり世話  
をしてやつたら、カボチャは又自分の爲と思はず、主人の爲め／＼と  
思つて、よく肥り澤山の御禮をくれるものだ。」「言つてをられるよ。」「  
眞の人生觀は人ごみの關係のみでは十分に理解する事は出来ぬ。

作物の培養によつて始めて此の人生が判明するのだ。  
「又小林一茶翁も「遠き名所舊蹟より近き田圃の見廻りが飽かず。…  
…書畫の掛物より掛けて見る作物の肥を油断せず」言つてをられ  
るよ。何クソ何クソ、これが第一等の肥料だ。みんなで命の親(作  
物のこ)にねんごろを盡さうよ。」

整技・摘心・摘芽・人工授粉・施肥・敷藁等すべて兩先生から教へ  
てもらつた通りにやつた。互に慣れぬ勞働であるが、誰一人袖手傍觀  
してゐる見はない。葡萄の様な葉、黄色の花、翠の蔓は蜿蜒匍匐して  
ゐる。

六月十八日 月曜 晴  
一少部分野虫瓜蠅に害されたので、夕方平島先生の助力を得て六男

の農園より補植した。  
八時帰宅

撫で、育てりや 格別今朝は  
大きゆなつたよ 僕等のオカボ。

右ミ左のウネ見比べて

作り競べのむつまじさ。

愉絶快絶・綠蔓纏綿・瓜顆拳々又餅々。  
子等の満足を得意、歡喜踊躍それ幾何。  
辛酸艱苦植んで茲に至つたのだ。

七月二十日 月曜 晴

待ちに待つた收穫の日が来た。皆一齊に雀躍した。

「先生々々、僕に賣りにやつて下さい。僕に〜〜。」

希望者満員。決死の志願だ。

「チャンケン、〜。」

切齒扼腕する者。意氣天に冲する兒。すべて眞剣。

忽ち賣切れ。先生々々歡呼の聲。販賣は御客様本位だ。品物を見て御客様から値をつけてもらふのだ。可愛い行商隊を優しい心で迎へてくれる校下の熱援快援振りには感謝せざるにたれない。

かくして丹精の結果得た二圓三十六錢のカボチャ代は學級の半紙に化してしまつた。

やがて第二學期も始つた。昨日の翠色漸く衰へて黄色を呈し、葉凋み萎枯れて孤影蕭寂又落寞。終に今の體榮交替したのである。

農園の勞作は學童一般が大變喜んでやる。優柔不斷の兒も、因循姑息の兒も、優生も進進兒も、只黙々として土に親しみ、強く、まじめに、やりこほしてゐる。

人糞も牛糞も平氣の平左だ。三伏の炎暑を克服して専念業に臨み、熱中事に従つてゐる。

あゝ麗しき勞働遊戯化の此の姿態。

かくして兒童は自己の勞作に對する愉悅を報償を確知し、造化の自然なる成果を小さき胸臆に印し、田園の清く樂しきを自覺し、田園寺田の讚美へミ展開して行く事三信する。

「全力は美である。」確に美だ。咲けるだけ咲いた野菊の美しさ。はちきれさうな南瓜の美しさ。全力を投げ出し、精魂を打ち込んでゐる子等の美しさ。力一パイの現れは人を引きつける。私はすべての學科中兒童と共に農園に立つてゐる時が一番うれしい、一番たのしい。話かきつた何分間、不誠な仕事に没頭してゐる何分間、最高の悦びを感ずる。

「男」さういふ字は、田で力仕事をしてゐるもの、謂だもの。眞の男は百姓だ。

てらす日かけもカボチャのためさ

思や醫さも苦にならぬ。

喜熱

炎帝駐車瑞穂國 田熱如鼎水如湯

此間一粒百千倍 三伏之候不願涼

「作を離れて休養なく、勞作を離れて向上なく又全人なし。」

「勞作の精神を兒に培ふは教師の最大の義務なり。」

附記 家庭一坪農園にも同様にチリメンニアマガリカボチャの栽培をやらした。八月廿三日寺田村農會主催の夏作農産物品評會に出品して

一等一名、二等二名、三等三名を獲得して氣をはいた。

4、零五女の園藝

六月、つゝじの挿木だに楽しんでゐる兒童達、六月には入るなり、

「先生、つゝじの挿木何時するのですか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」

「私にさして下さいませうか」



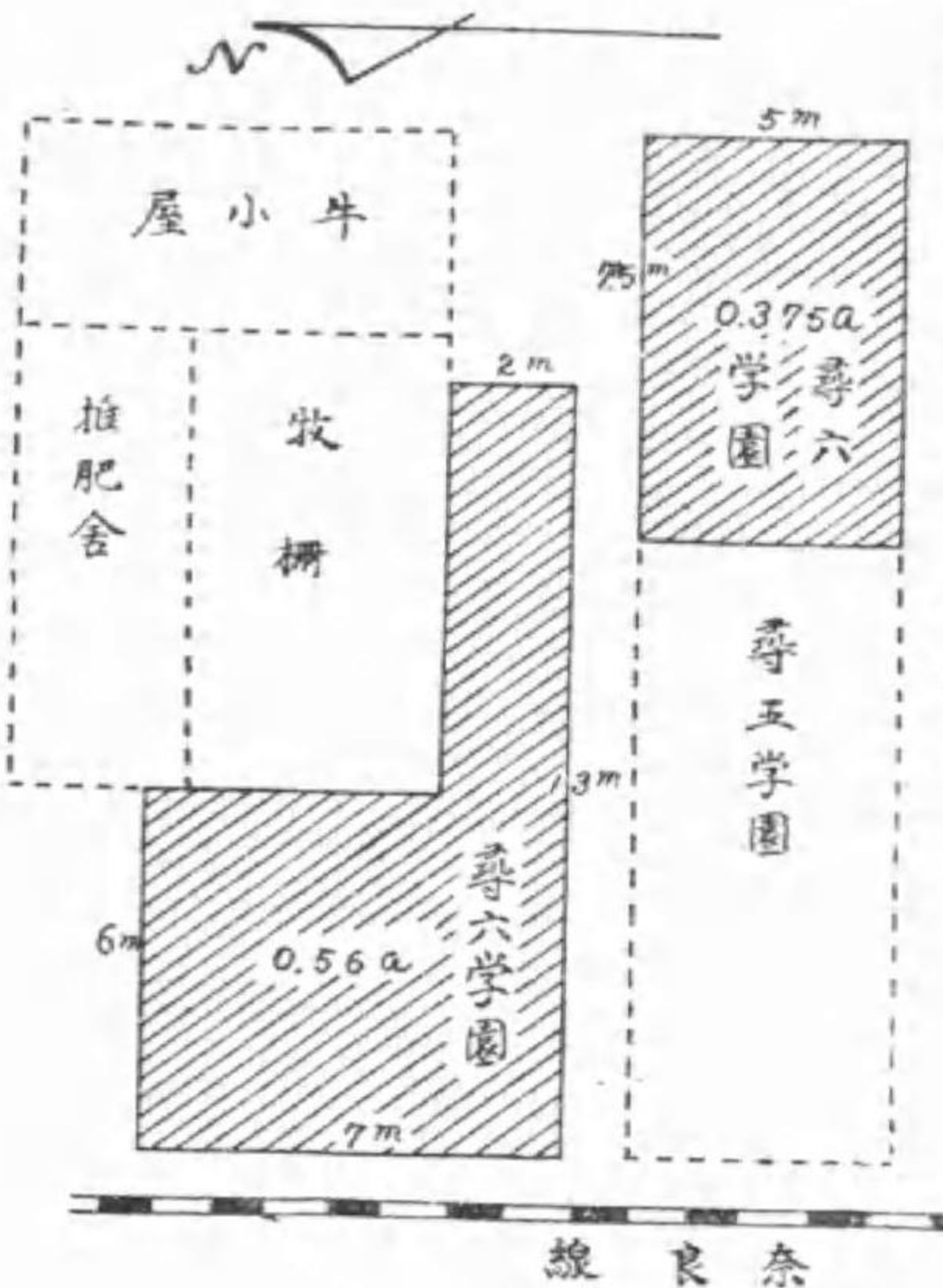
二三日の中に「私も玉挿し芽が出ました」「私も根さしが先  
生つきました」  
「先生六組芽が出かゝつてます」この報告有難いしつかり世話して早  
く大きくさせようね」  
第一學期も終らんとする数日前、一兒が兩眼に涙をたゝへて  
「先生、私さこの挿し木ありません」「ないさうしたのです」「ぬい  
て横にはつてみました」兒童の手には枯れかゝつた一枝があつた。同  
じ分團の者もそれを聞いて既けつける。誰やろ、ほんまに顔くら  
せる。

誰のいたづらか、あの骨折に對して  
あまりにも残酷な  
「八月の夏休みになつてからは、殆ど毎日、朝書、夕方水をや  
り来た兒童だが、召集日毎に、先生又一木ぬいてます」この泣聲、兒  
童たちの苦勞を知らないたづらつ子  
「先生こんなでしたら挿木してもあきませんわ」「しない方がましだ  
わ、ぬかんでもいいもの」「こんな事さへいふ」  
「それでも挿木の仕方おぼへたわ」「學園も美しくなつたわ」はけ  
まし役の子。

失敗に終つた挿木ではあつたが、兒童も私も共に色々教へていた  
きました。  
先生有難うございました。  
尋六の園藝

(訓導 齋藤 實)  
情に悴せば流れ、智に動けば角が立つ。——これは夏目漱石の言  
葉なのである。住みにくい浮世を知つてなぜ住まねばならないのか。  
夕べ近い路を行く時。夕日に映える雲を見て「あ、美しい」と思は  
ないものがあらうか。  
花を見、菜の葉に置いた露の緑濃き色を見て「これは僕等の作つた

A、學級園の位置及面積圖



B、作業部組織  
部長一名  
副部長一名  
係 五名  
計七名

尋六學級兒童數三十五名内七名作業部(學習、會計、衛生、運動部も各七名)部長は作業に關する傳達、整理等の代表者として活躍しつゝある。作業に對しては學級全兒童が協力するのであるが部長、副部長、係は一部の作業で全員を擧げなくともよい場合、毎日の學園管理に當る。

花だ。菜だ」さ喜び合ふ、それでこそ楽しみがある。兒童は生きてる  
る。一葉一花靜かに耳を傾けて聞きいる兒等に深い喜びを語つてゐる  
暑さ寒さに負けず、身丈よりも長い柄を振上げ、よろめきな  
打開いた島に今は肥えた土の黒ずんだのを見て、まだ芽をきつたばか  
りの妻の薄黄色いのをいたはる兒等の理屈で片付けるここの出来な  
い尊さがある。

興味と歡喜を覚え、毎日早くから世話する間に少しながらも甲斐の  
ある生活を續けてゐる。自然に樂します何の生き甲斐があらう。  
農は國本まで云はれる我が國が然も農村兒童に對して土に親しむ理  
屈なしの生活をさせることが必要でなからうか。

私は轉任當時まだ兒童の顔も覚えぬ或る朝の事であつた。飛んで來  
た一人の兒童が「先生僕等の學園へ行きませう」さしきりに引いた。  
云はれらまゝに續いた。その子は得意になつて細かく説明をしてくれ  
た。いつの間にか組中の兒童は集つてゐた、そして口々に喜びの聲を  
もらした。もう心の奥底まで私は動いてゐた何物かを覺えた。  
熱心だつた。眞剣だつた。その時兒童の魂が私の魂を呼びかけたの  
である。

それから今日まで續き進んだ尋六の園藝が、弱い腕にかくまで驚か  
される幾多の汗と魂の固りなる事實を見るに至つた學園について述べ  
てみたい。

一、經營

二、昭和九年四月以降作物栽培と賣上高表

年月日	品名	數量、回数	賣上高	備考(播種及管理)
九、四、二	水菜	第一回	一四九	
四、一、九	同	第二回	六六	
四、一、一	同	第三回	六六	
四、一、六	同	第四回	六六	
十、二、四	南瓜	第一回	四	四月十九日南瓜播種
十、三、〇	同	第二回	二	六月十八日赤五男學園
八、一、七	同	第三回	二	へ十五株分與す
八、一、五	同	第四回	二	(夏季休暇中毎日二)
八、一、九	同	第五回	二	(名交代にて當番)
八、二、〇	同	第六回	二	賣ること世話すること
八、二、三	同	第七回	二	
八、二、五	同	第八回	二	
八、二、七	同	第九回	二	
九、一、七	同	第十回	二	
九、二、九	つまみ菜	第一回	六	九月十三日聖護院大根播種
一、一、二	同	第二回	六	
一、一、一	同	第三回	六	
一、一、五	同	第四回	六	
一、一、五	同	第五回	六	
一、一、五	同	第六回	六	
一、一、五	同	第七回	六	
一、一、五	同	第八回	六	
一、一、五	同	第九回	六	
一、一、五	同	第十回	六	

昭和九年度收入總額一金七圓九十三錢也。會計部が預る。……學級費に繰込む。  
三、作業部日誌



### 第三節 學習指導案

△尋三 なんば・コスモスの植込 (指導者 橋本秀一)

一、日時 昭和九年六月十三日(水) 第二時限

二、場所 尋三學級園——運動場東

三、教材 なんば・コスモスの植込

四、要旨 兒童の生活に親しみ深いこの二つの文化財を我學級園に移植させ、みのりの秋まで、いや來るべき春までも生命を交流させて、兒童自らの生活を深め進展させたい。

五、教材觀と指導觀

(一) なんば・コスモスミ子供(教材觀)

- 1、なんばは中米及南米の原産にして、たうもろこしも云ひ、禾本科植物、コスモスはメキシコ原産にして、おほはるしやぎくも云ひ菊科植物、何れも兒童の生活にくつついてゐる。前者は食慾に、後者は兒童美學に。
- 2、本教材は綜合科に於ける筋肉的勞作教材であり、本學年に於ける主要教材である。

尋三に於ては ①豌豆・麥——尋二の延長として ②なんば・コスモス ③百合の教材である。

- 3、なんばは生産園藝の立場から、コスモスは裝飾園藝の立場から考察し、指導して行きたい。
  - 4、これ等の形・生態については無理に教へたくない。彼等が日々つかふ時、無言の中に又有意的に教へられるであらうから
- (二) 私の學級に於ける筋肉的勞作の足あき(指導觀)
- 1、一年生時代——今の場所、その荒地を子供と共に切り開いて春にはトマト・ナンバの定植をなし、秋にはカブラを栽培した一人々々に名札を立てさせてゐたもの、私は疲れて全く渾池

だが思ひ出は多い。

- 2、二年生時代——學級園を八つに分けて、各學習分園に擔當させた。春にはじやがいも、秋にはゑんきう、麥を栽培した。あの運動場の櫟の葉の散る頃、これを掻き集めて灰にしては畠に入れた。その頃から兒童の態度が目立つて自發的になつてきた。ほんまに土を愛し得たら、みんなに幸福であらうと思ふ。土こそ我が生みの親であり、育ての親であり、又同時に我行くべき墓場なのである。私は、久遠にあのすつきりした空この瑞々しい土を忘れたくない。

- 3、三年生——現在——この間豌豆と大麥との後始末をした。豌豆で四拾壹錢、麥で拾五錢、計五拾六錢の收穫を得た。金が價値の凡てではない。だが今後の教育に於ては、この經濟と生命の教育がガツチリ結び合ふ所に全き生命の教育が止揚せらるゝと信ずる。プロンスキーをけなす勿れた。この意味で全校生の勞作園、もつと廣いものがほしい。

六、區分 二時間取扱ひ

第一時——整地、施肥。 第二時——移植。(本時)

- 七、準備 苗コスモス・なんば。農具——鍬と熊手。小黑板——整地移植圖。體操時の身なりになつて。
- 八、指導過程

(一) 飛び行く子等の生命にのたねて——一時間と二時間の遊びの時間、畠を掘らせて植ゑる準備にいそませる。

(二) めあてを自覺させて——分園毎に全部を集めて、今時間の目標と順序を聞かす。

1、なんばとコスモスを移植すること

問答——實と花への思慕、ふる里への認識

2、植ゑる順序

生産園藝教材等作指導系統一覽表

月旬	尋一	尋二	尋三	尋四	尋五	尋六	高一	高二
四	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
五	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
六	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
七	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
八	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
九	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
〇	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
一	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
二	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
三	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下

尋三に於ては ①豌豆・麥——尋二の延長として ②なんば  
コスモス ③百合の教材である。  
3、なんばは生産園藝の立場から、コスモスは裝飾園藝の立場か  
ら考察し、指導して行きたい。  
4、これ等の形、生態については無理に教へたくない。彼等が日  
々つかふ時、無言の中に又有意的に教へられるであらうから  
(二)私の學級に於ける筋肉の勞作の足あこ(指導制)  
1、一年生時代——今の場所、その荒地を子供と共に切り開いて  
春にはトマト・ナンバの定植をなし、秋にはカブラを栽培した  
一人々々に名札を立てさせてゐたもの、私は疲れて全く渾池

七、準備 苗コスモス・なんば。農具——鍬・鋤・手。小黑板——整地  
移植圖。體操時の身なりになつて。  
八、指導過程  
(一)飛び行く子等の生命にゆだねて——一時間二時間の遊びの  
時間、鳥を掘らせて植ゑる準備にいそませる。  
(二)めあてを自覺させて——分團毎に全部を集めて、今時間の目  
標の順序を聞かす。  
1、なんばとコスモスを移植すること  
問答——實は花への思慕、ふる里への認識  
2、植ゑる順序

裝飾園藝教材勞作指導系統一覽表

三	二	一	二	一	〇	九	八	七	六	五	四	月旬
下中上	下中上	下中上	下中上	下中上	下中上	下中上	下中上	下中上	下中上	下中上	下中上	下中上
					チエリフ	開花			開花		朝顔	尋一
						開花		開花	菊挿木	百日草	開花	尋二
			開花		開花	松虫草			横挿木	コスモス		尋三
ほうせんくわ				開花	百合		開花		開花			尋四
けいどう	開花				水仙		開花	開花	開花	フジ挿木		尋五
梅木			開花			ナイト			開花		どりや	尋六
あな花						開花		開花				高一
尋一譲渡	開花					三色スミレ			開花	開花	いらく挿木 松杉挿種	高一(女)
				リンゴ挿木		石竹	開花		開花		カンナ	高二
				開花	開花	開花		開花		開花		高二(女)
高譲渡				開花	開花			開花				

①土をよく掘つて ②二列に溝を作つて③北にコスモス、南に  
なんばを植ふる。——移植圖を示して——

(三) 全靈を込めて——ものみな生けり。

陽をうけて、土の香を吸ひ、一寸づに二つ草植う、わらべ等尊  
し、我も共に歩む。

(四) 木蔭に憩ひて——我植ふし草を見つめて行く末を思はしむ。

(五) 後く、り——農具の手入を後始末、禮をして別れる。

## (二) 工作教育の實際

### 第一章 工作教育の理想

由來小學校には手工科を課し之に依つて兒童の物品製作の能は養は  
れ創造力は練習され而して勤勞愛好の精神を養成する等全人教育の立  
場より大なる功績を残して來た。之れ即ち眞の教育は必ず勞作體驗を  
通してのそれではなければならぬと叫ばしむるに至つた所以である。  
然し今靜かに過去の手工科の實際を反省する時、餘りに劃一的で、  
部會も田舎も一様で、たゞく、展覽會等の時の製作品を見る時、地方  
色郷土色は一切見ることが出來ず、加ふるに餘りに非實用的でしかも  
生産價値に乏しく全く經濟を超越した一遊戯手工に過ぎないまで極  
論し度いと思ふものもあつた。

#### 第一節 郷土に立脚せる工作教育

前述の様な缺陷を認める立場から、今後の手工は郷土の實際に密接  
な關係を持たなければならぬ。即ち郷土化といつてもよからう。  
兒童の日常生活の表現を完からしめんとするには彼等の環境の調査  
と整理とに留意して適切な教材を選ばねばならぬ。それ故兒童の實  
際生活中より教材を選ぶことは心理的、實用的の立場より見て郷土的

特色のものが兒童にまつてよりよい手工である。以上の意味に於て農  
村の工作は農村独自の材料を選択して農村の香りを濃厚に現し出すこ  
とが當然であると思ふ。

本校が綜合科工作系統に、櫻の實を拾つて人形をつくり、こしだを  
採集して筆巻を作らせてゐる等はその一例である。

#### 第二節 經濟と趣味に立脚せる工作教育

我々教育の對象は兒童である。全靈を没入した忘我の境地こそ誠に  
尊いものであつて利害關係にのみ終止することは決して願はしいこと  
ではない。然らば現在生産價値といふことを度外視した工作のみが果  
して全幅の價値を認められていゝものであろうか、我々の文化生活を  
して圓滑に何等の支障なく營ましめるものは經濟の力である。經濟を  
離れて生活なく又經濟を離れて教育はない。従つて無垢な天使にも矢  
張り誤らざる經濟價値の教育は必要であるに信する。前述の様に郷土  
化するこゝによつて材料は郷土に求めることになり、尙それが原産物  
の利用并に加工に於ては一層經濟上有利であり、又趣味の多いもので  
ある。これは主として材料に屬することであつたが教材そのものにつ  
いては實用的なものの趣味的なものを探り度いのである。それが直ちに  
以て家庭生活に於て、或は學校生活に於て役立つものであり度いので  
ある。

本校が綜合科工作系統中に細竹と細紐を以ておひつくりを作り、廢物  
の空瓶と古新聞を以て實用的な然も藝術的な花瓶を製作せしめる如  
きは全く此の精神に外ならないのである。

要するにより地方的で、より實用的で經濟的で、趣味的で而して材  
料は郷土の實生活の圈内に求める工作教育を望むものである。

かくして我々は捨て、顧みられざりし天與の恩惠物をして些かでも  
利用加工することに於て、郷土經濟に對して少しでも貢獻するところ

あらしむるに共に、愛郷心の啓培に努め、より明瞭な、より住みよき寺田樂土をなすべく全幅の努力を致す様指導し度いのである。

## 第二章 農産加工・農村工藝の必要性

### 第一節 農村の自給自足

日本は瑞穂の國である。農本主義の國である。農を以て大本とした我國人は自から働き、自から作り決して他の人に頼らない所謂自給自足の生活を遂げて来た。然るに世の中の進歩と共に分業が極度に進み其の結果は相互の間に連絡を抜き、統制を失ひ、遂に自給の爲の家内工業は壓迫せられて、生活に必要な物資は自分で生産する農産物以外は金を以て購入しなくてはならなくなつた。例へその金は小額でも多くの必需品があるが爲に農家も相當以上の現金を要することとなり、遂に我が農民をして今日の貧窮に陥れる一因をなさしめたのである。

然らば國家成立の基調をなせる農業とは如何なる内容を有するものであるか、それは言ふまでもなく我等農民自からの生活資源の根源をなすものであると共に更に一切の人類生活の基礎生産をなして人類の生命創造の根本を培ふものである。従つて農村は單に五穀を收穫し野菜を栽培するのみならず、凡そ一切の生活材は總べて農民の手によつて創り出さるべきものである。農工一如の境地、これが農業者本然の姿ではなからうか。物質文明を度外視せよ。元の状態に還れ。と言ふのではないが、自給し得るもの、範圍を力めて擴大し、こもすれば自然に叛いた生活に成り勝な状態から勇ましく振り歸る必要があると信する、この意味に於て農民生活をなす兒童に農産加工、農村工藝の觀念を興へることは實に當面の急務であり、痛切な要求であると信じて

### 第二節 余剰勞力の活用

農村はいちじろしく機械化せられ、米も麥も糶も凡てが機械力に依

つて生産せられ、草鞋は地下足袋に履き替へられ、夜の燈火は電燈に變るなま物質文化の程度が、きはだつて向上したのである。乍然農村全體の生産から之を眺むる時に、必ずしも生産が高まつて居ると思はれない。ランプが電燈に變つてみれば生産能率が高まつたかは問題である。稲扱白すりも機械力に依つて爲された結果、當然そこに勞働力の餘剰が出来る。この餘剰力が如何に分配されてゐるか、機械を使用して能率増進をはかると共に深く考へなければならぬ點である。月を踏んで山野に草を刈る時代を比して、金肥使用により餘剰勞力を如何に分配して生産の資とするか、金口にする者も種である。かくては機械に毒せられ、農家經濟の立ち行かぬ結果となるのも亦當然ではなからうか。

### 第三節 本質的教育價值

自分の家でこれたものを、自分の郷土にあるものを眞剣に考へて出来る限り加工利用することは我々生産を本當に明るく楽しいものにしてくれる。大自然に親しんで生産した生命の宿るその生産物に更に手を加へて新しいものをつくり出すこと、そこには言ふべからざる喜悅があり、満足があり、趣味が湧き全く藝術家の境地そのまゝである。誰れでも自作の製品に對しては無限の愛着心が湧くものである。他人が眺めたならば凡そ滑稽に過ぎない様なものでも其の作品を製作者の間に暖かい生命の交流が行はれるものである。

斯の如く、農村工藝、農産加工は人品を高雅にし、人間としての深みをつけ、更に工夫創作力を練磨し愛郷心を啓培するものである。かくして我々に等しく興へられた自然の恩恵物に對して更に新らしき價

値を生命を興へつゝ、そして魂の淨化を求めつゝ、足るを知る謙虚な生活を續けて行くならば農村不況の暗雲はこゝに一掃せられて洋々たる前途は明け赫々たる光明の彼岸は期して待つべきであらう。

## 第三章 工作教育の材料

### 第一節 工作教育に於ける男女の特殊性

國家の一員として社會生活に於て家庭生活に於て男女各其の性能に應じて異なる部面を擔當してゐることは今更喋々を要するまでもない従つて一般陶冶を目的とする小學校に於て特に工作系統教育に於ては實際生活の立場より其の性能に應じて教育すべく陶冶材を異にしてゐるのである。(但し高學年に於て)即ち女子に於て尋常四年より裁縫科が加へられ更に高等科に於て家事科が課せられてゐる如きは正に有力なる立證材料である。

即ち農村の男子は社會的に活躍して主として生産に全能力を傾注するに反し女子は家庭生活の中軸をなして主として消費方面に當つてゐるのである。故に本校に於ては、男子には生産の教育より更に進んで加工の教育へ即ち工業化への教育を指導すると共に郷土自然物の加工によつて農村工藝の趣味を養ひ、引いては郷土の振興に當らしめ度いと思ふのである。

女子に於ては特に家庭生活(衣食住)に於ける部面の指導が必要であると思ふ。即ち郷土材料を生かす家事裁縫であり、日常生活を尊重した家事であり、自給自足の生産品加工の家事であり、原始生産利用の家事であり度いと思ふのである。如何に縫ふかの裁縫も勿論結構であるが如何に繕つて使ふかの裁縫も尙必要であらうと思ふ。ホームライズミカポトランプミカイ片假名の六ヶ敷しい料理を知らしむる前に大根を、黑豆を、里芋を、しかも自家用醬油で上手に調理することを知らしめ度いと思ふ。

## 1、新系統一覽表

學年	新	統
尋一	ヒノマルノハ (タカミ)	水てつぼう (竹)
尋二	アランゴ (ナンバザク)	長いす (なんばちく)
尋三	ナ (ネンド)	かるた作り (がし)
尋四	コ (ドンダ)	おひな被作り (ボール紙)
尋五		かましき (古はがき)
尋六		かましき (古はがき)
高一		かましき (古はがき)
高二		かましき (古はがき)

2、教材選擇排列の標準  
(1)選擇の標準  
○兒童の生活題材たること

○他教科との關聯を考へること  
○郷土材料を使用し得らるゝものたること  
○廢物利用を考慮したること





二 半羊羹 羊きんと	郷土産物羊についてその料理法を研究し、單なる調理法よりよき郷土婦人への養育を培ひたい。	郷土産物羊についてその料理法を研究し、單なる調理法よりよき郷土婦人への養育を培ひたい。	郷土産物羊についてその料理法を研究し、單なる調理法よりよき郷土婦人への養育を培ひたい。
高利兵衛 お羊のお 鹽菜砂糖 天結露			

2、農村工藝指導要目

(1) 第一農村工藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
五	ヒノマル ノハタ	日の丸の旗、日本の旗、これを作ることに喜び、この旗を持つて遊戯する尙ほ國民的感懐を養ひたい。	七ノハタ ヒノマル ノハタ	運動場 日の丸の旗
六	ブランコ	なんばのちくを用ひて、ブランコを作らしめ、筋肉を通じての製作の歡喜を味はしめたい。	長いす なんば	教室 ブランコ
九	ナシ	粘土を材料として、梨を作らしめ、筋肉動作によつて物體構成の喜びを味はしめたい。	リンゴ	教室 ナシ、實物 標本
十一	コマ	なら、くぬぎ、かしはの果實を用ひて、童心にみちた茶村な手工品を作らせ、郷土にあるものは何でも考へて見る心を養ひたい。	人形 やじろべ コマ	教室 コマ標本

(2) 第二農村工藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
十二	(人形) り	農村工藝の基調として郷土産物「どんぐり」を主材料として野趣ある人形を制作せしむ。	やじろべ い(どんぐり)	教室 どんぐりの人形の製作
二	やじろべ い(どんぐり)	郷土産物「どんぐり」を主材料として科學的玩具としてのやじろべいを製作せしむ。	物の重さ 重力	教室 やじろべいの製作
三	かましき き	廢物利用の一として古書箱にてもかましきを指導し、古書箱の新しい意匠を見出し利用して行く習慣を養ふ。	長いす ないす 花便局 古新瓶	教室 かましきの製作

(4) 第四農村工藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
一	竹筒(竹)	竹を用ひて種々の筒を工夫製作させて農村工藝の趣味と創作の能を養ひ併せて、音は物の振動によつて發することを發見させる。	空 四 理 カ 竹 三 一 音	教室 竹筒の製作
天	蠟燭染 (たんぼ)	たんぼの圖案の蠟燭染を行はせて、染色の趣味及創作の能を養ふ。	七 たんぼ 草木染	教室 たんぼの蠟燭染

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
六	水でつば	兒童の遊びの生活に最も關係の深い水鉄砲を製作せしめ、之を水鉄砲の下で賞演せしめ、物理的嚴正なる科學的研究をせよ。	水鉄砲	教室 水鉄砲の製作
九	長いす	郷土の農産物であるなんばの葉を用ひて純真素朴な工藝品手工品を製作することを目的とする。	長いす	教室 長いすの製作
十二	かるた	かるた製作を通して、語句生活を廣め、深めてゆく。	かるた	教室 かるたの製作
二	つくりな	我國に於ける傳統的な雛祭に於ける雛の優美な雛祭を、之を共同製作するの趣意として生活に潤ひをつけた。	雛祭り	教室 雛祭りの製作

(3) 第三農村工藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
七	筆巻 (こしだ)	農村工藝の初歩として郷土産物「こしだ」を主材料として筆巻を作らしむ。	筆巻	教室 筆巻の製作

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
十二	(風) 竹	竹を用ひて風を作らせて正月の遊戯に使用させることにより玩具を自分で考案製作する趣味と創作工夫の能を養ふ。	竹 風	教室 竹製の風
一	(馬) 類	松かさを用ひて種々の鳥類を製作させて、農村工藝の趣味と創作の能を養ふ。	松かさ 鳥類	教室 松かさの鳥類

(5) 第五男農村工藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
十二	(版) 状	年賀ハガキは單に文字だけでは誠に無味なものである。之にイモ版を應用して、版畫に似た面白く、趣味的な版畫を高くめたい。	版畫 イモ版	教室 版畫の製作

(5) 第五女農村工藝指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教材	指導場所
六	立方體箱	立方體の箱を製作する事により正しき寸法の測り方を知らしめ、且第四第五の年賀に於ける空間觀念の確立をなす。	立方體 箱	教室 立方體箱の製作

六	夢祥小箱	本校総合科学習にて生産せし夢祥を用ひてボイル紙の箱の上に美しい夢祥糊工をなし工芸の趣味を養ふ。	尋五 稼	夢祥小箱	指導場所
十二	ハンケチの洗濯	児童が毎日使用せるハンケチを洗濯させる事により白地木綿の洗濯法を知らせた。	高一 家	井戸端 パケツ 粉石鹸 乾綱	指導場所

(6) 尋六男農村工芸指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教科	指導場所
七	蚊帳の吊り	物理的原理を応用して力学上の機構を取入れた蚊帳の吊りとして郷土の自然物を家庭用品として農村工芸の精神を養成したい。	尋五 手 尋六 手	竹細工 手工教室 蚊帳の吊り 工作用機
一	花瓶	瓶物とせらるゝ古新聞や空瓶を利用して風雅な花瓶や空瓶の趣味ははせるのであ	尋六 手 尋六 手	手工教室 瓶物教室 花瓶教室

(6) 尋六女農村工芸指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教科	指導場所
七	我家の掃	家庭掃除の目的を認識せしめ其の方法に科学的改善を加へると共に之を實踐させることによつて生活の改善、勤勞の美風を養成したい。	高一 家 高一 家	掃除 追進館 掃除道具

(8) 高二男農村工芸指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教科	指導場所
四	植木鉢	花に使用する植木鉢その他の草花に利用する植木鉢を空箱や廢物を利用して製作せしめ自製することの趣味を養成し物品製作に必要な計畫と實行との調和の實際を體驗させた。	高二 綜	裝飾園藝 鉢、鋸尺、工作園

第二節 體驗記錄

(指導者 竹村 繁野)

1、尋二かるたづくり  
イ、短文づくり  
「今日は、みんなが、お正月にして遊ぶもの——かるたを、つくりますせう」  
「鬼に金棒」  
「猫に小判」  
「芋にえたんごぞんじないか」  
「月夜にかまぬく、ほうけんごう」  
「そうく、皆、よく知つてゐるね。しかし、それは皆んな、人のつくつたものでせう」  
「ハイ」  
「二錢で買つてゐます」  
「一錢のこともあります」  
「大きいのは、もつこ高いぞ」  
「人の作つたのもよいが、自分で作つた物は、よけにおもしろい。作れますか」  
「作れます」  
「おもしろいな」  
「い何か考へられますか」  
「暫時——」  
「芋を食べてゐる子」

一	靴トジャ	靴下、ジャケツの結び方を練習させ、進んでは衣服の結びの必要を知らせると共に、節約利用の道を會得させ	尋四 裁 尋六 裁 高二 下 高二 二	雑巾 かとり縫 毛糸編 家の標 本	指導場所
---	------	---	------------------------------	-------------------------------	------

(7) 高一男農村工芸指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教科	指導場所
七	お盆	美術工芸の家庭化された家庭工芸として最も面白く、此の間に生活に參與し、経済的、美的、観念の興味を興へ生活にうける。	尋四 手 尋六 手 高一 綜	厚紙細工 花瓶 炭取 手工室
九	虫籠	製作的な立場に於て虫籠を製作せしめ、製作に於て静かに其の聲に聞き入る所まで發展せしめたい。	尋五 手 尋六 綜	竹細工 手工室 竹、糊、鋸、鉋
二	炭取	農村に於ける廢物利用として古新聞の炭取により實用的に子と古新聞の炭取を製するの趣味を養成し、農村工芸の趣味を養成したい。	尋六 綜	花瓶 手工室 古新聞、糊、針、糸、布、製

(7) 高一女農村工芸指導要目

月	題目	要旨	結合聯絡教科	指導場所
二	財布	農村に於ける家庭手芸として、此の間に生活に參與し、経済的、美的、観念の興味を興へ生活にうける。	尋六 綜	手工室 古新聞、糊、針、糸、布、製

「さうく、面白いね。ろ、は」  
「ろしあの兵たいさん」  
「出来るく、さうして作らうね」  
「はい、うまいぞ」  
「わかつたく」  
「兄等の首が右に、左に、振れる、振れる。」  
「用紙作り」  
「書紙にそゝがれた小さき全精神は、書紙面に所定の細い線となつて書かれた。」  
「出来た、御苦勞さま。しかし、次の仕事が待つてゐる。切斷だ。」  
「鋸のやうな切り方は、下手でしたね。一つも、ぎざ／＼の出来ないやうに、切れますか」  
「今度は、鋸の先に、細い線の上に、兄らの手は、魂は働く。」  
「うまいく、眞直に切れた！」  
「叫び、頭をかいてゐる子」  
「やがて、出来上つた短文は、斷ち切つた書紙の上に清書され、之を繪畫化される。兄らの眼は、紙の上に落されて、小さい紙の上に、幼い全精神が集中されてゐる。」  
「静かだ！唯、兄らの使ふ鉛筆・クレイヨンの微かな音が聞えるのみに」  
「しまつた！」  
「の叫びが、一同を驚かせる。」  
「一枚を書き終つて、片手に之を差出して眺めてゐる兒もある。」

兒らの心は、唯、來る可き正月の樂しさに走る。

創作喜悅の教育上の價値は、之に従事する兒童の眞剣なる態度に見ることが出来る。試みに讀書算の從來の教室から、手工室にうつり見よ。兒童の清新なる興味に動かされて活躍する態度が恰も別人を想はせる。此の内的喜悅の至情は、教育上絶大の効果あるを疑はしめない。

岡部爲吉 創作教育論

2、高女 芋 羊羹

(指導者 竹村 訓導)

芋こいへば寺田、寺田と言へば芋を思ひ起させる程、有名である寺田芋は、其の名に恥ないおいしい味を持つてゐる。

芋屋の看板は八里半で、其の味栗に近しいが、町辻に芋焼く臭は、栗に勝り、通行人の嗜好を誘ふ。

このおいしい芋も、恩に慣れては恩を忘れるのたこへ、芋の里に生きては、其の豊富な生産と、その美味と、養分(分析、蛋白一・四〇、脂肪〇・二〇、炭水化物二八・八〇)の、天恵に慣れては、一錢ドングリ、一片のういろ、羊羹を食するこゝを好む者が多くなつた。

美味なるものは調理するを要しないにしても、この世の傾向に應じて、時に之を調理し、家人の目舌を喜ばしめるのも、又、自他共に嬉しい事である。

十二月こいへばもう、大寒に劣らず寒い。

登校の包持つ手が冷い。

校門に入る。眼前、井戸端に洗ひ上げられた名物、寺田芋。

まだ早い校庭の朝に、白いエプロンが走る。

午後、高女が呼びに来た。家事室に行つて見るに、最早準備成つて各組盛に所定の分量を計つてゐる。

寒天と砂糖を分配する。

コンロに火を起す者、計つた芋を輪切りにする者、各々分業が始る皆々よい姉さん振りを發揮してゐる。

裏漉しなつて、寒天の煮汁に加へ、更に砂糖を加へてゐる火にかけて焙りつゝある時、最早出来上りを想ふての喜びが、語り合はれる流し箱に流しては、誰も、生みの見羊羹に、未だ固らぬ羊羹に、全身を奪はれてしまふ。

器に盛られた羊羹。

それはもう、あの臺灣形の寺田芋ではない。極簡単な調理法で、今は赤・白の羊羹となつて、一種の上品さをさへ持つ、寺田羊羹となつてしまつたのである。

附 録 重なる参考書目

- 勞作教育
- 勞作教育・郷土教育
- 勞作教育の理論と實際
- 農村教育企畫と實際
- 教育革新の本道
- 更生農村教育
- 日本精神教育經營の新機構
- 信念に基く我が郷土教育施設
- 郷土教育實際
- 小西 重直先生著
- 佐藤熊次郎先生著
- 日本教育振興會
- 檜崎淺太郎先生著
- 山崎 延吉先生著
- 山崎 博先生著
- 齋藤莊次郎先生著
- 船井郡明俊校編
- (執筆者の前任校)

昭和十年二月十五日印刷  
昭和十年三月二日發行  
【非賣品】

著者 京都府久世郡寺田尋常高等小學校  
發行者 京都府久世郡寺田尋常高等小學校  
代表者 今 西 誠 一  
印刷者 京都市伏見區御駕籠町 美濃屋書店印刷部

發行所 京都府久世郡寺田尋常高等小學校

終

78